
ウィングリサーチ ~ Hated Arrows ~

笠原綾乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィングリサーチ H a t e d A r r o w s

【Nコード】

N 2 3 8 3 B

【作者名】

笠原綾乃

【あらすじ】

ある組織の隠れみものとして存在する、私立高校の新聞部。そこに在籍する5人の生徒は、学校を舞台に起こる事件を「調査」するたれに選ばれた精鋭たち。今回彼らに告げられた『事件』とは？ この物語は実在の人物、場所、および出来事とは一切関係ありません

0・プロローグ

ゆっくりと、陽が落ちていく。

男は、空を一瞬見上げ、持っていたバッグから弓と矢を取り出した。

離れ離れになりながらも、この男が世の中で一番愛していた少女が永遠に旅立って行ったのは、
ちょうど一年前の春。

今日と同じ、赤く染まった空の下で、彼女は自ら命を絶ったのだ。

男がふと眼下を見ると、ひとりの少女がポニーテールにした長い髪を揺らしながら、ビルの近くにある河川敷を走っている。

何もなかったような顔をしゃがって。

おまえの……、いや、おまえらのしたことを俺が知らないと思ったら大間違いだ。

心の中でつぶやきながら、男は、少女に向かって弓を構えた。

(……許さない)

彼女がお前らに何をした？　ただ、夢に向かって精いっぱい
の努力を重ねていただけなのに、それを打ち碎いた。

彼女が愛していた、そして、男との細い絆をつないでくれていた、一本の矢で。

男は呼吸を整えて弓を引き絞り、矢の先端を少女に向けた。

少女を見つめるその瞳に、限らない憎しみをこめて矢を放つ。

弦が震える音を出した少しあと、悲鳴があたりに響き渡った。見ると、肩口を押さえてもだえ苦しんでいる。

その様子を目に焼きつけた男は、唇の端をくつとあげて目を閉じる。

しかし、心の中の少女は、青白い顔のままベッドに横たわり、起き上がってはくれない。

「まだだめなのか？ ……まだ」

つぶやいた男の脳裏に、もうひとり、少女の顔が浮かんだ。

……そうだ。この少女にさえ会わなければ、彼女は死ぬことなんかなかったんだ。

たとえ一生会えなくても、そいつにアーチェリーを教わりさえしなければ、お前は生きていてくれていたはずなのに。

そいつがいるから、きつと笑ってくれないんだな。その女さえ裁

けば、心の中の少女はまた起き
上がってくれる。そしてもう一度、笑ってくれるんだ。

「あと、ひとりだ……」

男は決意を声にして、その場をあとにした。

1・帰国子女

——ザンッ！

五色の的の中央に、矢が勢いよく刺さる。

弓を射るおさげ頭の少女の姿は、「新任教師」をテーマにアーチエリー部の練習場取材に訪れた、新聞部員のふたりの目を釘づけにした。

「すごい、きれい」

学校指定のダークグレーのブレザーに、同じ色のスカートを合わせて着ている新聞部所属の北村ほのかが、大きな瞳を輝かせてつぶやいた。同じ色の制服を着て傍らに立っている南昭太も、その言葉にうなずきながら、一心にカメラのシャッターを切る。

昭太がファインダー越しに見つめる彼女の動きにはひとつの無駄もなく、的を見えるその目は獲物を狙う女豹のように、鋭い。

カメラが追う少女の名前は、片山いずみ。

彼女は、昭太たちが通う名徳学園高等部に入学した直後、新入生対象の交換留学制度を利用してイギリスに留学。1年間、向こうの姉妹校で単位を取得しながらアーチエリーの修業に励み、帰国したこの春に昭太たちと同じ学年に復学した「帰国子女」である。

名徳学園は、「緑とスポーツの町」をスローガンにしている、人口約5万人の緑ヶ丘市の南部の水岡町に位置する、自主自律がモットーの中高一貫の私立校だ。

中等部と高等部の校舎が隣接する広大な敷地の奥には、体育館をはじめとした運動部の部室や道場のあるスポーツ棟が、グラウンドやテニスコートに囲まれるようにして立っており、この学園がどれだけスポーツに力を入れているかがよくわかる。

生徒数は中高合わせて600名ほどで、昭太のように中等部からの持ち上がり組もいれば、隣にいるほのかや、目の前のいずみのように、他の中学からの転入組もいる。

「まったく慎二のやつ、こんなときにどうして由紀を連れて行くかなあ。……大丈夫か？ ほのか」

ほのかの顔色が悪いことに気づいた昭太が、風になびく伸びた前髪をかきあげながら声をかける。

「平気よ。仕方がないじゃない。高原くんの約束の方が早かったんだし」

「そうは言うけどさ、こういった取材には由紀の腕が欠かせないんだぜ。それをわかっててあいつ」

「そんなこと言わないで。大丈夫だから。ね」

青い顔に笑みを浮かべるほのかに、昭太は内心あきれつつも、静かにうなずいた。

新聞部で、そしてある組織で顔をあわせるようになってからもうすぐ1年がたつが、昭太は、ほのかが怒りの感情をあらわにしているところを、一度も見たことがない。

その性格にやわらかな物腰、最近こそ増えてきたが、まだ少ない長い黒髪に白い肌の持ち主とくれば当然、男子生徒からの告白はあとを絶たない。

しかし、昭太に打ち解けてくれたのがつい最近、というくらい人見知りが激しく、おとなしい少女の前では、どんな美男子も全戦全敗。昭太に言わせれば、そうとうの『お嬢様』だ。

笛の音が、練習場にひびいた。

「よし、今日の練習はここまで」

この春、名徳学園の非常勤講師に就任した、アーチェリー部の新しい顧問の乾良彦が集合をかける。その声を合図に、白い練習着を着た部員たちが一斉に集まった。

「三週間後に大会が迫っている。各自、健康管理に十分気をつけて、実りある練習をするように。」

「ありがとうございました！」

今まで続いた緊張感から解放された部員たちが、各々談笑しながらスポーツ棟へと引き上げていく。

「すまないな。待たせてしまつて」

乾が、昭太とほのかのほうへ近づいてくる。

背が高く、端正な顔立ちをした乾は、着任早々全校の女子生徒の憧れの的になっている。それを表すかのように、乾を間近で見たほのか、珍しくほんのりと頬を染めて訊ねる。

「いえ。お時間大丈夫ですか」

「ああ。おい、片山。今からここ使つから、ちょっと席をはずしてくれないか？」

ほかの部員が引き上げたなか、ひとり練習を始めようとしたいずみが、カメラを持っている昭太に近づいてくる。

「あ、新聞部の取材かあ。私も撮ってもらおうかな。ダメ？」

昭太に向かって言った言葉は、どこまでも屈託なく、明るい。

小柄ながら、しっかり鍛えられている身体と、やや目が小さく、全体的に幼さの残る顔立ちは、どこかミスマッチな印象を受ける。

「だめだ。今日は先生が主役なんだから。30分から1時間くらいで終わるから、グラウンドでも走って来なさい。第一、言葉使いには気をつけろってあれほど言うてるだろう」

乾が、いずみに軽くげんこつを見舞ってたしなめる。

「いったあゝ。ちょっとくらいいいじゃないですか。ケチ」

軽く舌を出して、いずみが片づけを始める。

「明るい人なんですね。片山さんって」

さつきまで見せていた雰囲気とはうって変わった表情に、ほのかは驚いたように乾に言った。

「ああ。もうすっかりみんなに溶け込んでいるよ。かえってうるさいくらいだ」

乾がいずみの後ろ姿に目をやりながら、ほのかにそつと耳打ちをする。

男性に免疫のないほのかは、それだけで耳まで赤く染めて、少し固まってしまふ。

「じゃあ先生、行ってきたあす！」

「おう、気をつけろよ」

昭太たちに軽く手を上げて、いずみがグラウンドへ駆け出してい

く。

「悪いことしちゃいましたね。すみません」

昭太が頭を下げる。

「いや、気にすることはないさ。1時間もしたら戻ってくるから」

乾が笑いながら、2人の肩を叩いた。

2・緊急招集

昭太とほのかが取材を始めたちょうどその頃、校舎の東側に位置する、日当たりの悪い、すすけた壁と本棚に囲まれた新聞部の部室内で、電子音が鳴った。

本を読んでいた部長の村上正樹が、中央のデスクにあるノートパソコンを開く。

見ると、待受画面の下に『WR』と記された赤い封筒マークを見つけた正樹は、キーボードを操作し始めた。

『WR』ーウイングリサーチーとは、学校を隠れみに起こる、警察が介入捜査しにくい事件を解決するために全国の学校に組織した、学生調査機関のコードネームである。

各学校に5～10名の調査員があり、ここ名徳学園では選ばれた5名の生徒が新聞部に所属し、部活動と並行して調査を行っている。

あくまでも『調査機構』なので、警察組織とは言えど逮捕権などの権限はなく、拳銃などを所持していたら銃刀法違反でこっちが逮捕されてしまう。

調査の内容、資料などはすべてパソコンからEメールで送られ、それを開くパスワードは各校支部のリーダーにしか知らされていない。

ウィングリサーチ名徳学園支部のリーダーである正樹がパスワードを打ち込むと、『依頼』の内容が画面に表示された。

『アーチェリー選手を狙った暴力事件が発生。3週間後のアーチェリー全国大会をめどに至急調査し、概要を報告せよ』

依頼の内容に目を通すと、他校の生徒ばかりが被害に遭っている。それと照らし合わせると、3週間という調査期間はあまりにも短い。

（急がなければ）

そう判断した正樹は短く文章を打ち込み、表示された4つのアドレスに一斉に送信した。

名徳学園にほど近い山間のレース場で、青空の下を、何台ものバイクが周回する。

風を切るバイクのエンジン音を聞きながらシャッターを切る、しなやかな体形の少女の耳に、携帯電話の呼び出し音が短く鳴り響く。

「まったく、何でこんなときに鳴るかなあ」

決定的チャンスを逃したショートカットの少女、添嶋由紀は、ふてくされつつも手に持っていた一眼レフのカメラを置き、ポケットから携帯電話を取り出した。

見ると、アンテナが赤く光っている。これは『緊急召集』の合図だ。

「慎二くん！」

由紀は、コースを周回している赤と黒の入ったバイクに乗っている少年に向かって手を振る。

目に入ったのか、輪から外れた少年が徐々に速度を落として由紀のもとへと近づく。

「何だよ、由紀。今絶好調だったんだぜ」

慎二と呼ばれた体躯のいい少年が、ヘルメットを脱いでスポーツ刈りの頭をかきながら、手招きした由紀の前に立った。

「それはこっちも同じよ。——これ」

由紀は、高原慎二の目の前にアンテナが赤く光った携帯電話をかざす。

それを見た慎二の表情が、一瞬で洪くなる。

「召集、か」

「そ。早く帰らないとまた村上がうるさいから」

「了解」

ため息まじりに返事をした慎二に目をやりながら、由紀は、何かを振り切るように機材の入ったバッグのファスナーを思い切り閉めた。

「あゝ、終わった終わった」

乾への取材を終えた昭太とほのかは、渡り廊下を使ってスポーツ棟から校内に戻り、部室へと戻っていた。

「そういえば、片山さん戻ってこなかったけど、まだ走っているのかしら？」

ほのかに言われて、初めて気づく。

話が盛り上がり、一時間という取材時間をオーバーしていたにも関わらず、いずみは練習場に帰って来なかったのだ。

「そうだな」

「ねえ、グラウンドに行ってみない？　もし走っていたら、終わったって教えてあげなくちゃ」

ほのかの言葉に、昭太は驚く。練習中、緊張の続く空間にいるだけで顔を青くしていた彼女にしては珍しい発言だ。

おっとりしているように見えて、人間に対する観察眼は新聞部員のだれよりも鋭く、ささいな感情の揺れにも敏感だ。

出会う前のほのかに、何があったかは知らない。

しかし、小学部から通っていた名門、清愛女子学園の高等部進学を蹴ってここに来たというからには、きっと、複雑な事情があったのだろう。

昭太はほのかにうなずいて、今来た道を引き返そうと歩き始めた。すると、ほのかの持っていた携帯電話が鳴り始める。

ほのかの手に乗った、白い機種先端が赤く光っている。――『依頼』だ。

「ほのか、先に戻ってろよ。俺が片山の様子見てくるからさ」

「わかった。それじゃお願いね」

そのまま部室へ向かったほのかと別れ、昭太は玄関から外へと出て、スポーツ棟のほうへと歩き出す。

真っ赤な夕焼けを見ながらしばらく歩くと、スポーツ棟の前のグラウンドを、真剣な表情で黙々と走るいずみの姿が見えた。

あんな風に真剣に、何かに取り組んだことが、昭太には今まであっただろうか？

「片山！ 取材終わったぞー！」

昭太の声に気づいたいずみが、立ち止まって手を上げたそのとき、正体不明の音とともに、彼女のすぐ横を何かが通り抜けた。

目をこらして見ると、いずみが立っている左後方に、何かが突き刺さっている。

「片山！ 逃げろ！」

彼女の身に危険が迫っている。

そう直感した昭太はとっさに叫び、いずみのもとへと駆け出した――。

3・『第6』の事件

昭太は、身動きできずにいるいずみの腕を引っ張り、グラウンドの隅にある水飲み場まで走り抜ける。

「な、何なの？　いつたい。……キャッ！」

コンクリートに当たってはね返った矢からいずみをかばい、昭太は辺りをうかがった。

しかし、犯人の姿はどこにも見当たらない。

「おい！　どうしたんだ！」

ふいに、グラウンド脇にある駐輪場のほうから声が聞こえた。

目を向けると、自分やほのかと同様、緊急招集を受けて戻ってきた慎二と由紀が、こちらへ駆け寄ってくるのが見える。

「由紀、この子頼む！　慎二！」

「おう！」

いずみを由紀にまかせ、昭太は慎二とともに校門のほうへと走り出す。

スポーツ棟を抜け、その前にある校舎を曲がると、1台の赤い車

が、猛スピードで走り去っていくのが見えた。

「くそっ！ あれだ！」

はき捨てた慎二が、すぐそばに置いてあった、原付バイクにまたがる。

緑色のバイクは持ち主がすぐに乗るつもりだったのか、エンジンがかかったままになっていた。

「お、おい！ それ……」

「だれのだって構うかよ！ 昭太、あと頼んだぞ」

そう言ってヘルメットを被った慎二が、バイクを発進させた。

バイクや車のたぐいが大好きな慎二には、犯罪などにそれらを使われるのが、ことのほか許せないらしい。

しかし、他人のバイクを無断で拝借して行くとは……。

（何て奴だ。 あいつは）

昭太は心の中でつぶやき、大きなため息をついた。

校内で起きた突然の事件に、残っていた生徒と教職員は騒然とな

った。

グラウンドでは、警察による現場検証が行われており、野次馬と化した多くの生徒を、数少ない教師が必死に押しとどめているのが、昭太と由紀のいるスポーツ棟の廊下からもよく見える。

「……遅いわね」

「ああ」

襲われないずみは今、目の前にあるアーチェリー部の部室で、別の刑事の事情聴取を受けている。いくら学生調査員といえど、昭太たちは立入禁止だ。

「ご苦労様です」

警視庁の新米刑事で、ウィングリサーチとのパイプ役でもある小倉みつるが、事件を聞いて駆けつけた正樹とともにやって来て、敬礼をする。

今年の春から名徳学園支部の担当になったこの青年は、ぼさぼさの頭に、警官らしかぬひよろつとした身体を、いつもヨレヨレの背広で包んでいるのだが、昭太には、その姿がどうも貧弱に見えるてしかたがない。

彼の隣にいる正樹だって細い身体つきだが、目鼻立ちのはっきりした、精悍な顔のせいかな、貧弱と思ったことはない。

「助けたのがあなたたちで、助かりましたよ」

小倉が、そつとふたりに耳打ちをした。

「小倉さん。もしかしてこれは」

正樹が険しい表情で訊ねる。小倉はうなずいた。

「計画的犯行の可能性が高いです。犯人は、例の事件と同一犯人が
もしれません」

「例の事件って？」

「片山さんの聴取が終わったら、部室で説明します。検証もだいた
い済んだようですし、ここでは
話になりませんから」

小倉が厳しい表情で、由紀に答えた。そのとき、慌ただしい足音
が、昭太たちの耳に入ってくる。

角刈りの頭に鉢巻き、小汚いトレーナーに、破れたズボンをはい
た恰幅のいい中年の男性が、
青ざめた表情で走ってきた。

「あなたは？」

「娘は？ いずみはどこなんだい？」

昭太の問いに答えず、男性はかすれた声で息も絶え絶えに訊ねて

くる。

「片山いずみさんの、お父様ですか？」

今度は小倉が訊いた。しかし目の前の男性はいきなり小倉の胸ぐらをつかんで、さらに問い詰める。

「うちの娘はどこにいるって聞いてるんだ！ 答えねえか！」

「片山さんは今、警察の人が話を聞いてます。とにかく無事ですから、落ち着いて下さい」

見かねた由紀がふたりの間に割って入る。

「……あ、ああ。そうか」

いずみの父親らしき男性は、気の抜けたような表情で手を離れた。

「片山さんのお父さんですね？ お話をお伺いしてもよろしいでしょうか」

咳き込みながら、おっかなびっくりといった様子で小倉が訊ねる。すると間の前の扉が開き、

刑事に連れられたいずみが顔を出した。

「お父ちゃん、みんな」

笑顔を浮かべて、いずみが手を振ってくる。

「いずみ、お前大丈夫だったのか？」

「うん、全然。けがもなかったし」

青ざめている父の問いにも、いずみはあっけらかんと答えてみせる。

彼女の父はもちろんのこと、昭太に由紀、それに正樹と、隣にいた小倉たち刑事ですらあざんとした表情で、いずみを見つめた。

「と、とにかく今日のところは帰っていただいて結構です。片山さん、後日またお話を伺うことになると思いますので」

「はい。それじゃ失礼します。……あ、南くん」

「え？」

刑事に向かって礼をしたいはずみに、振り向きざまに名前を呼ばれた昭太は驚いて視線を送る。

「助けてくれてありがとう！　じゃあね」

（……おいおい。襲われたんだぞ！　なのに、何であんな平気そうな顔で帰れるんだ？）

「ずいぶん度胸ありそうね。彼女」

満面の笑みを浮かべて手を振り、帰って行くいずみの後ろ姿を隣で見ていた由紀がつばやく。

「
ああ
」

信じられない気持ちで見送りながら、昭太は由紀にうなずいた。

4・依頼 その1

昭太が、正樹たちと連れ立って新聞部に戻ってきたのは、午後七時過ぎだった。

いつもなら、守衛が見回りに来るところだが、今日に限って言えばそれはない。

職員室では臨時の会議が開かれており、今後の対応を協議しているという。

「片山さんは？ どうしたの」

「親父さんに連れられて帰ったよ。えらい心配している横で本人ケロツとしてるんだから。参るよな」

心配そうなほのかの問いに、昭太はあきれん気持ちを隠さずに答えた。

「俺のだったらどうにかなったけどよ、やっぱり原付じゃ追いつけないよな」

校内から走り去った赤い車を追って飛び出した慎二の尾行は、どうやら不発に終わったらしい。

「ナンバーはわかりませんでしたか？」

「見えなかった。マフラー改造して、排気ガスが多く出るように仕組んであったし。ったくよ」

よほど悔しかったのか、小倉の問いに答えた慎二は、胸元で拳を作って両手を合わせる。

「普通乗用と原付じゃ排気量が違うもの。仕方がないわよ」

「元気を出して。高原くん」

由紀とほのかが、口々に慎二をなぐさめる。

その間にも、正樹がコピーした資料を無言でそれぞれに配っている。校内での事件ということで
気が立っているのか、珍しく表情が険しい。

「ちょっと待って。期間のメドが三週間なんて、ずいぶんめっちゃくちゃじゃないの」

コピーに目を通した由紀が、早速小倉にくっついてかかる。

「仕方がないですよ。添嶋さん。一件をのぞいて、すべてが学校の敷地内で起こったことなんです。我々が概要をつかんだのが、河川敷での事件が起こった約二週間前。情報を集めるのにも苦労したんですから」

小倉が、困ったような表情で弁明する。

「でも、私たちの本業は勉学よ。両立もラクじゃないんだから」

たしかに由紀の言うとおり、学業と調査の両立は容易ではない。

上層部が必要と判断すれば、事件の起きている近郊の学校への転校もありえるし、調査中の身の安全も、完全に保障されているわけではない。

しかし、この添嶋由紀という少女に、それがすべてあてはまるとは思えない。なぜなら。

「それは、全部の授業を真面目に受けてから言うセリフじゃないのか？ 由紀」

慎二が笑いながらちゃかしたように、由紀は、単位取得に必要な最低限の時間しか授業に出席していないからだ。

もちろんテストは一夜漬け。ほとんどを同じクラスにいる優等生、ほのかのノートに頼ってきたのだから、よく進級できたものだ、と昭太も思っている。

しかし。

「あんまり人のことは言えないんじゃない？ ね、慎ちゃん」

由紀の言うとおり、慎二も彼女と似たり寄ったりで、職員室のブラックリストに名を連ねているのだから、人のことは言えない。

「その『慎ちゃん』っていうのやめろよ」

当の本人は、図星を指されたことよりも、由紀に「慎ちゃん」と

言われたことが気に入らないらしく、そつぱを向いてはき捨てる。

「おゝこわ」

そんな慎二に、由紀は肩をすくめてまぜっ返した。

「おまえなあ！」

「もう、二人とも止めてよ。話が全然進まないわ」

心配顔のほのかが、間に割って入った。

「北村さんの言うとおりです。喧嘩なら、外でやってください」

小倉が、いつになく張り切ってほのかの後に続く。

「あなたなんか言われたくないわよ」

心底嫌そうに、由紀が小倉に向かって言い切った。

「由紀」

顔色が変わった小倉に気づかうような視線をやりながら、ほのか
が名前を呼んだ。

由紀が、少し困ったような表情を一瞬だけ浮かべる。そして。

「……わかったわよ。ほのか」

穏やかに由紀が応じると、ほのかはほっとしたような笑みを浮かべた。

しかし……。

昭太に言わせれば『お嬢様』のほのかと、報道カメラマンを目指し、常にカメラを持ち歩いて外を飛び回っている、男顔負けの行動力を示す由紀。

まるつきり正反対なのに、昭太が知り合ったときにはもう、姉妹のように仲が良かった。

「……あれ、こいつ」

去年のことをぼんやりと思い出していた昭太の横で、ひとり憤慨していた慎二が、一枚の写真を手にとってつぶやいた。

昭太は後ろから覗き込んだ。すると、メガネをかけた優等生タイプの少女が、無表情で写真に納まっていた。

江頭透子。名徳学園と同じ、スポーツで有名な青陵高校の二年生、と傍らの資料に記されている。

「知ってるのか？ 慎二」

別の資料に目を通していた正樹が、顔を上げて訊ねる。

「ああ。俺と同じ中学。確かこいつもアーチエリーをやってたんだ

けど、すごく嫌味や奴でさ」

「仲良くはなかったわけだ」

「当たり前だろ。ちよつとアーチエリーの成績が全国レベルだからって、偉そうでさ。俺が道具に触ろうとしたら『あなたなんかに触られたくないわ』ってすごい剣幕で怒鳴るんだぜ」

「……何それ。超ム力つくんだけど」

「だろ？ 人を完全にバカにしゃがってよ」

先ほどの言い争いはどこへやら、こたわりなく話す二人に、慣れない小倉はあ然とし、昭太はほのかと視線を合わせて苦笑いする。

「江頭さんを知っているなら話は早いですね。高原くん、交友関係を中心に彼女の身辺を探っても
らえませんか？」

「いいけど……どうして、交友関係を調べる必要があるんだ？」

「江頭さんをはじめとした被害者が狙われた原因に、怨恨の可能性があるからです」

「怨恨？」

思わず訊きかえした昭太に、小倉が真剣な眼差しを向けてうなずいた。

5・依頼 その2

小倉の口から発せられた「怨恨」の文字に、昭太は隣にいたほのかと顔を見合わせた。

「はい。これを見てください」

パソコンの前に座っていた正樹が、キーボードをたたき始める。

「なんだ？ これ」

「……矢傷？ それも、左肩ばかり」

画面を見た慎二と由紀が、小倉を見る。

「今日襲われた片山さんを含め、被害者が襲われたのはいずれも夕方。薄闇の中で、犯人は確実に被害者の左肩を撃ち抜いており、全員、再起不能に追い込まれています。犯人は、相当の実力者とみて間違いありません」

「再起不能……」

つぶやいたほのかの声が、震えている。

「小倉さん、江頭はいつ襲われたんだ？」

「江頭さんは二週間前に、相模市を流れる水無瀬川みなせがわの河川敷で襲われています。順番

から言っと、一番最後ですね。今は相模市の総合病院に入院しています」

「グリーンメディカルじゃないのか？」

驚いた昭太は、慎二に答えた小倉を見て訊ねた。

緑とスポーツの町を自認するこの町には、今春建て替えられた私立総合病院のほかに、スポーツ選手御用達のグリーンメディカルセンターがある。

たとえ学生でも、全国レベルのスポーツ選手なら、紹介状なしでも入院・治療が可能なはず。それなのに。

「はい。ご両親が『再起不能なら入れる必要はない』と転院させたようです」

「それって、ていのいい厄介払ってことよね？」

小倉が、由紀の問いにうなずく。

「事情聴取に足を運んでも、娘のことは弁護士にまかせてある、の一点張りで、見舞いにも行っていないそうです」

「仮にも親だろう？　なんでそんな」

カチンときた昭太の問いには、慎二が答えた。

「あいつん家は確か、父親が一流企業の重役で、母親が青陵のPTA会長なんだよ」

「スキャンダルはご法度、か。よくある話よね」

雑誌の編集長を父に持つ由紀が、さらりと言つてのける。

「でも、その5人は青陵学園の生徒でしょう？ どうして、襲われなければならないの？」

「共通点は、アーチェリーの選手ってことだけだしね。大体、ウチの生徒で襲われたのが片山さんだけなら、転校しなくちゃいけないんじゃないの？」

ほのかの言葉を受けて、由紀が訊ねた。

「そうですね。本当は高原君にお願いするのがベストなんですけど、片山さんの護衛のこともありますし、添嶋さんにもお願いしても大丈夫でしょうか？」

「いいわよ。制服や部活動の手配、お願いね。あ、それとこの資料、借りてもいいでしょ？」

正樹のほうを振り返り、由紀が訊ねる。

「またあれか」

「そう。見る限り、被害者全員がこれだけの成績修めてるんだもの。叩けば何か出てくるわよ。あと、片山さんのもお願いね」

手元の資料を改めて見ると、被害者はいずれも学生選手権やJr
大会のタイトルを持っていても

のばかりだ。中には、シニアの大会で上位に入っているものもある。

「わかった」

「ちょっと村上くん、困りますよ。勝手に」

話が成立した由紀と正樹の間に、小倉が割って入る。

「しょうがないだろ、小倉さん。情報収集じゃ由紀の右に出るもの
はいないんだからさ」

「そう。由紀には転校してもらわなきゃなんないんだから。これく
らいは、なあ」

「小倉さん。お願いします」

昭太と慎二の言葉には難色を示していたのに、ほのかが頼んだ途
端、小倉の表情がゆるむ。

「北村さんのお願いなら……」

ほのかのことを見つめる小倉の瞳は熱を帯び、白くこけた頬が真
っ赤に染まっている。

「……ばっかじゃないの」

昭太の後方から、感情のまま言葉をはき捨てる、由紀の声がした。

昭太はようやく納得した。由紀が小倉を毛嫌いするのは、軟弱そうなのがほのかに想いを寄せているのが氣にくわないからなのだ。

由紀に背を向けたまま、昭太は笑いをこらえた。ふと横を見ると、慎二も由紀の感情に気づいたのか、必死に吹き出すのをこらえている。

「とにかく、今日はもう遅いからこのへんで解散しよう。明日から調査を開始しますので、小倉さん。片山さんの資料お願いしますね」

ゆるんだ空気を察したのか、正樹が咳払いとともに釘を刺す。

昭太は慎二と顔を見合わせ、バツが悪そうにうなずいた。

5・依頼　その2（後書き）

いつもおつきあい頂き、ありがとうございます。作者の笠原です。
新年はこのお話からスタートしますが、『花ぐるま事件帳』と並行して更新して行けるよう、頑張りたいと思います。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

6・調査開始『怨恨』の影

「訊きたいことって、何？」

翌日の放課後。早速慎二が行動に出た。

依頼された事件が起きる直前まで青陵高校に通っていた昔のクラスメート、田中さゆりに強引にアポイントを取って会う約束をしたのだが、中学時代の快活な彼女はどこへ行ったのか、慎二を見ないまま、うつむいている。

ここは、名徳学園近くの喫茶店。時間はすでに午後五時を過ぎしており、会社帰りのOLや、学生達で店にはぎわっている。

「お前、転校したんだな」

青陵高校の上下紺のブレザーではなく、隣町の公立高校の黒のセーラー服に、さゆりは身を包んでいる。

彼女の背中まであった茶色く長い髪は、黒いショートボブになり、化粧をしていた中学時代とはうって変わって素顔のまま。どこことなく顔色も悪い。

「うん。あんな事件があったから親が心配して。そういう子、多いのよ」

「事件、って。あのアーチェリーで肩を射抜かれたってやつだろ？部活違うんだから、お前関係ないじゃん」

目の前に運ばれたアイスココアを豪快に口に運び、慎二はさゆりを見る。

しかし彼女は（慎二のおごりである）レモンティとシフォンケーキには手をつけず、一点を見つめたまま身動きもしない。

「話があるなら、早くしてもらえないかな。親がうるさいの」

「お前らしくないな。中学んときは門限なんて気にしないで、俺らと遊びまわってたじゃないか」

こんな調子では、透子のことを訊きたくても、言い出すことが出来ない。ならば。

「実はさ、俺のダチ…って言っても女なんだけど、親の都合で青陵に転校することになったんだ。それで、何かいい部活紹介してくれないかと思ってさ。運動神経いいから、何でもできるぜ」

「あんなところに？ 止めたほうがいいよ！」

突然立ち上がったさゆりに、慎二は驚いた。なごやかに談笑していたほかの客達も、息を詰めて慎二たちのテーブルを見守っている。

「何かあったのか？ 青陵で。そうなんだろう？」

声をひそめて訊ねた慎二を見ずに、さゆりは、かばんを持って駆け出した。

慎二は慌ててレジで支払いを済ませると、さゆりを追いかける。

中学時代はお互い陸上部で、ほぼ同じタイムだったが、今は慎二のほうが速い。

人ごみを逆走していくさゆりにあっけなく追いついて、彼女の手を取った。

「おい！ いったい青陵で何があったんだよ？」

「透子たちがあんなったのは、自業自得よ。……ううん。あんな学校の生徒代表だよ。いつかみんな、ああなるんだから！ だれかに復讐されるんだから！」

思いのたけをすべてぶちまけたさゆりが、慎二にすがりついて泣き出した。

あんなに、元気だったさゆりが。

人を決して悪く言うことなく、クラスの人気者だったさゆりが、こんなことを言うなんて。

泣きじゃくるさゆりの肩に手を置いたまま、慎二は、呆然と彼女を見下ろしていた。

『いじめ?』

「……ああ」

泣いていたさゆりをなだめ、大方の理由を訊き出してから送り届けた慎二は、部室にいらつという由紀に電話をかけた。

「アーチエリー部はもとより、運動部はほとんどそうだとさ。それに、運動部の連中は文化部をバカにしていて、そいつらもターゲットになってるらしい。……お前さ、向こう行かないほうがいいんじゃないの?」

『何を今さら。転校手続きも部活の手配も済んだって、つい今しがた、小倉さんから連絡あったのよ』

「だけどさ」

『女だと思って甘く見ないでちょうだい。それくらいの覚悟はできてるわよ』

心配する慎二とは裏腹に、由紀の声はどこまでも頼もしい。

『だいたい、私は友達づくりに行くんじゃないの。事件の真相を探るためじゃない』

「はいはい。由紀さんを甘く見た俺が間違っていましたよ。で、ほかは？」

『村上はほのかと一緒に警察行つたわよ。資料とりに。で、昭太くんは片山さんの家。慎二くん、これからどうする？』

さゆりには会つたし、とりわけ今日はすることがない。

「そつち戻るよ。確か、新聞の×切来週だったよな」

『助かる〜。私一人でてんてこまいしてたのよ。よろしくね』

電話を切つて、慎二は、バイクを置いてある緑ヶ丘駅まで歩き出した。

透子のことを訊き出す以前の問題だ。

青陵学園にはびこる『いじめ』。

さゆりの言うとおり、もしそれが、透子たちが襲われるきっかけだとすれば、なぜ、唯一学校が違つていずみが、狙われなければならないのだろうか。

昭太やほのかの話を聞く限り、いじめに加担しそうもない、明るい彼女が、なぜ――。

思いをめぐらせていた慎二の耳に、ふと、女の子の笑い声が届いた。

同じ制服を着た女の子達が、笑いながら駅へと吸い込まれていく。

それを見た慎二の脳裏に、さゆりの泣き顔が重なった。

（あいつも、ああいう風に笑ってたのに、な）

やるせない気持ちをもてあましながら、慎二は、駐輪場に置いてあつたバイクのエンジンをかけた。

7・見舞い

『アーチェリー。16世紀後半に、イギリスを中心にスポーツとして発展した。日本には、1939（昭和34）年に朝日新聞の記者によって紹介され、当時は「洋弓」と呼ばれた。1966

（昭和41）年に、全日本アーチェリー協会が設立されている』

皆がそれぞれ調査を開始するなか、昭太は、緑ヶ丘商店街にある本屋にいた。

名徳学園のすぐ近く、緑ヶ丘市の中心部に位置するこの商店街で、いずみの父親が八百屋を経営しているという。昨日襲われたショックからか学校を休んだいずみへの見舞いがてら、昭太は訪れることにしたのだ。

『オリンピックや国際大会では、ターゲット競技が主にアウトドアで行われている。

弓の長さは、普通66インチ（1.68メートル）引きの重さは約18キログラム。矢はアルマ

ニウム合金製で、重さは約28グラム。

ターゲットまでの距離は4種類あり、その距離ごとに36本ずつ、144本を射て1ラウンドとし、その合計点を競う』

（……だめだ、全然わからねえ）

昭太はあきらめて本を書棚に戻し、外へと出た。

「奥さん！ 豚肉100g、80円だよ」 「今日はかつおが安いよ！」

狭い路地に、所狭しと並べられている多くの商品。店先に響くどら声。談笑している主婦たち。

木造の店舗が一直線に並ぶこの街は決して大きくはないが、活気に満ちあふれ、昨日見たいずみの明るさが、ここで培われたものだということがよくわかる、温かみのある場所だ。

「よ、兄ちゃん。コロッケ安いよ。買ってかないか？」

総菜屋のおじさんが、昭太に声をかける。

「オススメは？」

「今日は野菜コロッケ」

「じゃあ、それ3枚」

「毎度どうも！」

昭太は、おじさんからお釣りを受け取りながら、いずみの家だという八百屋を盗み見る。

周りと同じ木でできた建物にかかっている陽に焼けた看板が、長く営業しているであろう老舗の

姿を物語っている。

「奥さん、美貌を保つためどうだい？ このトマト。奥さんみたいにつやがいいよ」

「やだ、もう。仙さんったら」

昨日会ったいずみの父、仙吉の口車に乗せられ、ざるの中のトマトがあつという間に売れていく。

「毎度どうも！ あれ、あんた」

昭太に気づいた仙吉が、空のざるを持ってこちらへ歩いてくる。

「だれ？ お父ちゃん」

恰幅のいい仙吉に隠れるようにして、棚の整理をしていた小柄な女性が声をかけてきた。心なか、顔色が悪く見えるのは、昭太の気のせいだろうか。

「ほら、昨日いずみを助けてくれた……。だれだっけ？ あんた」

「南、昭太です」

頭を下げた昭太は、自分が昨日名乗っていなかったことを思い出す。

「なんだい仙さん。この坊やか？ あんたんとこのじゃじゃ馬助けたっていうのは」

さっきの総菜屋のおじさんが身を乗り出してくる。……情報が早い。

「なんだかいずみより弱そうだけどなあ」

おじさんが昭太をなめるように見る。確かに、身体を鍛えている正樹や、アクティブな趣味を持つ慎二のように、がっしりとした体格ではないが、すばしっこさなら二人に負けない自信はある。

「そんなこと言っな。ようは心意気ってやつだ。なあ、兄ちゃん」

仙吉が、昭太の肩をばんばんと叩く。

「ちよつと二人とも、何してるの？ あれ、南くん」

店の奥から顔を見せたいずみが、昭太を見て笑みを浮かべる。

「学校休んだ、って同じクラスの村上に聞いたからさ。心配になって」

「ありがとう。どこも怪我してないんだけどね。なのに二人とも、犯人が捕まるまでは学校休め、
って無理やり閉じ込めちゃうんだもの。やんなっちゃうよ」

いずみが頬をふくらませた。

「あんたはいつも家にいないんだから。たまにはおとなしくしてなさいよ」

「うるさいなあ。あ、そうだ南くん。せっかくだから家でご飯食べ
ていいかい？」

「いいよ。別に」

「遠慮しないで。もうすぐできるからさ。ね、いいでしょう？」

「そうだな。こいつ助けてもらった礼もしなきゃなんないし。ほら、
入った入った」

仙吉に背中を押され、昭太は店の中へと連れて行かれた。

8・ほのかの過去

「これが片山さんの資料と、事件に遭った少女の関連資料です。くれぐれも、外部には持ち出さないで下さいよ」

「はい。それでは失礼します」

昭太がいずみの家へ見舞いに行った直後に小倉から資料が届いたことを知らされ、正樹とともに警察署へ赴いたほのかに、小倉が困り果てた表情で念を押した。

しかし、自分というよりは、隣にいた正樹に念を押したように見えたのは、気のせいではないだろう。

小倉が、自分に対して好意を持ってくれているであろうことは、彼がこの名徳学園支部に赴任してきたときから何となく気づいている。

悪い人ではないと思うのだが、正直、気持ちを向けられても困るのが本音だ。

「片山いずみ。緑ヶ丘商店街にある八百屋の長女として生まれる。七歳のころからアーチェリーを始め、国内ジュニアランキング一位。一昨年の国際ジュニア大会では三位入賞。次期オリンピック代表候補の一人である、か」

警察署内の廊下を歩きながら資料をめくっていた正樹が、感嘆したように経歴を読み上げる。

「ええ。弓を射っていた姿、すごくきれいだったもの」

一昨日のいずみの姿を思い浮かべながら、ほのかはつぶやく。

あの姿とギャップのある明るさには心底驚いたが、もしかしたら、彼女とは友達になれるかもしれない……。ほのかは、ささやかな期待を抱いていた矢先の事件発生だった。

「村上くんは、片山さんと同じクラスよね？ 片山さんってどんな人？」

「とにかく明るいな。人当たりもいいから、クラスになじむのも早かったし。でも、ほのかがこんなことを訊いてくるなんて、珍しいな」

正樹に言われて、ほのかは思わずうつむいた。

「いや、ヘンな意味で言ったんじゃないさ。ほのかは、俺たち以外の人間に興味を持つのはいいことだと思って」

正樹の言葉が、ほのかの心をちくりと刺す。

ウィングリサーチのリーダーである正樹は、ほのかは、清愛女子学園から名徳学園へ来た理由を知っているのだろう。

清愛女子学園のころのクラスメートに、ほのかは友達と呼べる人はもう、いない。

小学校低学年まではよかった。だれも何も考えず、ほのか自身を純粹に受け入れてくれていたように思う。

しかし、高学年から中学へあがり、思春期を迎えるころになると、自分たちとは違う人間を無視、または異端視し始める傾向が出始めた。

会社社長である父が政財界と深いかわりを持ち、クラスメートよりも裕福な家庭に育ったほのかも例外ではなかった。

『早く、ここから逃げ出したい』 いじめにあっていた中学時代、いつも思っていた。

自分自身が作った^{まゆ}繭の中でじっと身をひそめ、哀しみをこらえることしかできずにいた。

ただ、この学校を飛び出せば、きっと新しい世界が拓けてくるはず。そう、必死に言い聞かせ、時が過ぎるのを待っていた。

親の反対を押し切ってこの学校へ転入学してから、ほのかは初めて「仲間」と呼べる人たちを得た。

それでも、まだ自分はおびえている。

いつか、みんながまた離れて行ってしまうのではないかと。

独りぼっちで、あの虚しさを繰り返さなければならぬ日が、いつかまた来るのではないかと――。

「あれは事故なんかじゃありません！ 調べてください！ 刑事さん」

自分の内なる不安に耳を澄ませていたほのかの心を、聞き覚えのある声が現実へと引き戻す。

ふと顔をあげたほのかの目の前に、アーチエリー部顧問である、乾の姿があつた。

「乾先生」

思わず声をかけたほのかの声に反応した乾が、こちらを哀しげな表情で見つめる。

それを見たほのかの心が、なぜか痛んだ。

「みつともないところを、見せちゃったな」

警察署にほど近い、小さな公園のベンチに座って、乾が言った。

いいえ、とほのかは首を振った。隣にいる正樹も、目の前のブランコで遊ぶこともたちに無言で目をやっている。

桜の花びらを乗せた春のおだやかな風が、静かに公園内を駆け抜ける。しばらくの沈黙ののち、乾が静かに口を開いた。

「……娘の無念を、晴らしてやりたくてね」

「娘さん、ですか？」

「ああ。同級生にいじめられて自殺したんだ。学校側は否定しているが……俺はそう思っている」

乾の言葉が、まだ乾かないほのかの心の傷口を大きく開いた。ほのかの様子に気づいたのか、隣にいる正樹の手が、そっとほのかの肩にのる。

「何度も娘が通っていた学校に足を運んで、死んだときの調書を見せて下さいと頼んだ。しかし学校は、加害者のプライバシーを理由に、まるつきり相手にしてくれない。じゃあ、せめて娘が死んだ原因とされる事故について調べてくれるように頼んでいるんだが、それもなしのつぶてでね……」

「表向き、って……？」

正樹の手のぬくもりが、自分の心をかろうじて支えてくれていることに感謝しながら、ほのかは訊ねる。

「……………」

しかし、乾はうつむいたまま何も答えない。ほのかは、自分が聞いてはいけないことを訊いたのだと悟った。

ほのかの頬に、涙が落ちていく。言葉にならないであろう乾の悲しみが、自分の哀しみと重なっていく。

ほのかの心は、もう、限界だった。

「北村……」

「……すみません」

これ以上、言葉が見つからない。

いじめられていたときは、自分も辛かった。ラクになりたいと何度も自分に刃を向けても、死ぬことすらできずにいた。

しかし、乾の娘は旅立った。おそらく、ほのかが拭うことのできなかった「死ぬことへの恐怖」よりも「生きていく恐怖」が、彼女の中で勝ったのだ。

「困ったな。君にこんな思いをさせるつもりはなかったんだ。だから」

乾が、ほのかを励まそうと明るくふるまう。それが逆に、心をつらくさせる。

「先生、すみませんがここで失礼します。ほのか、行こう」

正樹の言葉にうなずいて、ほのかは立ち上がった。

これ以上ここにいたら、自分がどうなってしまうかがわからなかった。

8・ほのかの過去（後書き）

作者です。

大変長らくお待たせして申し訳ありませんでした。

これからまた、定期的に更新していこうと思っています。
どうぞよろしくお願いいたしますm（　　）m

9・正樹の「傷」

「……ごめんなさい。村上くん」

少し低いほのかの声が、桜並木の下を何も言わずに歩いていた正樹の耳に届く。

「いや。気にしてないさ」

うつむいたままのほのかに目をやり、正樹は答える。

「だめね、私。ああいうことを聞くと、すぐに気持ち揺らいでしまつて」

満開の桜を見上げたほのかがつぶやく。

一年前、ウイングリサーチの結成時にほのかの資料を見た正樹は、彼女がいじめられていたことを知っている。

ゆえに、人一倍苦しんだであろう彼女が、たとえ調査中でも「他人の苦しみや悲しみに同調してしまう」のは仕方がないことなのだと理解もしている。

「そんな簡単に癒える傷なんてないだろう？」

ほのかの肩を励ますように軽くたたき、正樹は言った。

「村上くん……」

「いじめ、じゃないけど、俺も似たような経験をしたんだ。警察官だった親父のこと、去年チラツと話したよな？」

「お父さんって確か、村上くんが小さいときに亡くなった……」

「ああ。あれはまだ、俺が七歳になったばかりのころだった」

『……お父さん！』

暗い部屋に入ってすぐ、母は正樹の手を離して部屋の中央に横たわる人間に歩み寄った。

（お父さん？ どこにいるの？）

正樹はその場に立ち尽くしたまま、心の中で問いかけた。

『正樹くん』

聞きなれた声がした。思わず顔を上げる。

『お父さんは、どこにいるの？』

いつも、父と二人で交番で働いているお兄さん―佐藤巡査―が、唇を噛みしめて、正樹から目をそらす。

その視線の先で、母が泣いている。

佐藤巡査に手をひかれ、正樹はゆっくりと中央に進んだ。

（お父さん？ この人が？）

目の前に横たわる「父」の頭に巻かれた白い包帯の一部は赤黒く染まり、顔が大きく膨れ上がっている。

頼も、布団から少しだけ出ている方にも、無数の傷跡がついている。

『集団暴行を受けていた少年を助けに入ったのですが』

佐藤巡査の声が、震える。

『もみ合いになった際に、容疑者の一人が、持っていたナイフで、村上巡査長の胸を……。傷は心臓まで達していて、ほぼ即死状態だったそうです』

母の泣き声が、ひときわ大きくなった。

（そくし、って何だろう？ お父さんはもう、起きてこないの？）

『お父さん』

正樹は思い切って父を呼ぶ。しかし、返事がない。

『お父さん、起きてよ』

正樹は横たわる父の体に手を伸ばし、そのまま動けなくなった。

いつも、正樹を肩車してくれた父の肩が、冷たい。

『正樹……』

正樹に触れてきた母の温もりで、我に返る。

『お父さんはもう、起きないの？』

母の顔が、ぼやけた。その瞬間、正樹の身体が強く抱き締められる。

母の体温が、父はもう還ってこないのだと正樹に語りかけてくる。

正樹は、大声をあげて泣いた。

悲しみよりも、今、ここに在る事実が、信じられなかった。

しかし、そんな正樹と母に追い討ちをかけるように多くのマスコミが自宅へと押し寄せた。

助けに入りながらも、少年を救えなかった父に対する批判が集中し、テレビクルーが、母の声を拾おうとマイクを向けてくる。

その明りに魅せられた虫のように多くのやじ馬がたかり、近所からは苦情の電話が殺到した。

遺された父の兄弟とともに、それらに対応しなければならなかった母は日に日に憔悴し、葬儀が終わった後しばらくは布団から起き上がることもできずにいた。

悲しみのどん底にたたき落とされた母を、守れない。

そんな幼い自分が齒がゆくて、悔しくて仕方がなかった。

「村上くんに比べたら、私なんてたいしたことないのね」

一通り話した正樹を見ずに、ほのかが小声で言う。

「村上くんが、小さなころの傷をきちんと乗り越えてるのに、私は……」

「あまり自分を追い込むなよ。ほのかは、ほのからしくいればいい。俺たちはみんな、そう思ってるよ」

今までこわばっていたほのかの表情が、少しだけゆるむ。

その時、正樹の胸ポケットにしまっておりある携帯電話が鳴った。

青陵高校に進学した友人に会っていた、慎二からの報告だ。

快活だった慎二の友人も青陵でいじめにあって心に傷を負い、転校までしているという。

由紀が青陵に転入するのは明日。彼女に限ってそんなことはないと思うが、自分か慎二が転校する方がいいのではないだろうか？

「どうしたの？」

ほのかが心配そうに、正樹を見上げる。

「慎二からメールが来たんだ。あまり、情報は得られなかったみたいだな」

「由紀……明日から大丈夫かしら？」

いじめの事実を伏せて話す正樹の心を見透かしたかのように、ほのかが問う。

「大丈夫さ。あいつは相手がだれであろうと自分の意見をきちんと主張するし、こっちのほうも案外強いからな」

正樹が、腕に力こぶを作って笑うと、ほのかの顔にもようやく笑みが増えた。

10・脅迫電話

昭太が招かれた夕食会は、いつしか、近所の商店街の人々もまきこみ、時間がたつごとにすごい騒ぎになってきた。

「ほら兄ちゃん、遠慮しないで飲みなよ！」

すでに顔を赤く染めた恰幅のいい青年が、未成年の昭太に、遠慮なく酒を注いでくる。

「ちよつとおっちゃん。お酒飲ませないでよ。未成年なんだから」

その青年からビール瓶を取り上げてテーブルのわきに置くと、いずみは、すぐそばにあったコップにウーロン茶を注いで渡してくれる。

「ごめんね。ウチ、いつもこんなだから」

「気にしてないよ。ありがとう」

ありがとうの意をこめてコップを軽く上げると、昭太はそれを飲み干した。

「おい！ いずみ。酒足りないぞ」

「あゝはいはい。今行く！ ごめんね。南くん。ちよつと待ってて」

呼ばれて立ち上がったいずみを見送り、昭太は考える。

なぜ、彼女が狙われなければならないのか。

あっけらかんとしていて、人懐っこい。付き合いは浅いが、見ている限りでは、人に憎まれるような娘ではないのに。

物思いにふける昭太の耳に、電話のベル音が聞こえてきた。いずみの母の智子が素早く立って、廊下へと出る。

「もしもし、片山です。……もしもし？」

ふすま越しに聞こえてくる智子の声音が変わった。昭太は盛り上がっている周りに気を配りながらも、そっと耳を立てる。

「もしもし。娘に何の恨みがあるっていうんですか？　もしもし」

智子の声が途切れたのに気づき、昭太は静かに廊下に出る。すると、智子が受話器に手をかけて、肩を震わせてうつむいていた。

「お母さん」

昭太の声に反応した智子が、無理やり笑みを作ろうとする。しかし昭太はあえて訊ねた。

「脅迫電話、なんですね？」

智子の顔がこわばった。泣き出しそうになりながら、小さくうなずく。

「片山さんは、このこと……」

「いいえ。知りません」

「いつからです?」

「帰国して、名徳学園にお世話になってからです。あの……、アーチエリーの選手が襲われている事件、ご存知でしょうか?」

智子の言葉に、昭太は何も言わずにうなづく。

「ひとりずつ襲われるたびに、電話がかかってくるんです。あと何人やったら、おまえの娘の番だ、と」

智子が、涙声で口にする。

「今は、なんて?」

「今度は、ただじゃ済まない、って……」

使い込んで、くたびれたエプロンで涙をぬぐって、智子が答える。

「お母ちゃん、どうしたの?」

廊下に出てきたいずみが、泣いている母を見て心配そうに訊ねてくる。

「ううん。何でもないので。お酒でしょう? ほら、早く持って行ってあげなさい」

無理に笑顔を作った智子が、日本酒の瓶^{びん}をいずみに渡す。

いずみは、二人の顔を見比べて怪訝けげんそうな表情を浮かべながらも、ふすまの向こうから聞こえる声に応えて、居間へ戻っていく。

「南くん。このことは娘に言わないで下さい。お願いします」

いずみの後ろ姿を見送る昭太に向かって、智子が頭を下げてる。

「お母さん。何か心当たりはないんですか？　どんなことでもいいんです。俺じゃ力になれないかもしれないけど、何かあったら言うて下さい。俺、何でもしますから」

思わず口から出た言葉に、昭太は驚いた。それは智子も同じだったようで、しばらくこちらを見つめていたが、やがて、小さな声でつぶやいた。

「……ありがとう。南くん」

娘を心配する、母の気持ち。自分には記憶のない思いをまの当たりにした昭太は、改めて決意する。

智子のためにも、いずみを、必ず守ってみせると。

「どうもごちそうさんでした」

智子が持たせてくれた煮物のタッパーを手に、昭太は頭を下げた。

時刻はもう9時を回り、高校生はとくに家にいなくてはならない時間だ。

夕方はにぎやかだった商店街は、シャッターが閉まって静まり返っている。しかし、いずみの家からはにぎやかな声がいまだに響いてくる。

「今日はみんな、このまま泊まりだな。明日大変だってわかってるのにね」

いずみは小さく笑いながら、家を振り返った。そして昭太と連れだって、夜の街を歩く。ほてった頬に当たる春の夜風が気持ちいい。

「お母ちゃんさ、南くんは何を言ってたの？」

突然の問いに、昭太は言葉に詰まる。それに気づかないのか、いずみは続けた。

「最近、お母ちゃんの様子がおかしいんだよね。人の顔をじっと見ているかと思えば、急に陰で泣いてたり。お父ちゃんの話だと、おつりの計算もよく間違えてるみたいだし。……たぶん、私のこと心配してるんじゃないかと思うんだけど」

いずみは、智子の様子に気づいている。カンが鋭いようだ。

「ね、お母ちゃん、何か言ってたなかった？ 聞いてたら教えて」

いずみが、真剣な顔をして昭太を見上げてきた。

11・想い

いずみの真剣なまなざしが、昭太の心を捉える。

今、ここで目をそらしたらきつと、彼女は自分の身に起こっていることのすべてを把握してしまうだろう。

いずみを守りたいと苦悩する智子の想いを、無にするわけにはいかない。

「……ごめん。何も知らないんだ。俺が廊下へ出た時にはもう、お母さんあんな状態だったし。理由訊いても、教えてくれなかった」

「本当に？」

「ああ」

問いかけてくるいずみから目をそらさずに、昭太はうなづく。

「そっか。……ごめんね、変なこと訊いて」

いずみが笑顔を作る。しかしその表情は、さっき智子が娘に見せた笑顔と同じだった。

やるせない思いが、昭太の胸に広がる。

「まだ、学校休むのか？」

話題を変えようと、昭太は訊ねる。

できることなら、いずみに降りかかろうとする危険を回避したい。

「私は一日も早く学校に行きたいの。今度の大会にはどうしても出たいんだ。ただでさえ、帰国や転校の手続きで練習遅れてるから、これ以上は、ちょっと」

「次の大会じゃだめなのか？」

昭太の目を再び見上げ、いずみがうなずく。

「この大会じゃなきゃだめなの。でなきゃ、約束守れなくなっちゃうから」

「約束？」

昭太が訊き返すと、いずみは急に視線をそらす。

「ごめん。余計なこと訊いたな」

「ううん。別に隠すことでもないし」

そこまで言うと、いずみは少し足早に商店街の出口の方へ向かった。

「死んだ友達の願いを……代わりに叶えるって約束したの」

「死んだ、友達？」

「うん。同じアーチエリークラブでの1歳年下の女の子だったんだ」

けど、去年、事故で死んだって聞いて……。その子ね、小さい時に生き別れたお父さんがアーチェリーをやってたんだって。だから同じ道に入って、いつか、会いたいって」

空を見上げるいずみの言葉が、かすかに震える。

「そっか。でもさ、片山の気持ちはわかるけど、しばらくはおとなしくしていた方がいいぞ」

「うん……わかってる。でもね」

いずみの言葉をさえぎって、昭太は続ける。

「でも、じゃなくて。今度あなっただとき、俺だって守ってやれるかわかんねえんだぞ。片山がアーチェリーでできなくなったら、今度はだれがその子の願いを叶えてやれるんだよ」

「大丈夫だよ。私は」

「何言ってるんだ。今だって、いつ、どこから矢が飛んでくるのかわからないんだぞ。親父さんやおふくろさんが心配してるだろ」

前を向いたままのいずみの頭を、昭太は軽くこづく。

「いったあゝ。何するのよ」

いずみが思いきり、昭太の腕を叩いてきた。

「……………少しは手加減しろよ。お前」

痛む腕を押さえて、昭太は顔をしかめた。この馬鹿力は、どうやら父親ゆずりらしい。

「そんなことを言う南くんが悪いんです。そうやって、何人の女の子を口説いてきたわけ？」

「ば……！ な、何言ってるんだよ！」

頬が急に熱くなり、昭太は思わず大きな声を上げた。

「顔真っ赤！ 南くん、かわいい〜。あ、バス来たみたいだよ」

笑いをこらえきれないいずみが、出口にあるアーケードの向こうに向かって走り出す。

追いかけた昭太が停留所に着いてすぐに、最終バスがすべりこんできた。

「ごちそうさん。ちゃんと帰れよ」

「言われなくてもわかってますよ、だ」

扉が閉まり、バスが動き出す。笑顔で手を振るいずみの姿が遠ざかって行くのを見送った昭太は、小さくため息をついた。

……おふくろさん、か。

昭太は目を閉じる。脳裏に浮かぶ母の顔はいつも、鬼のような恐ろしい形相でしかない。

昭太には、両親がいない。

父は昭太が生まれてすぐに病気でこの世を去り、母も、五歳のころ若い男と出奔した。

泣いて追いつがる幼い自分を突き飛ばした時の表情しか、母の顔は思い出せないのだ。

母に捨てられた後、親戚をたらいまわしにされたあげく、施設に入れられた昭太にとって、いずみのような家庭は幸せの象徴であり、娘を心配し涙する智子こそが、理想の母親像だった。

手の中にあるいくつものタッパーには、智子が持たせてくれた煮物やコロッケなどがたくさん詰められており、その温かさが、独りに慣れたはずの昭太の心を締めつける。

…… たまんねえよな。 まったく。

目の奥が熱くなる。

昭太は、こみ上げる想いを閉じ込めるようにきつく目を閉じ、天井を仰いだ。

11・想い（後書き）

更新が遅くなり、申し訳ありませんでしたm（
—
）m
次回更新は明日、4月16日を予定しています。

12・思わぬ「要請」

翌朝。午前7時に集合した昭太たち新聞部員の目の前に、青陵高校の制服である紺のブレザーとスカートを身につけた由紀が、慚然とした表情で立っていた。

「こんなに動きづらい制服だとは思わなかったわよ」

短いスカートのすそを気にしながら、由紀がつぶやく。すると。

「馬子にも衣裳、って言うけど本当だよなあ」

朝食代わりなのか、コンビニで買ったサンドイッチを口にほおばりながら、慎二が言う。

「そんなことないわ。由紀はいつもジーンズやパンツしかはかないから、見慣れないだけよ」

おそらく、この制服が由紀の10倍は似合いそうなほのか、立っていたブラウスの襟を直しながらフォローする。

「いいか、由紀。向こうの学校では、どんなことが待ってるかわからない。絶対に目立つ行動はするなよ」

慎二からいじめの実態の報告を受けている正樹が、真剣なまなざしで釘をさす。

「わかってるって。こんな恰好じゃ回し蹴りしたくたって無理だもの。自重しますよ」

回し蹴り……女の子の言っせりふではないと思った昭太は、慎二と顔を見合わせて苦笑する。

「ま、とにかく行ってくるわ。早くしないと転校早々遅刻しちゃうでしょ」

学校指定のスクールバックを手にした由紀が、ドアノブに手をかけると同時に、ノックの音が聞こえた。

違う学校の制服を着ている由紀の姿を見られてはまずい。

昭太の目の前にいる正樹が暗室へ隠れるよう目くばせすると、由紀はすぐに隣室へ姿を消す。

「はい」

張りつめた声で返事をした正樹がドアを開ける。すると。

「……片山さん」

正樹の声に驚いて、昭太は思わず駆け寄った。

「もう、出てきてもいいのか？」

「お母ちゃんは最初、犯人が捕まるまで休めって言ってたんだけど、お父ちゃんがね」

「親父さんが何て？」

「学校にいる方が、人も多くてかえって安全だし、いいボディガードがいるんだから、おおいに使ってやれ、って……」

気まずそうないずみの視線が、昭太に注がれる。

「ボディガード……って、俺？」

いずみが遠慮がちにうなずいたのを見て、昭太は隣の正樹とかわず顔を見合わせる。

「お父ちゃんが南くんの名前を出したら、お母ちゃんも『彼に任せれば安心だわ』って……」

確かに昨夜、智子に「何でも言ってくれ」とは言った。しかし。

「でもさ、こいつで大丈夫なわけ？　言っちゃなんだけど、ボディガード指数は未知数よ」

正樹と昭太の間を割って、慎二がひょっこり顔を出す。

出会った時にはすでに武道の有段者だった正樹や、なぜかけんかの強い由紀とは違って、昭太は、ウイングリサーチに所属が決まってるから、護身術程度しか身につけていない。

「帰り、一緒に帰ってくれるだけでいいんだ。……ダメ、かな？」

慎二から昭太に視線を移し、いずみは顔の前で軽く手を合わせる。

「なるべく人通りの多い所を通れば大丈夫だろう。この前取材した原稿は昨日、慎二と由紀が仕上げてくれたから、こっちは何もする

「ことがないし」

「本当？ 村上くん。助かる〜」

合わせていた手を叩いて、いずみが正樹に笑顔を見せる。

「……わかったよ。今日は何時に迎えに行けばいいんだ？」

「今日は6時くらいに練習が終わるから、その後。じゃ、よろしく
お願いします」

観念した昭太に勢いよく頭を下げて、いずみが部屋を出ていく。

「責任重大ね、南くん」

暗室から出てきた由紀が、からかうように昭太の肩を叩く。

「こっちは少しでも手がかりが欲しい状況だからな。片山の申し出
は渡りに船だ。大変だろうけど、頼む」

いずみにOKサインを出した正樹が、真剣な表情で言う。

「それにしても熱心よね。私が彼女の立場なら、絶対に学校休むわ」

「そんなおとなしくしてるタマかよ。どうせ、親父さんの編集部に
入りびたるんだろ？」

「あたりまえじゃないの。情報フル稼働して、この手で犯人をとっ
捕まえてやるわ」

ちゃちゃを入れてきた慎二に、自分の腕を軽く叩いて由紀が笑う。

「冗談言ってる場合じゃないだろう。くれぐれも頼むぞ、由紀」

「はいはいわかりましたよ。何かあったらすぐに連絡入れるわね。それじゃ」

スクールバックを肩に担ぎ、反対の手を軽く上げて、由紀が部室を出ていく。

「本当に、大丈夫かしら。由紀」

今まで黙っていたほのかが、心配そうにつぶやく。

「大丈夫だよ、ほのか。あいつはそんじょそこらのやつとは違うんだからさ」

由紀と行動を共にする機会の多い慎二が、力強くうなづく。

「とりあえず、俺たちはできることから始めよう。時間もないしな」

「じゃ、俺は授業が終わったら、江頭の身边もう一度洗ってみるわ」

「わかった。ほのかは、警察から来た資料に目を通して、めばしいものを由紀に送ってくれ」

正樹の言葉にうなずいたほのかの目が、心なしか赤い。

「俺も手伝ってやろうか？ 片山が部活終わるまですることないしさ」

「ありがとう。でも、大丈夫。片山さんのそばにいてあげて」

ほのかが笑みを作る。しかし、昭太にはその笑顔が、なぜか痛々しいものに見えた。

12・思わぬ「要請」(後書き)

次回更新は明日、4月17日を予定しています。
どうぞよろしくお願いいたします。

13・潜入調査 その1

電車の通りすぎる生暖かい風が、最後に降りた由紀の後ろを駆け抜けた。

これから事件解決までの間、ラッシュ時の喧騒にまぎれて登校しなければいけないのかと思うと、早くもうんざりしてしまう。

名徳学園は届けさえ出せばバイク通学も可能なのに、青陵高校は電車通学のみときたもんだ。

ただでさえ、この制服の動きづらさを呪っている由紀にとって、この潜入調査は拷問以外のなにものでもない。

（早く終わらせなきゃ）

心でつぶやき、自分と同じ制服を着ている集団について、車が多く行きかう道路を歩く。

すると、あちこちで女子生徒が足止めをされている。よく見ると知っている顔がちらほらいるのがわかる。

学校をさぼって父の雑誌社の取材を手伝いに行く時、張り合う他社の連中だ。

由紀は彼らの目につかないように、自分より背の高い男子生徒の波にまぎれてその場を脱出するも、校門前に、もっと会いたくない人物が立っていた。

「おや、由紀ちゃん」

さすが、目先のスクープだけを狙っている若い記者とは違う。

白髪混じりの頭に、少々しわの入った温和な顔立ちからは想像もできないほど、目の前の人物の観察眼は鋭い。

「源さん、ちょっと」

周りの生徒に会話を聞かれない由紀は、自分より小さな人物の手をひっぱり、集団から離れる。

「こんなところで何やってるんだ。しかも、青陵の制服なんか着て」

由紀の身体を下から上まで見上げて、「源さん」こと、フリーカメラマンである源嘉治みなもとよしはるが問いかけてくる。

フリーでありながら、本人いわく『学生時代からの腐れ縁』で由紀の父、久志ひさしが編集長を務める写真週刊誌「WAVE」のスクープになるネタを持ってきてくれるのだ。

そもそも由紀がカメラをいじりだしたのもこの男の影響で、最近別の雑誌のグラビア撮影などが入ると、由紀がアシスタントを務めることもある。

「ちょっとワケありで。お願い、父さんには内緒にして。ね」

今回の転校は、父すら知らない超国家機密だ。

「何に首を突っ込んでいるかは知らないが、あまりこの学校にはか

かわらない方がいいぞ。陰湿ないじめは横行してるし、それが原因とも言われている事故も、昨年起きている」

「事故、って？」

「終わったら編集部においで。ちゃんと、着替えてくるんだぞ」

父には内緒にしてくれる。そう確信した由紀の顔がほころぶ。

「それじゃ、どうもありがとうございました」

他人のふりをして源が由紀に頭を下げてすぐ、濃い灰色の背広を着た、険しい顔つきの男が隣を通り過ぎる。

登校時間の終わりを告げるチャイムが、あたりに響いた。

由紀は軽く手をあげて、門の方へと駆け出した。

「添嶋由紀さん、ね」

厚い本が並ぶ大きな棚を背に、いかにも「お局様」の雰囲気をもし出す女性が「校長」と書かれた札のある机の向こうからこちらを見つめる。

「よろしく、お願いします」

頭を下げた由紀は、自身の頬が少しこわばっていることに気づいた。

「今、この学校の生徒を狙った不穏な事件が発生し、多数の報道陣が私どもの責任を問おうと集まっています。そういった輩には対応しないようにしてください。いいですね」

「はい」

「失礼します」

由紀が返事をするのと同時にドアがノックされ、男性教師が校長室へと入ってきた。

由紀の顔を見た教師の眉が、少しあがる。

さつき、源と話しているときに通り過ぎた男だ。

「あなたが編入する2年3組の担任、横田先生です」

「よろしく願います」

横田は由紀に返事もせず、校長に向き直る。

「また、あの男が来ていましたが」

「放っておきなさい。こちらには何の落ち度もないことですから。横田先生、彼女をよろしく願いますよ」

やや面倒くさそうに返事をした横田がようやく、由紀へ向き直る。少々えらの張った頬に、ぎょろつとした目つきで由紀を見下ろし

た横田がため息をつく。

「こんな時期に……くれぐれも、面倒を起こさないようにしてくれよ」

いきなりの言葉に思わずカチンと来た由紀だが、

『絶対に、目立つ行動はするなよ』

正樹の言葉を思い出し、何も言わずに頭を下げた。

13・潜入調査 その1（後書き）

次回更新は明日（4／18）を予定しております。
できるだけ毎日更新できるように頑張りますので、お付き合いのほど、よろしく願います。

14・潜入調査 その2・ターゲット・

「添嶋由紀です。どうぞよろしくお願いします」

いけすかない教師、横田に連れられた由紀は、2年3組の教壇の横で頭を下げた。

あんな事件が続いた後とはいえ、黒板を背にして立つ由紀を見る同級生の表情は暗く、目も心なしかうつろに見える。

横田に指示され、教室の一番後ろの席に座る。

（こりゃ、前途多難かも）

教科書を出して、小さくため息をついた由紀だが、隣に視線をやると、名徳学園のものと表紙が違う。

「先生」

「……何だ、転校生」

「前の学校と教科書が違うので、隣の人に見せてもらいたいですけど」

またも面倒くさそうに大きく息を吐き、首だけで「イエス」の返事をする。

そんな横田に構わず、由紀は大きな音をたてて机を移動し、ショートボブの少女の席にくっつけた。

「面倒かけるけど、よろしく」

声をかけると、その少女は怯えた様子で由紀を見つめる。

「どうかした？」

再度話しかけるとすぐ視線をそらし、小さく首を振る。

（いじめのターゲットか。案外、早く済むかも）

由紀は、自分を見ることがなくうつむいたままの少女に、事件解決のヒントがあるような気がした。

「ね、学校案内してくれない？」

退屈な1限の授業をあくびを噛みしめて乗り越えた由紀は、隣の子に声をかける。

「私……ですか？」

「うん。どこに何があるかさっぱりわからなくて」

普通に話しかける由紀に、教室内が少しどよめく。

「添嶋さん、私が案内してあげる」

前の方の席から、肩まで伸びた髪をきれいに結っている少女が歩

み寄る。

その音が近づくにつれ、隣の席の少女の肩が小刻みに揺れるのがわかる。

「ありがと。……えっと」

「三井あゆみです。よろしくね」

軽く頭を下げたあゆみの後を追い、由紀は教室を出る。

教室に一番近いトイレに由紀を連れていったあゆみが、少し陰しい表情で声をかけてくる。

「あなたは頭が良さそうだから忠告しとくけど、あの子には関わらない方がいいわよ」

腕を組んで窓際によりかかり、上から目線でものを言うあゆみに問い返す。

「どうして？」

「最近、ウチの学校の生徒が襲われてる事件、知らない？」

「確か、アーチェリー部の生徒が矢で肩を射抜かれた事件よね。新聞で読んだわ」

「そう。……今度のターゲット、あの子」

「え？」

突然のあゆみの言葉に、由紀は面食らう。今の犯人のターゲットは、ウチの学校のいずみのはずなのに。

「どうして、そんなことを？」

由紀は慎重に問う。もしかしたら、重大な手掛かりをあゆみが知っているかもしれないのだから。

「それはまだ言えないな。でも、あの子と一緒にいたら、あなたも間違いなく次のターゲットにされるかもよ」

あゆみが、いたずらっ子のような笑みを浮かべたのと同時に、次の授業開始を告げるチャイムが鳴った。

「じゃあね」

短いスカートをひるがえし、あゆみが小走りでトイレから出る。

彼女の体から香る甘い香水が、由紀の鼻をついた。

『三井あゆみと、飯沼園子？』

「そう。二人とも青陵高校2年3組。何か、気にかかるのよね」

午前中の授業をどうにか済ませた由紀は、購買でパンを買ったあ

とひとりで屋上来て、事の次第を正樹に電話する。

『ターゲット、か。犯人の狙いは片山だけじゃないってことか?』

「それはまだわからない。単に『いじめの』ってだけかもしれないし。アーチエリー部の人間の資料は、そっち行ってるんでしょう?」

『ああ。名簿に二人の名前がないか見てみるよ。ほかに気づいたことはないか?』

正樹の問いに考えを巡らせている由紀の耳に、複数の足音が聞こえてくる。

「悪い村上。誰か来たから切るね。じゃ、また連絡する」

携帯電話の電源ボタンを押してポケットにしまいこみ、ドアの裏側に身をひそめる。

古いドアがきしむのと同時に、何かが落ちてきたような重い音がした。

「金、持って来いって言ったよねえ?」

聞き覚えのある声に、由紀はじつと耳を澄ます。

「お金なんかない……って、何度も言ってるじゃない」

「何言ってるの? あんたさ、自分がいまどういう立場に置かれてるかわかんないの?」

「そうそう。次はあんたの肩に、矢が刺さるかもしれないんだから。ボディガード代だと思えば安いもんでしょ」

「そういえばあゆみ。あの転校生何か言ってた？」

あまり聞き慣れない声が、由紀に「忠告」してきた三井あゆみらしい少女に問いかける。転校生、とは自分のことだろう。

「別に。釘さしといたから大丈夫でしょ」

ずいぶんとなめられたものだ。ま、あゆみ程度なら何人束になっ
てかかってきても負ける気はしないが。

由紀が肩をすくめてすぐ、強い風が屋上を横切った。

「さむ。早く教室に戻ろうよ」

「いい、園子。明日までには必ず10万持って来んのよ。じゃなきゃ知らないからね」

甲高い声で笑いながら、何人かの足音が遠ざかっていく。

それを確認した由紀は、園子と呼ばれた隣の少女の前にしゃがみ
こんだ。

「……添嶋さん」

「あんた。何やっていじめられてんの？ よければ、訳話してくれない？」

驚いた様子の園子に、由紀は手を差し伸べた。

14・潜入調査 その2・ターゲット・（後書き）

次回更新は明日、19日を予定しています。

15・潜入調査 その3・事件・

驚いた表情の園子は、差し出した由紀の手を握って立ち上がったものの、口を開こうとはしない。

「三井さんね、私にもコナかけてきたのよ。あなたに関わるな、じやなきや、私も『ターゲット』になるってね」

うつむいていた園子の目が、再度見開かれた。しかし、由紀のまなざしにひるんだのか、再度足もとに視線を落とした。

また、強い風が由紀と園子の間を通り抜けた。短いスカートに辟易とした由紀は思わず、園子から視線をそらす。

「……三井さんの言うとおり、聞かない方が、身のためだと思うけど」

園子が、独り言のようにつぶやいた。

「まさか、お金払う気じゃないでしょうね？」

はつきりしない園子の態度に、内心いら立つ。

「それしか、方法がないんだもの」

「あのね。あの子らがやってることは立派な脅迫よ。あなたが証拠そろえて警察に行ったら、脅迫罪で立件できんのよ」

「警察には……、いや、このことは誰にも言わないで。じゃないと

私、透子のようになっちゃう」

「透子？」

園子の肩が、大きく揺れた。体を小刻みに震わせて、その場にくずくまる。

「ね、透子って誰？」

知らないふりをして、由紀が問う。しかし園子は耳をふさいだまま、首を何度も横に振る。

この先を訊いても、園子は答えようとしないだろう。仕方なく由紀は園子の肩を抱いて立ち上がり、保健室へと連れて行った。

「いったい、何があったの？」

クリーム色を基調とした、日当たりのいい保健室の中央にあるベツドに園子を寝かせた由紀に、保険医が訊ねて来る。

「さあ……。屋上でご飯を食べようと思って上に行ったら、こんな状態でしたから」

肩をすくめて説明する由紀に、由紀ぐらいの長さの髪にゆるいパーマをかけた保険医は、大きな目を伏せて深いため息をついた。

「まったく、こんな状態が続くんじゃ保健室がいくつあっても足りないわよ。早いとこ、スクールカウンセラー入れてもらわなきゃ」

「カウンセラーさん、いないんですか？」

「そ。ここだけの話だけど、この学校いじめが絶えないくせに、そういうことには及び腰でね」

少し高い声を抑えて、保険医が日頃のうつ憤を晴らそうとするかのごとく話し始める。だいたいがお目付け役の小倉の話と重なるので、適当に聞き流す。

ところが。

「去年、アーチェリー部であつたいじめは悲惨でね。被害者の子、自殺してるのよ」

「自殺？」

さらに声のトーンを落として語った保険医に、由紀も小声で問う。

「そう。その時の事件に関わってるの。あの子。だから、最近この学校の生徒が襲われている事件の次のターゲットって、もっぱらの噂なのよ」

「あの……去年のいじめって、そんなにひどかったんですか？」

「そう。ここ、矢で打ち抜いたのよ」

由紀の耳元に顔を寄せ、左肩を軽く叩く。

「それからしばらくして、その子は病院の屋上から飛び降りて死んだ。でも、学校側は『事故』の一点張り。遺族の問い合わせにも応じず、かん口令まで出しちゃってね」

「いいんですか？　こんなこと私に話して」

あけすけに話す彼女にふと不安を感じて問うと、突然乾いた声で笑った。

「いいのよ。特権階級ってことにしがみついて難癖つけてくるモンスターペアレンツとその子供たちのお相手をするのは骨が折れるもの。適度にストレス発散しなきゃね」

こういう先生は、内部事情を知りたい由紀には好都合だ。

「じゃ、飯沼さんのことよろしくお願いします。そろそろ授業なんです」

「はいはい。横田センセによろしく言っついてね」

笑顔で軽く手を挙げる保険医に頭を下げ、由紀は保健室を出た。職員室で横田に園子の件を告げて教室へ戻ると、生徒達の視線が、由紀に集中する。

「どこ行つてたの？」

大きな靴音を立て、あゆみが近づく。

「保健室。飯沼さんが屋上で倒れてたから、介抱しただけ」

「関わらない方がいい、って言わなかったかしら？」

「ごめんなさい。具合悪い人を放っておけなくて。気をつけるわ」

睨みつけて来るあゆみににっこり微笑んで、由紀は一番後ろの自分の席へ戻った。

15・潜入調査 その3・事件・（後書き）

更新が遅くなり、申し訳ありませんでしたm（――）m
次回更新は明日（4/20）の予定です。

16・監視

6限の授業が終わるチャイムが、教室にひびく。

学校をさぼるのが当たり前の由紀にとって、今日1日は眠気との闘い。おまけに教科書も違ふとくれれば頭の中はごちゃごちゃだ。

さて、これからどうしようか。

あゆみとその取り巻き連中が、じつとこちらを見ている。すぐに保健室へ行くのは得策じゃないだろう。

しかし、保険医の「園子が1年前の事件に関わっている」という情報は、一刻も早い裏付けと確認が必要だ。

今朝、慎二が江頭透子の交友関係などを洗い直すと言っていた。慎二の中学からこの学校へ通っている人間もいそだし、彼に連絡を取った方が早い。

由紀はかばんを肩にひっかけて立ち上がる。

放課後の教室と廊下は、さすがに部活動へ赴く生徒や、職員室へ戻る教師で埋め尽くされている。この合間をうまくぐぐれば、あゆみらに気づかれずに保健室に行くことが可能かもしれない。

一瞬、あゆみらが目をそらしたすきに由紀は教室を出て、スクールバックしか持っていない生徒の集団にすべりこむ。

流れに乗って階段を降り、げた箱へ向かう男子生徒の波の後ろに

ついて歩いて、そのまま真っすぐ保健室へ向かう廊下の角を曲がる。

「こんにちは」

「あら。さっきの」

「携帯、いじっても大丈夫ですか？」

視線を落とし、ペンを走らせながら反対側の指でOKサインを作った保険医に配慮して、由紀は慎二のメールアドレスから画面を開いて「至急青陵へ」とだけ打ち、送信ボタンを押す。

「すみません。あのー、飯沼さんは？」

「あの子、帰ったわよ」

「……帰った？」

あっさりと言う保険医に、呆氣にとられて由紀は訊ねる。

「ええ。かばん、取りに行かなかったの？」

気持ちを隠さずに、由紀はうなずいた。

「ありやー、また無断早退か。始末書、彼女だけで何枚目だろ」

ボールペンのノックする方で頭を強く掻きながら、保険医はまた、大きなため息をつく。

「先生が書くの？」

「そうよ。あなたたちの担任は、校長先生の『めんこ』だもの。誰もそんなの書かせないわ」

そう言えば、由紀を迎えに来た時の彼らの様子は、ただの「校長」と「教師」ではなかった。横田は学校側からすれば一教師のくせに、マスコミの動向などを掌握し、それを逐一報告に来ているような雰囲気だった。

「ね、あの子のカバン届けに行つてあげて」

「私が？」

「今のところ、飯沼さんを特別視してないのあなただけみたいだし。頼むわ」

細い身体からは想像できない強い力で、保険医が振り向いた由紀の肩を叩く。

同時に、由紀の携帯電話が鳴った。

「お前……いつから使いつ走りになったんだよ」

青陵学園から歩いて3分ほどの繁華街近くにある喫茶店の入口近くに座っていた慎二が、口を軽く開けて由紀を見上げてきた。

「失礼ね。私がそんなことさせられる人間に見える？ 具合悪くなつたクラスメートのよ」

「クラスメート、ねえ。で、俺を呼び出した理由は？」

保険医に聞いた話を、慎二に順序立てて話す。

「そのかばんの持ち主が、江頭のねえ……」

「そ。だから彼女にかばんを届けて、話もしたいのよ」

「でもよ、そう簡単に話すか？ お前が江頭の名前言っただけでぶつ倒れたんだろ？」

「だから、慎二くんを呼んだんじゃない。それに私、目つけられちゃってんの」

信じられない、という言葉をありありと表情に浮かべて、慎二が見つめてくる。

「とにかく行こう。すぐそのマンションらしいから」

「はいはい」

立ち上がった慎二が笑いをこらえている。一発ぶん殴ってやりたところだが、人目も多いしあきらめて、由紀も立ち上がる。

「おい、お前に目つけてる奴ってあいつらか」

慎二の視線の先を見ると、あゆみともう一人、伸びた髪をひつつ

めた少女が、じつとこちらを見つめていた。

「その通り。飯沼さんが早退した原因作つたのもあの子ら」

「ふうん。お前に目つけるなんざ、よっぽど人間を見抜く目持っていないんだな」

「冗談はいい加減にしなさいよ」

あゆみらに見せつけるように、慎二の頬をグーの形で殴る。

「ちよつとは手加減しろ。バカ」

「ありがとうございます」

感情のない乾いた声に送られ、由紀は、頬を抑えた慎二とともに喫茶店をあとにした。

16・監視（後書き）

次回更新は、明日22日（火）の予定です。

17・独断

「あいつら、まだついて来てるな」

隣を歩く慎二が、小声で由紀に知らせる。

相模市一を誇るショッピングビルのショーウィンドウに目をやると、尾行をするにはあまりにも近い距離で、あゆみたちがついてくる。

「へったくそな尾行ね」

「何だつて、そこまでお前に執着するんだ？ あいつら」

「それはこっちが訊きたいくらいよ。たかだか飯沼さんを保健室に運んだ、っただけで」

慎二が突然、大きくため息をついた由紀の腕を引いた。

「由紀。中入るぞ」

「は？ 何いきなり」

「バカ。あいつらまくんだよ。あんな奴らについて来られたんじゃ、はかどんねえだろ。10分後、駅の西改札な」

カバンを取り上げた慎二に指でOKサインを出し、人ごみに紛れる。

1階は各メーカーの化粧品売り場が並び、会社帰りかたまた主婦か、たくさんの女性が店員に化粧をしてもらったり、立ち止まって口紅なんかを見ている。多くの香料をブレンドしたような独特の香りが、由紀はどうも苦手だ。

ほのかは無縁のようだが、女はどうして香水や化粧品に弱いのだろう。

ほのかといえ、今朝の彼女はどことなく様子がおかしかった。ふだんからあまり話す方ではないが、今日は一段と無口で、目も赤かった。

正樹や昭太もいるから心配ないとは思うが、自分と離れて、彼女はうまく調査に入っていけるだろうか。

湧き上がる不安を追い払うように、由紀は小さく頭を振った。とにかく今は、あゆみらの尾行をまいて、西改札口に行かなければならない。

待ち合わせ時間まで、あと8分。由紀は辺りに2人がいないことを確かめると、一番近くにあるドアに向かって歩き始めた。

「ここか」

由紀の手にある住所と地図を覗き込んで、慎二はマンションを見上げた。

相模駅のちょうど真裏にあるクリーム色の建物は見た限り、築5年〜10年といったところだろう。辺りは繁華街のにぎやかさは打って変わった静けさで、駅をはさめばこうまで違う雰囲気をもしだしている。

「飯沼って子、話してくれるかね」

「わからない。三井さんとかかわりだけでも話してくれればだいぶ違うと思うけど」

珍しくオートロックではない玄関から右に折れたところのエレベーターに乗り込み、由紀はつぶやく。園子の家は5階東の515号室だ。

【飯沼】とだけ書かれた表札の下にあるインターホンを鳴らす。

『はい』

「あの、添嶋です。カバン持ってきたんだけど、開けてくれないかな」

プツツという小さな音がして、通話が切れた。しかし、園子が出てくる気配は感じられない。

やはり、顔を見せてくれないのか——不安になった由紀は思わず、慎二を見上げる。

「大丈夫だろ。明日、カバンがなけりゃ困るの彼女だぜ」

「学校休むつもりなら、カバンなんていらないわよ」

「そりゃそうだ」

由紀の言葉に納得したのか、慎二が再度インターホンを押す。

『……添嶋さん、ひとり？』

機械を通した園子の声が、ぎこちなく由紀に訊ねてくる。

「うん。そうよ」

慎二に目配せをして、インターホンに話しかける。すると少しして、重そうな茶色のドアの向こうから、鍵のはずす音が聞こえた。

「具合、大丈夫？」

チエーンの向こうから顔をのぞかせた園子に、由紀は微笑んで見せた。

用心深く、辺りに目を配っていた園子だったが、由紀がひとりで来たと認識し、チエーンをはずす。

「はい。明日……どうするの？」

ドアを開けた園子にカバンを渡し、由紀はあえて問う。

「お金、ないんでしょう？」

無言のまま、園子はうなずく。足もとのコンクリートに、ひとつ、

またひとつ、園子の涙がしみを作る。

由紀は小さくため息をついた。これ以上訊ねても園子はきつと答えないだろう。ならば。

「私が、貸してあげようか」

「……え？」

園子が初めて、由紀の目を見つめる。

「急場しのぎにしかないけどね。でも、このお金を渡したあとは、あの子らには絶対手出しはさせない。約束するわ」

「でも、今度はあなたが」

「もう目つけられちゃってるんだから、どうなろうと同じことよ」

唇を噛みしめた園子が、目を伏せる。

「ごめんなさい。私のせいで……」

「気にすることないって。じゃ、明日待ってるからね」

園子の肩を、両手でたたく。

涙にぬれた目で見上げてきた園子が、由紀の顔を見てうなずいた。

「……お前、馬鹿か」

園子の家のドアが閉じられるのを確認して歩き出した由紀に、慎二が大きなため息をついた。

「仕方がないでしょう。あのままじゃ、飯沼さん口開こうとしないんだから」

エレベーターに乗り込み、由紀は壁に背をもたせかける。

「で、どうする気よ？ 金渡してそのまんま、なわけないだろ？」

「当たり前じゃない。三井さんらの動向を探るわよ。あの口ぶりだと恐らく、犯人と接触するすべを彼女らは持つてる。協力してくれるでしょ？ 慎二くん」

「ま、俺の担当は江頭の交友関係の洗い出しだから、協力はしますよ。でも、村上にはちゃんと報告しとけよ」

下へ降りる電光掲示板を見ながら答える慎二に、由紀は指でOKサインを出した。

18・接近

時計の音だけが、誰もいない部室内にひびく。

わきに置いてあったと思う書類がすべり落ちる音で、ほのかは我に返った。

「いけない」

古ぼけたタイルの床に広がった青陵高校のアーチェリー部の部員一覧を拾って、小さくため息をつく。

昼休み、正樹が由紀から聞いた、自殺者を出した「1年前のいじめ」。

その手がかりをつかむために、飯沼園子と三井あゆみの資料に目を通すが、内容がまったく頭に入らない。

代わりに浮かぶのは、昨日、いじめられて自殺した娘の無念を晴らすとする、乾の姿。

中学時代、もし、自分が死んだら父は、母は、娘の無念を晴らすと動いてくれただろうか？

ほのかはきつく目を閉じる。自分の身の保身しか考えない両親が、そんなことをするはずはない。それどころか、最初からいなかったものとして、存在すら抹消されたに決まってる。

誰も……自分の苦しみを分かってくれる人はいなかった。そう、

今までは。

でも、先生なら。いじめによる自殺で娘を亡くした彼になら、わかってもらえそうな気がする。

そんなほのかの思考を、ノックの音がかき消した。

「は、はい」

いずみの練習を見学しに行った正樹と昭太が戻ってきたのだろうか？

念のために書類を段ボールにしまって机の下に隠し、大きく呼吸を繰り返してからドアノブを回す。すると。

「……乾先生」

白地に、紺の線が入ったジャージを着て立っているのを見たほのかの頬は突然熱くなり、目を伏せる。

「教室にいなかったから、たぶんここだろうと思って。昨日は本当にすまなかった。あんな話を聞かせてしまって」

うつむいたまま、ほのかは何も言わずに首を振る。

「こんなことを言うと、不謹慎に聞こえるかもしれないけれど……昨日は、嬉しかった」

「え？」

思わず顔を上げたほのかから、乾が照れたように目をそらす。

「いじめで娘が死んだんだ、と学校に歯向かっていると、だんだん他人の目が冷めてくるんだよ。『いいかげんにしろ』だとか、『もういい加減やめておけ』とか。でも、君は違った。……娘のために、泣いてくれた」

「先生……」

「それだけで、幾分かは救われた気がする。娘もきつと、喜んでくれているはずだ。ありがとう」

「そんな……違うんです！」

深々と頭を下げてくる乾の姿にいたたまれなくなっただのは、思わず叫んだ。

「北村？」

「私も、中学時代にいじめられていたから、彼女の気持ちが痛いほどわかるんです。ただ、それだけなんです」

「そう、だったのか」

驚いた表情の乾に、うなづく。

「私は、娘さんみたいに死ぬ勇気がありませんでした。私の居場所はどこじゃない、いつか、違うところへ行ける。ただじつと我慢して、いじめに歯向かうことも死ぬこともできなかった、ただの臆病ものなんです」

「それは違う！」

突然の乾の大声に、ほのかの肩が震えた。

「いいか北村。『生きること』を選択した君は、臆病ものなんかじゃない。俺の娘のように死んでしまったら、何もならないんだぞ」

「生きることを、選択……」

乾がうなずく。

「今、こうやって仲間と活動できるのも、いじめに負けなかったからなんだぞ」

いじめに負けなかった——そんなことを言ってくれたのは、乾が初めてだ。

ほのかの目から、昨日とは違う涙がこぼれてくる。

「北村が、今の自分と仲間を大切にしていれば、それでいいじゃないか」

高校に入っつてすぐに打ち解けてくれた由紀と、同年代の男子と関わることを知らなかった自分に根気よくつきあってくれた正樹や慎二、そして昭太。

大切にすべきものは、ここにある。

「……はい、ありがとうございます」

気づかせてくれた乾に、ほのかは深く頭を下げる。

「もうこんな時間か。早く練習に行かないと、何を勘繰られるかわからないな。何かあったら、いつでも相談に来るんだぞ」

うなずいたほのかの肩を軽く叩いて、乾が部室を出ていく。

ほのかよりも辛い思いを抱えているのに、なぜ、一番欲しかった言葉をくれたのだろう……。――

ドアをじっと見つめたほのかの胸に、いつもとは違う苦しさがあった。

19・『取材』

心なしか、浮わついた雰囲気グアーチエリー部の野外練習場を包んでいるのを、昭太は感じた。

その原因は、まだ現れない顧問の乾ではなく、昭太の隣に立つてカメラを構える正樹のような気がしてならなかった。

しかし当の正樹は、一人、真剣な表情で的に向かって弓を射るはずみを、ファインダー越しに見つめていた。

「……すごいな。彼女」

カメラを胸元まで下げた正樹が、誰にともなしにつぶやく。

正樹の視線の先の的の中央に目を移すと、いずみの放った三本の矢がすべて刺さっていた。

正体の知れぬ犯人につけ狙われる中、明るさを失わないいずみはただ、

『事故で死んだ友達の、願いを叶えたい』

その一心でまた、弓をつがえる。

笛の音のすぐ後で、また弦の張りつめた音が響き、放たれた矢がまた、的の中央を的確に射抜く。

大きく息を吐きだしたいいずみの顔に、笑みがこぼれたその時、由

紀よりやや短い髪型の女子部員が、笛を手にしたままいずみのもとに近づいた。

昭太も、正樹も二人の様子を凝視した。何かあった場合すぐに動き出せるよう、足を軽く動かす。

しかし二人は少し話をしたのち、いずみが女子部員のフォームを見ながら、アドバイスをしているようだ。

時折笑いあいながら、ともに練習をする姿はほほえましくもある。

「どう思う？ 南」

「どう思う……って、何が？」

正樹のトーンに合わせて声をひそめた昭太の顔を見ず、正樹が続ける。

「片山さ。彼女が狙われる理由……見当つくか？」

「いいや。全く。見る限り、明るくて人懐っこいし、恨みを買うつような人間じゃないと思うけどな」

昭太の言葉に納得したようにうなずきながらも、正樹の表情は晴れない。

「何か、気になることでもあるのか？」

「被害者はすべて、青陵高校の生徒だ。由紀の情報だと、もうひとりがターゲットになっているらしい生徒もいる。なのに」

正樹の言葉が終わるのを待たずに、近くの扉が開いた。同時に、男子生徒の「集合!」という声を合図に、整列する。

「遅くなつてすまなかつたな。これから早速、実戦形式の練習に入る。各自チームに別れて準備してくれ」

大きな返事とともに、部員たちがぎびぎびと動く。

「南、来てたのか」

「はい。ウチの部長がぜひ、次号で特集組みたいってんで連れてきました」

昭太の横で、正樹が頭を下げる。

「新聞部の部長つて、村上か。昨日はすまなかつたな」

「いえ。気にしないでください」

「何か、あつたんですか?」

やけに親しげなふたりの様子が気になつて訊ねるが、答えを聞く前に笛の音が鳴り、弓を引き絞り、弦を放す乾いた音が、規則正しく練習場に響き渡る。

「笛が鳴つてから、みんな矢を放つんですね」

「ああ。一步間違えると危険な競技だからな。必ず笛やブザーで合図をする決まりになっている」

部員達の練習を見つめる乾の目は、真剣そのものだ。

「出場選手は、だいたい決まったんですか？」

再びカメラを構えながら問う正樹の横で、昭太はメモ用紙を広げ、乾の隣に移動する。

「取材」という名目で来ているので、何もしないわけにはいかない。

「いや、今はまだ調子がよくても、大会間際にコンディションが悪くなるものもある。もう少し見極めてから決めようと考えてるよ。村上がレギュラー当確と見ている部員はいるか？」

乾の問いに、少し間を置いてから正樹が答える。

「やはり部長の沢田先輩に、横山先輩。2年からは神崎さんと片山さんあたりでしょうか」

「なかなか鋭いな。君は」

意味ありげに笑いながら、乾がうなずく。

「沢田・横山・神崎は安定した実力を出せていると、前任者から報告を受けている。片山はまだ未知数だが、練習熱心だし、フォームも安定している。イギリスに行く前には、全国でも有名な『緑が丘アーチェリークラブ』に所属していたしな」

「先生。片山さんのこと、よくご存じなんですね」

何の気なしに、昭太がつぶやく。しかし、乾は一瞬虚をつかれたように黙り込む。

「……ああ。留学した時の資料を見せてもらったからな」

穏やかな表情の正樹が、鋭い目でこっちを見た。思わず昭太は足元に視線を落とす。

何か、まずいことでも訊いたのだろうか？ さっきまでとは違う微妙な沈黙が、3人の間にただよう。

その空気を引き裂くように、試合終了を告げる笛の音が、風に乗って高らかに響き渡る。

「よし、チームを組みかえてもう一度！」

乾が声をあげた。すると記録をつけていた部員が、こちらへ駆け足でやってくる。

預かったノートと生徒達のフォームと見比べながら、空いたスペースに何やら書き込んでいく。

「何ですか？ それ」

気まずさを押し殺して、昭太はノートを覗き込む。

「これは、ドローイングしたときの時のフォームやタイミングで、どの辺に矢が飛んでいくのかを分析するノートだ。各部員がより正確にポイントをあげるための参考になればと思ってな」

乾の言葉に、正樹も手元を覗き込む。細かな字で、各個人のくせや改善点などがびっしりと書かれている。

感心して覗き込んでいる昭太の胸元の携帯電話が、突然震えだした。乾はさんで向かいにいる正樹のも同時に鳴り出し、乾が怪訝そうにこちらを見つめる。

「おいおい。仲のいいのは結構だがな、携帯電話まで同じタイミングで鳴ることはないだろう」

苦笑いを浮かべながら画面を開く。由紀に呼び出されていた慎二からで、「至急部室へ」の文字が入っている。

「別の取材に行っていた部員が戻って来たみたいなので、これで失礼します」

「編集会議か。アーチェリー部は一面で頼むぞ」

立ち去ろうとする昭太と正樹に、乾が半分笑いながら軽く手を上げた。

20・変わらぬ姿勢と意外な素顔

「何だって！？ 本気で言ってるのか？」

突然、部室内にひびいた大声に、昭太はもちろん、ほのかも、そして慎二も緊張した面持ちで、正樹を見る。

「そう。もしかしたらこれが、犯人につながる大きな手がかりになるかもしれないでしょ」

あまり似合っていたとはいえない紺のブレザーの上下から、見慣れた青のＴシャツに、白のホットパンツに着替えた由紀が、いつもと変わらない口調でうなずく。

「ほのかに調べてもらったが、その飯沼という子はともかく、脅している三井あゆみには特別、大会での実績はない。クラスでも目立たない少女のようだし、犯人につながるものを持っているとは考えられないぞ」

「でもね村上。今日、私が見た彼女は髪の毛を茶色に染めて、安っぽい香水つけて取り巻きを引き連れたあげく、私にコナかけてきたのよ。裏に何かなきゃ、そんなことしてくると思う？」

由紀のもっともな意見に、正樹が腕を組み、目を伏せる。

もし、本当にそのあゆみという子が犯人とのパイプを持っているのなら、この事件は解決に一気に近づく。

しかし、青陵高校はある意味伏魔殿のような場所だ。行動を起こ

せば、今度は由紀が何らかのターゲットになることは目に見えている。

「だいたい、いじめられてる子の隣に座っただけで目をつけられるような学校で、私におとなしくしてろっていう方が無理。鍵を握る飯沼さんを守るためにも、火の中に飛び込んだ方が早いじゃないの」

「でもさ由紀。もし今度お前がいじめ、もしくは犯人のターゲットになった場合、あの学校じゃ誰も助けしてくれないんじゃないのか？」

「そんなことは覚悟の上。自分の身が可愛くて、こんな仕事やってられますかっての」

口をはさんだ昭太に、早口で由紀がたたみかけてくる。

普段は何だかんだと軽口を叩きながらも、由紀は、のめりこむとことん突っ走る。頼もしい反面、昭太は少し不安にもなる。どんなに男勝りでも、由紀は女の子なのだから。

「お前は、止めても聞かないからな」

「百も承知、のはずでしょ？」

おどけた口調の由紀に、腕を組んだまま、正樹が深いため息をつく。

「……わかった。明日は、俺がお前のガードにつこう」

「村上くん」

ほのかが珍しく、責めるように名前を呼んだ。

「大丈夫よ、ほのか。私が今まで、へましたことあった？」

「でも……」

由紀を見上げるほのかの目に、うつすらと涙が浮かんでいる。

「慎二。悪いが明日は南と一緒にアーチェリー部を張ってくれないか」

「いいけど……大丈夫か？」

ほのかと由紀を交互に見つめ、心配そうに慎二が訊ねる。

「仕方がないだろう。何かあったときにはすぐ、責任が取れる位置にいないとな」

精悍な顔を引き締めて、正樹が自分に言い聞かせるようにつぶやく。

その直後、午後5時半を知らせるチャイムの音が、校内を包みこんだ。

「南、運動部終わる時間だぞ。片山、この後も自主鎌するんだろう？」

「ああ。じゃ、お先に」

由紀の「お疲れ様」に送られて、昭太は部室を出た。

西側に面した窓から、真っ赤な夕陽が廊下へと飛び込んでくる。

夕焼けの下、犯人はどんな思いで、少女たちに矢を撃ったのか。

そして、そのターゲットになぜ、いずみを選ばなければなら
ないのか？

いくら考えても答えの出ない問いを振り払うように首を振り、昭
太は、すぐそばにある階段を駆け下りていった。

「あれ？ 今日練習しないのか？」

ジャージ姿の運動部員が、嬉しそうに帰っていく。その横を歩く
自分と同じダークグレーの制服に身を包み、結っていた髪の毛を下
ろしたいずみが、渡り廊下に立っていた。

「うん。ちょっと寄りたいところがあるんだけど……付き合っても
らっていい？」

背中の中辺りまで伸ばした髪を小さくかきあげたいずみに、
昭太はほんの少しだけドキドキしながら、OKサインを出す。

こうして見ていると、意外と女の子な部分もあるんだな、と感心
する。おとなしくしていれば、下町の八百屋で育ったとはとても思
えない。

しかし、文化部の人間である自分と歩くいずみがよほど珍しいのか、昭太がいずみを観察する以上に、たくさんの運動部員が、追い抜きざまに自分らをじろじろと見ていく。

「ごめんね」

「何で片山があやまるんだよ」

昭太をみないまま、小さく頭を下げるいずみに、昭太は訊ねる。

「私が、練習に出たいなんてわがまま言わなければ、こんな視線にさらされることないのに」

「気にするなよ。たまには注目されるのも悪くはないさ」

本音を言うとあまり気分のいいものでないが、いずみの表情に陰りがあるのを見ていたくなくて、わざと明るい声を出す。

「……ありがとう」

「で、どこに行くんだ？ 早く帰らないと、また親父さんたち心配するぞ」

背の高いげた箱が並ぶ玄関を抜け、外へ出た昭太といずみの周りを、少し冷たい風が吹き抜ける。

「友達の家。その前に、花屋さんに寄りたいな」

「友達の……家？」

オウム返しに問う昭太に、
いずみはやや寂しそうな笑みを浮かべ
てうなずいた。

21・告白

学校近くの花屋に寄ったあと、昭太は、花束を抱えたいずみとともにバスに乗り込んだ。

夕方の6時を過ぎると、太陽はすでに半分以上沈み、真っ赤に染まっていた空には、少しずつ闇が侵入し始めている。

学生の帰宅ラッシュが過ぎたとはいえ、今の時間帯は紺や黒のスーツに身を包んだサラリーマンや、淡いピンクやグレーのベストに身を包んだOLらが、疲れを隠さずに席に座っている。

ひとり分だけ空いていた座席にいずみを座らせ、昭太は彼女の力バンを脇に抱える。

短くクラクションを鳴らしたバスがゆっくりとタイヤを滑らせた。昭太の体が少し揺れる。

「ありがと。南くん、座らなくて大丈夫？」

白い菊を真ん中に、ピンクのカーネーションやかすみ草であしらった花束を大事に抱えたいずみが、心配そうに見上げてくる。

「大丈夫。女の子を立たせて座るなんて、俺のプライドが許さないの」

少しおどけた昭太の物言いがおかしかったのか、いずみは吹き出したのち、花束に顔をうずめる。

「おまえ、笑いすぎ」

「だって……、南くんには似合わないセリフなんだもの」

いずみが肩を震わせるたびに、セロファン紙が乾いた音をたてる。しかし、両隣に座っているサラリーマンはそれに構うことなく、振動に合わせて首を前後に振っている。

『次は、飯坂橋。お降りの方はお近くのボタンを押してください』

型で押したようなアナウンスののち、誰かがボタンを押した電子音が車内にひびいた。

少し走ったのち『飯坂橋』と書かれた停留所にバスが止まると、半分近くの間が我先にとばかりに降りていく。

昭太も、立ちあがりたいいずみの後について、一番最後にタラップを降りる。

バスで行けば、名徳学園からわずか5分ほどの距離なのに、複雑に入り組んだ道路をまともに歩くと、30分以上はかかる。

「こつちよ」

バスが走り去ったのと反対方向に、いずみは歩き出す。

すると、いずみを追って振り返った昭太が目に向けた先から、見覚えのある赤い車が近づいてくるのが見えた。

……あの車は、確か。

いずみが襲われた時に、猛烈な勢いで走り去った車に似ている。

「南くん、どうしたの？」

足を止めて、反対方向へ走り去る車を目で追う昭太に、前方を歩いていたいずみが声をかけてくる。

「悪い、今行くよ」

張り詰めた心をほぐすように小さく息を吐いて、昭太はいずみの後を追った。

「まあ、よく来て下さいましたね」

閑静な住宅街の一角に立つ、築20年は経っていると思われる古いアパートの1階の中央の扉から、ひどく痩せた中年の女性が顔をのぞかせた。

「もつと早くに来たかったですけど……遅くなってしまって」

深々と頭を下げるいずみにならって、昭太も礼をする。

「そちらの方は？」

「クラスメートの、南くんです」

大きな目でじっと見つめてくる女性に、再度頭を下げる。

「そうですか。よろしかったらあなたもお参りしてやってくださいな。きつと娘も喜びます」

お参り、ということは以前いずみから聞いた「事故で死んだ友達」のことか。

しかし自分はその子とは何の面識もない。いくら自分がいずみの友達（？）だからと言って、上がり込んでいいものなのだろうか？

「大丈夫だよ。詩織ちゃんは見知りする子だったけど、寂しがり屋でもあったから」

いずみの言葉に背中を押される形で、昭太は、あとについて玄関へと上がる。

歩を進めるたび、床が抜けるんじゃないか、と思わせる大きな音が部屋中に響く。

「あれ？ 誰か来てたんですか？」

線香の匂が一番強い部屋の真ん中にある木製の丸いテーブルに、来客用のコーヒークップとソーサーが置かれている。その向こうにある小さな仏壇のろうそくはこうこうと灯され、その脇に、まだ新しい数々の花が花瓶に活けてある。

「ええ。知り合いの方が。詩織もお世話になっていて……娘の、名前です」

気を使っただけ、母親が小さな声で教えてくれる。

いずみの右ななめ後ろに座り、彼女が線香に火をつけるのを見つめる。鉦かねの澄んだ音で、昭太も目を閉じた。

昭太と同じ年で死ぬ人間もいる。手を合わせて初めて、新聞やテレビなどで報じられていることが『対岸の火事』ではないことを実感する。

「どうもありがとう。帰国したばかりで忙しいのに……」

母親が、焼香を終えて向き直った昭太たちに礼を言う。しかし、最後の方は涙で震えて言葉にならない。

「事故、って聞いたんですけど。一体、どこで？」

いずみが、小さな声で訊ねる。すると、母のやせ細った肩が大きく震えて、そのまま激しく嗚咽を漏らす。

「おばさん」

上下に動く肩に手をやり、いずみが心配そうにのぞきこむ。

「……じゃ、ないんです」

「え？」

昭太も、身を乗り出して問い返す。すると、振り絞るような声で母親が告げた。

「事故なんかじゃない。詩織は……自殺したんです」

22・1年前の『事故』

「いいのか？ 俺が顔出しても」

編集会議、という名の報告会解散後、慎二は由紀に誘われてある雑誌の編集部があるビルへと来ていた。

「大丈夫よ。一昨日撮った写真が上がって来たって、源さんが連絡くれたんだし」

源さん、とは確か由紀がよく手伝っているフリーカメラマンの呼び名だ。

その源さんの友達で、由紀の父親が編集長を務めているという写真週刊誌『WAVE』は、斬新なテーマとスクープ満載の雑誌として、にわかに注目を集めている。

父子家庭で育った由紀が、取材や会議などで忙しい父の代わりに面倒を見てくれた、と全幅の信頼を寄せている人物らしい。

「源さん、お待たせ」

7、8人も入れればいっぱいになりそうな狭いエレベーターを降りてすぐ横のドアをノックし、由紀が入っていく。後についていった慎二に、幾人かの男性の視線が集まる。

「何だい、由紀ちゃんの『コレ』か」

無精ひげをたくわえたやせ形の男性が、親指を立てて下世話な笑

みを浮かべる。

「冗談よしてよ。私の理想のタイプはね」

「自分より強い男、だろ？」

積み重なった紙束の向こうから聞こえた野太い声で、室内に笑いが起きる。

「源さんは？」

「隣。調べものしてるから、着いたら声かけてくれとさ」

「ありがと。これ、差しいれ」

ポケットの中から、小さな飴玉を数個近くのデスクに置いてから、由紀が手招きする。

こんな環境で育ってるんだ。どうりで、どんなことにも物おじし
ないはずだ。

「源さん、来たよ〜」

「おお、待ってたぞ。そちらが、高原君だね」

「こんばんは」

物腰の柔らかい、小柄な男性を前に、慎二は戸惑いながら頭を下げる。

フリーカメラマン、と言うと体格のいい、強面こわもての男しか想像できないからだ。

源さんは早速、たくさんの資料の前に置いてあるアルバムを、まず由紀に見せる。

「えー、こんなもん？」

由紀が不満そうな口調で、ページをめくる。

「シャッタースピードが少し遅かったんだろう。こういう場合は…」

源さんが写真を指さしながらアドバイスしている内容が、慎二にはいまいちよくわからない。しかし、由紀の目は真剣そのものだ。

普段はあまり意識しなかったが、じっくり見ると、美少女、と言っても差し支えはない顔立ちをしている。

ほのかのように、とまではいなくても、せめて髪の毛を伸ばして、多少のしゃれっ気でも出ればそれなりにもてると思うのだが。

「……はい、慎二くん」

「へ？」

突然頭上で聞こえた由紀の声に、思わず間の抜けた言葉で返す。

「何考えてたの？」

「い、いや。別に。サンキュ」

受け取ったアルバムをめくり、慎二はすぐに目を落とす。いわゆる「てれ隠し」だ。

「あ、そう言えば源さん。今朝言ってた件なんだけど」

さして気にする様子もなく、由紀は源さんに話しかける。こういうところも、由紀とつきあいやすい一因ではある。

「いいのか？」

慎二の存在を気にしてか、源さんが声をひそめる。

「構わないわよ。彼もこの件に巻き込んだじゃってるから」

由紀がさらりと言う。おいおい、この件は外部にばれたらまずいだろ。

「……そうか？　あまり、下手なことに首を突っ込んでほしくはないんだがな」

源さんの表情が曇る。しかし、その手には古い週刊誌があった。

「青陵学園で去年起きた『事故』だ。それにともなって、一人の少女が自殺している」

付箋のはさまっているページを、由紀が開く。のぞきこんだ慎二の目にも、大きな見出しが飛び込んで来る。

『女子高校生。謎の転落死！』少女を死に導いた【事故】とは？』

「転落死、って書いてありますけど？」

慎二の問いには答えず、源さんが由紀を目で促す。

「去る5月22日（土）、神奈川県緑ヶ丘市にある市立緑ヶ丘病院の中庭に、少女の死体があるのを当院の看護師が見つけた。警察に通報した。死亡していたのは、青陵高校1年生の女子生徒（15）。死因は、頭部打撲による脳挫傷。死亡推定時刻は夕方の4時半から5時までの間とみられている」

「死亡した女子生徒は学校のアーチェリー部に所属していたが、練習中の事故で肩に大けがを負い入院中だった。遺書はなく、警察は事故と自殺の両面から調べを進めている……」

「死んだ女子生徒……名前は植村詩織と言ったが、詩織さんは練習中に、至近距離から左肩を矢で射抜かれている。しかも、学校関係者からの通報で、彼女が病院に運ばれたのは午後7時過ぎだ。練習中の事故、だけで片付けられる問題じゃない」

記事を読んだ由紀と慎二に、源さんが静かに語りかける。

「至近距離から左肩を、ねえ」

距離はともかく、透子をはじめとした被害者に共通している。

「我々編集部はこの転落事故を「いじめによる自殺」と断定して取材が続けていたんだが……上からストップがかかった」

「どうして？」

由紀が不満げに訊ねる。

「恐らく、矢を射った少女側から、何らかの圧力が社にかかったらしい」

慎二は、悔しさのあまり唇を噛む。これでは、死んでしまった詩織はつかばれないではないか。

「ありがとう、源さん。この雑誌、借りて行ってもいい？」

「ああ。でもな二人とも、決して深入りはするなよ。恐らく、この事故の裏には大物がからんでいるからな」

源さんのやや強い口調に、慎二も、もちろん隣にいる由紀も、黙ってうなずくしかなかった。

23・決意

どう、声をかけたらいいのかわからない。

詩織の家を出てからバスに乗り込んでみずと、いずみは何もしやべらずにうつむいたままだ。

帰宅ラッシュを過ぎたバスの中は、残業帰りのサラリーマンか、大きなスポーツバックを抱えているジャージ姿の学生の姿がちらほらとあるだけで、席も半分以上空いている。

やけに甲高い声が、抑揚をつけずに商店街近くのバス停の名を告げる。

うつむいたままのいずみの代わりに、昭太がボタンを押す。

チャイム音が響いたあとしばらくして、バスがゆるやかに止まる。

「南くん、今日はどうもありがとう」

「家まで送ってくぞ」

「うつん、いい。すぐそこだし。じゃ、また明日」

昭太の目を見ず、いずみが足早にバスを降りた。短いクラクションが鳴り、バスが再び走り出す。

物も言わない。笑顔を見せないどころか、目すら合わせないいずみを見たのは初めてだ。

自殺——今日、初めて手を合わせた昭太でさえ、その事実が重くのしかかっているのに、留学する前はずっと切磋琢磨してきた友人なら、なおさらだ。

しかも母は、その娘の自殺の原因を語らないままだった。

名徳学園で『詩織』という少女が自殺した形跡はないから、間違はなくほかの高校だろう。

彼女がどの学校に通い、どんな理由で飛び下りなければならなかったのか？

次の終点でバスから降りた昭太はいつしか足を止め、暗闇に点在する星を見上げた。

明日……いずみは学校へ来るだろうか？

「自殺？」

翌朝、事件の整理と今後の相談のために朝早く集合した新聞部の部室で、昭太は思わず大声を上げた。

「声がでかいって」

上下を濃紺のデニムで合わせた慎二が、口もとで人差し指をたて

る。

「そう。この記事読んで」

青陵高校の紺のブレザーに身を包んだ由紀の表情も、心なしか暗い。

「転落死、か」

「記事ではそうなっているけど、事実でもそうでもないみたいなの」

由紀が夕べ、父親の友人のフリーカメラマンから聞いた話を、手短かに説明してくれる。

「植村、詩織？」

「そう。彼女の転落死……自殺の原因も、恐らくその事故じゃないかって」

詩織……。昨日、いずみとともに弔問に行った少女の名前と同じ。

「その植村って子の家族構成とか、わかるか？」

「どうしたんだ？ 南」

名徳学園指定のグレーのブレザーを着ている正樹が訊ねてくる。

昭太も、事故で死んだとされていたいずみの友人、詩織の状況をわかる限り伝える。

「同一人物……か？」

腕を組んだ正樹の口から、小さくため息が漏れる。

「この事件、どうやら1年前のこの事故がからんでいるみたいね」

由紀が、机の上に雑誌を乱暴に置く。

「変なところでつながってきたみたいだな、村上」

「ああ。被害者の江頭透子をはじめとする被害者5人と飯沼園子が、その事故に関わっている可能性が高くなった」

「だからこそ、今日の飯沼さんの行動が力ギを握るのよ」

由紀が言葉に力をこめて、青陵高校指定のカバンから、封筒を取り出した。

「三井あゆみに払う10万円、か」

「彼女らを操っている奴が絶対にいる。そいつの正体さえつかめれば、犯人を特定できるわ。必ず」

いつもと違う空気を発して、由紀がつぶやく。

「金を渡すタイミングはどうする？ 由紀」

「飯沼さんの動向次第だから、もしかしたら、放課後を待たずに渡しちゃうかも」

「了解。……南、頼みがある」

制服のネクタイを緩めた正樹が、自身のカバンから真新しいノートを取り出す。

「片山に、ノートの代筆頼んでおいてくれ。俺はこのままここを出て、青陵高校を張るから」

「……は？」

昭太はもちろん、斜め前にいた慎二も、その隣のほのかも驚いた表情で彼を見つめる。

「ここにいたんじゃ、有事の時に対応できない。それに、ショックを受けてる片山を授業に集中させることもできるだろ」

「でも、あいつが今日来るとは」

「来るさ。友達の無念を晴らしたいなら、必ずな」

正樹が、自信を持って断言する。その直後、ドアをノックする音が聞こえた。

「はい」

由紀と正樹が暗室に姿を消したのを確認して、昭太がドアを開ける。

「おはよ、南くん」

「片山。……来て、大丈夫なのか？」

普段と変わらない声音で挨拶をしてくるいずみだが、泣いたせいか、目が少し赤い。

「うん。詩織ちゃんがあんなことになったって聞いて……。私、何があっても彼女の願いを叶えなくちゃって思ったの。それが、辛かった彼女の力になれなかった私ができる、唯一のことだと思うから」

少し震える声に力を込めて、いずみが昭太を見据える。

「色々迷惑かけると思っけど、また、よろしくお願いします」

「わかった。俺でよければ何でも協力するよ」

正樹の言う通りだった。彼女はきつと、マイナスを力に変えて進む力を持っているのだろう。

いずみのためにも、詩織のためにも、この事件の解決を急がなければならぬ。

「……ありがとう」

深く頭を下げるいずみを見下ろした昭太は、その場にいる慎二とほのかとうなずきあった。

24・強奪

午前8時45分。

名徳学園はもちろんのこと、青陵高校でも1限の授業が始まるはずだ。

正樹は初めて学校を「サボリ」、青陵高校近くの喫茶店でモーニングセットを注文した。

学生に見えないように、準備していた濃い灰色のダブルスーツの上下に、下は白地に黒のストライプが入ったYシャツを着て、だて眼鏡をかける。

携帯電話に常に目を配りながらではあるが、由紀と別れてから購入した求人雑誌をめくる。

パツと見、どこかの会社をリストラされて職を探している若者に見えるだろう。

「いらっしゃいませ」

店員のやる気のない声が、正樹の耳をかすめる。

何人かの女子高校生が、正樹の隣のテーブルに座った。

横目で、青陵高校の生徒だと確認する。

「ねえ、あいつ持って来ると思う?」

「さあね。今日フケるつもりなんじゃないの？」

「ばっかだよ。携帯の電源までご丁寧に切っちゃって。逃げられるはずなんかないのに」

会話の内容からいって、恐らく、飯沼園子を脅している三井あゆみとその取り巻きだろう。

「もしあいつが逃げたら、本当にやるの？」

背中あたりまで伸びた黒髪を、きつくひつつめた少女の声が低くなる。

「あたりまえじゃない。ちゃんと連絡を下さいつて、あの人だって言ってるんだし」

あの人？

ついさっき来たコーヒを片手に、求人雑誌をめくっていた正樹の手が止まる。

「あの人素敵よね」。『あなたがいじめられた仇は私がとる』なんて言ってくれて」

「でもさあゆみ、あまり深入りしない方がいいんじゃない？　ここらでやめた方が」

「冗談じゃないわよ。私達、透子や園子たちにどれだけいじめられてきたと思ってるの？　これくらいは当然じゃない。第一、練習中

の事故なんてもったいぶって人一人殺しといてさ」

隣に座っていたボブカットの少女が、あゆみの口を慌ててふさぐ。

「声がでかいよ」

「そうよ。これ、外に漏らしちゃいけないって横田に言われてんじやん」

「何よ。あんな奴、校長とイイ関係だからっていばっちゃってさ」

口に含んだストローを強くかみ、あゆみがつぶやく。

「あ！ あれ、園子じゃない？」

眼鏡をかけた少女が、ガラス越しに外を見る。

正樹が視線を移すと、青陵高校の制服を着たショートボブの女子生徒が、うつむいたまま歩いて行くのが見える。

あゆみたちが立ち上がる。正樹も、パンをコーヒーで押し込んで後を追う。

「園子、遅かったじゃないの」

あゆみが、ショートボブの少女を明るいい声で呼びとめる。

しかし園子と呼ばれた少女は顔をこわばらせ、そのまま振り返って走り出す。

「ちょっと！」

あゆみが後を追いかける。

正樹はあたりを見回し、喫茶店とまだ開いていない雑貨屋らしき建物の間の小路に入った。

そのまま少し大きな通りへ出て、園子が走る方向へ並走する。

時折、建物の間から大通りをのぞく。

由紀と合流する前に、園子をあゆみらの手に渡したら、すべてが水の泡だ。

建物越しに園子が走る姿を確認すると、スピードを上げて大通りの方へ向きを変えた。

——いちかばちか！

正樹は、必死に駆けてくる園子の手を引っ張った。

「……！」

そのまま小路を駆け抜けてさっきの通りへ出ると、タクシーを呼びとめて園子を押しこんだ。

「い、いたい……何なんです？」

肩を上下させている園子の質問を手でさえぎり、正樹は行き先を告げてすぐ由紀に電話をかける。

10回以上のコールで、やっと電話口に由紀が出る。

『ちよつと何の用？ 授業中よ』

「どうせ退屈してるんだろう？ 三井あゆみらもさぼってることだし、お前も出て来いよ」

『……なんで彼女らが教室にいないこと知ってるのよ？』

怪訝そうな由紀に、ことの次第を説明する。

『わかった。適当な理由をつけて早退するわ。場所は？』

「駅の裏手の児童公園」

了解、と短く応えて、由紀が電話を切った。

「……あの」

「飯沼園子さんだね？ 俺は、昨日青陵高校へ転校した添嶋由紀の知り合いなんだが、君に訊きたいことがあるんだ」

由紀の名前を出した途端、園子の体が小刻みに震えはじめた――。

25・尋問

由紀と連絡を取ってから約5分後。

タクシーから降りた正樹は、小さく震えたままの園子の手を引き、公園内へと入った。

まだ冷たい風が辺りに吹き、色づき始めた木々を揺らしている。

まだ朝早いせいか、子供が遊んでいる様子はなく、犬の散歩をしている老人が、正樹らの前を通り過ぎて行く。

「私に訊きたいことって……何ですか？」

正樹の手をほどき、かすれた声で、園子が訊ねてくる。

「君が、三井あゆみさんに脅されている理由だよ」

顔をあげた園子に視線を向け、正樹は続ける。

「三井さんはさっき、喫茶店で俺の隣に座って言っていた。『透子や園子たちにいじめられていた』と」

園子の体が、再度震え始めた。

「君らがいじめていたのは、彼女だけじゃないはずだ。もう一人、死に追いやった人間が」

「やめて下さい！」

園子は激しい口調で、正樹の言葉をさえぎる。

「私は……何の関わりもないわ!」

「関わりがなければ、どうしてあなたが脅されるの?」

少し高い、馴染みのある声が、園子の言葉を引き取った。

「由紀。早かったな」

「まったく、驚かさないでよ。出てくるの苦労したんだからね」

青陵高校のブレザーを着た由紀が、やや乱暴にネクタイをほどく。

「悪い」

由紀はちらりと正樹に視線を送ると、改めて園子に向き直った。

「あのね飯沼さん。今回の事件は、あんたが黙ってればそれでいいって問題じゃないの。あなたの友達のみならず、他校の人間も巻き込んでんのよ」

「……え?」

「全国大会の常連なら知ってるでしょ? 片山いずみ」

由紀の顔を見つめる園子の表情が、さらにこわばった。

「あの子は、ここにいるお兄さんの友達なの。自分が狙われた理由

もわからず、それでも、死んだ友達……植村詩織さんの無念を晴らしたいって、練習に明け暮れてるの」

園子の体が、後ろに大きく揺れた。正樹は一步前に出て、彼女を支える。

「1年前、植村詩織さんを死に追いやる原因を作ったのは、君と……今回の事件の被害者たちだね？」

「そうよ。園子と透子たちが、彼女の肩に至近距離から矢を射ったの。だから彼女は自殺した」

やけに甲高い、そして、聞き覚えのある声が、園子の代わりに答える。

「三井さん……」

振り返った由紀に答えず、あゆみと取り巻きの少女二人が、正樹へ近づく。

「あなたたちグルだったのね。一体、何を探ってるわけ？」

「こつちこそ訊きたいわよ。あんたたちのバックにいるのは誰？」

正樹と園子をかばうように、由紀が割り込んだ。

「答えるわけないで……」

あゆみの声が途切れた。由紀に腕をねじあげられた彼女の口から、悲鳴が漏れる。

「私をなめてもらっちゃ困るわね。辛抱強さには自信があるけど、それ以上に負けず嫌いなものよ」

由紀が言い終わらぬうちに、正樹の後方の草むらから何かがきしむような音が聞こえた。

「由紀！ その子から手を放せ！」

由紀に向かって叫ぶと、正樹は園子の上におおいかぶさるようになり、その場に伏せる。

「きゃああっ！」

大きな音のち、あゆみのものでも、由紀のものでもない悲鳴が辺りにとどろいた。

すぐに正樹は顔を上げる。

すると、由紀とあゆみがいた場所の向こう側に立っている細い木に、何かが刺さっているのがわかる。

「大丈夫か！？」

とりあえず園子から離れ、正樹は倒れこんでいる由紀に駆け寄る。

「……つた来た」

低い声でつぶやいた由紀が、正樹の手を借りずに立ち上がる。

「由紀！ 待て！」

正樹の制止を振り切り、由紀が木々の向こうへ消えた。

追って行きたいのは山々だが、このまま園子らを放っておくわけにもいかない。

胸ポケットから携帯電話を取り出した正樹は、すぐに小倉の番号を呼び出す。

『村上くん、朝早くにどうしました？』

突然の電話に驚いたのか、いつもと違う声が聞こえてくる。

正樹は、今起きたことを手短に説明し、近くの警察に応援を要請する。

小倉が電話を切るやいなや、取り巻きの少女たちが、倒れているあゆみを無理矢理立たせて走り出す。

「待て！」

腕の中でぐったりしている園子を放っておけず、追うことができない。

あゆみの身柄を確保できないばかりか、犯人を追っている由紀の様子もわからず、もどかしさだけがつのる。

「おい！ しっかりしろ！」

園子の頬を軽く叩く。

「私……関係ない。1年前の事件は……」

薄目を開けてしぼり出すように口にすると、園子は意識を失う。

「おい！」

正樹が叫ぶと同時に、乾いた音が近づいてくるのが聞こえる。

「名徳支部の小倉さんに請われて来ました」

警察手帳を出した私服警官に、正樹も自らの身分証明書を示す。

「仲間が犯人を追って、林の中にいます。ここを頼みます」

警官に園子を預け、正樹は、由紀の消えた方向へ駆けだした。

26・離脱

木々に生い茂る葉が、公園の奥へと進む正樹の肩をかすめ、音を立てる。

緑ヶ丘市よりも都会の相模市にもこんな自然があるのか、と一瞬思ったが、心を留めている時間はない。

犯人らしき人物が、江頭透子らを襲うために巧みに利用したであろう三井あゆみに向けて矢を射ったということは、追う由紀にもそれと同じ、いや、それ以上の危険が迫っているのは明らかだ。

正樹は胸ポケットにしまっていた携帯電話を取り出して、由紀の番号にかける。

しかし数回呼び出し音が鳴ったあとは、オペレーターの声がむなしく響くだけだ。

「由紀！ どこにいる！？」

立ち止まり、辺りを見渡す。しかし、由紀からの返事は聞こえてこない。

もしや、犯人の手にかかって——いや、そんなはずはない。

どこで何を身につけたかは知らないが、腕の立つ由紀ならきっと、そうなる前に自ら身を引くはずだ。

湧き上がるいやな予感を心で押し殺した正樹のはるか前方で、草

を踏む大きな足音が聞こえて来る。

そこへ向かって駆けだした正樹の目の前に突然、太陽に照らされた大きな空間が姿を現した。

その真ん中に立つ、樹齡が50年は超えていそうな大木の陰から、青陵高校の紺のブレザーの肩口が見えた。

思わず安堵のため息をついた正樹は、ゆっくり大木に近づく。

「由紀、大丈夫か？」

肩を叩いた正樹とは反対方向に、由紀の身体が大きく揺れる。

「どうした！」

力なく下りている腕を引きよせた正樹の胸に、由紀が倒れこむ。

「しっかりしろ！ 由紀！」

頬を叩いて呼びかけると、由紀がうつすらと目を開ける。

「ごめん村上……ドジっちゃった」

ようやく聞き取れるほどの小さな声でつぶやくと、由紀はそのまま意識を失った。

『何だって！？ 由紀が？』

相模市にある総合病院の救急医療センター入り口で電話をかける正樹の耳に、驚いた様子の慎二の声が入る。

「ああ。状態はよくわからないが、今、治療を受けている」

こみあげてくる怒りをこらえ、正樹は今ある事実だけを伝える。

「小倉さんの話だと、三井あゆみに脅されていた飯沼園子もここへ運ばれたらしい。慎二、ちょっと抜けだして来てくれないか？」

『俺は別に構わないけど……昭太とほのかには何て言う？』

昭太にはいずみの警護が終わってから話しても大丈夫だが、ほのかには……どう伝える？

一昨日、アーチェリー部顧問の乾の娘がいじめで自殺していることを聞いて、少なからず動揺の見える彼女に、由紀の今の状態を伝えるのは、酷か。

せめて由紀の意識がはっきり戻ってからの方がいいだろう。

「二人には明日、俺から話すよ」

『わかった。すぐ行く』

慎二との電話を切り、正樹は大きくため息をついた。

完全に、自分のミスだ。

普段は斜^{はす}に構え、どんなことでも余裕を持っている由紀ではあるが、一度感情のスイッチが入ると、どこまでも突っ走る。

昨日、園子にお金を貸すと言った時点で、その兆候は見えていたはずなのに……。

「村上くん」

由紀の眠る集中治療室の前にもたれかかる正樹に、小倉が声をかけてくる。

「すみません小倉さん。迷惑をかけてしまつて」

「こちらは大丈夫ですよ。幸い、添嶋さんのお父さんは出張でいな
いようですし。ただ」

小倉の表情が、しくもる。

「ただ？」

「看護師の話ですと、血圧が低くなっているので、意識が戻るまでは予断は許さないと」

唇を噛みしめ、正樹は足元を見つめる。

「村上くん、自分を責めてはいけません。犯人と接触した添嶋さんの命がとりあえず助かっただけでも、よしとしなければ」

「……はい」

正樹がうなずいてすぐ、治療室の透明な扉が開く。

「ご家族の方ですか？」

正樹よりも身長の低い、がっしりした体格を白衣で包んだ医師が声をかけてくる。

「親戚の者です。父親がいま、海外へ出張に行っておりまして」

小倉の言葉を聞いた医師は左手でメガネの位置を直すと、隣の部屋へ正樹らを招き入れる。

「恐らく、濃度の高いクロロホルムをかがされた可能性が高いと思われます」

たくさん書類や封筒に囲まれた狭い部屋の中央の椅子に座り、低く、澄んだ声で医師が切りだす。

「クロロホルムは大量に吸入しますと、死にいたる可能性もあります。今回は幸い、大事にはいたりませんでした。しばらく様子を見るために、入院して頂きます」

「わかりました」

由紀の入院手続きのために、小倉が医師の後について部屋を出ていく。

正樹も少し遅れて部屋から出た。

そして、ガラスの向こう側で酸素マスクをつけて眠っている由紀の様子を見つめる。

由紀が青陵高校へ転校したことで、ようやく、事件の全容を探る手がかりをつかんだと思ったのに、潜入調査はしばらく中止だ。

いや、それよりも。

情報量が豊富で、なおかつネットワークが一番軽い由紀の離脱は、かなり痛い。

昭太はいずみにかかりきりで動けず、ほのかには対外調査は難しい。

慎二と二人で、乗り切っていくしかないか――。

正樹は天井を仰ぎ見て、大きくため息をついた。

27・脱走

電話を切ったあと、慎二は、自分の手に変な汗をかいていることに気づいた。

まさか、あの由紀が……犯人と接触して意識を失うなんて。

一体、青陵高校で何があったのか？

正樹の声も尋常ではなかったし、一刻も早く相模市に向かう必要がある。

まず新聞部の部室へ行き、源さんから預かった雑誌をかばんにつめた。

飯沼園子が同じ病院に入院しているなら、恐らく小倉の事情聴取に同行する可能性があるだろう。

ひとりの女子生徒——いずみの友達に対する『事故』という名のいじめ。そして自殺。

1年前の事件をひも解かない限り、犯人につながる有力な手掛かりは浮かばない。

部室を出た慎二は、すぐそばの階段を下りてまっすぐ玄関へと向かった。

「あれ？ 慎二」

げた箱まであと数メートルのところで、紺のジャージに着替えた昭太に声をかけられる。

「どうしたんだよ、またサボリか？」

何も知らないだけあつて、昭太はのんきに訊ねてくる。

「ああ。ちょっと仲間と呼ばれちまって。片山の部活に間に合うようには戻るからさ」

「あ、慎二！」

そそくさとげた箱に向かう慎二の背を、昭太の声が追って来る。

「何だ？」

「村上から、何か連絡あったか？」

「いや……俺のところには別に。お前は？」

背中に冷水をかけられているような感覚をグツとこらえる。

「全然。まだ、動きがないんだろうな」

「おい、南。先行くぞー」

体育館に向かうクラスメイトが昭太に声をかけてきた。じゃ、と手をあげて別れたが、仲間に秘密があるというのは内心、気分のいいものではない。

昭太とほのかには正樹が説明するといふから、自分の出る幕ではないだろう——そう言い聞かせて、慎二は駐輪場のバイクにまたがった。

バイクを走らせてからおおよそ20分後。

慎二は、由紀と園子が入院している相模市立病院の正門をくぐった。

確かここには、事件の被害者である透子も入院している。

いずれは来なければならぬと感じていたが、こんなに早く来ることになるうとは。

そんなことをぼんやり考えながら、受付で由紀の名前を告げる。

病室の番号を聞いた慎二は、少し歩いたところにあるエレベーターへ乗り込んだ。

（ずいぶん、新しくなったもんだな）

慎二が小学生のころは建物も小さく、エレベーターも音を立てるくらい古かった。

しかし数年前に建て直された新病院の待合室は広く明るくなり、このエレベーターも震動がほとんどない。

女性の声が、3階についたことを告げ、大きなドアが開く。

「村上」

出てすぐの応接スペースで、窓の外を見ている正樹に声をかける。

「悪かったな慎二。突然呼び出して」

「なんの。それより由紀は？」

薄いブラウンを基調としたリノリウムの床に、慎二と正樹の足音だけがひびく。

「命に別条はないが、血圧がまだ低いから用心した方がいいそうだ」

普段はあまり感情を表に出さない正樹だが、由紀のことに責任を感じているのか、いつになく強張った表情をしている。

「そんなに自分を責めるなよ。俺だってその場にいたら、きっと由紀と同じことしたよ」

少しでも正樹の気をそらしたくて、自分より少し低い位置にある肩を2、3回叩く。

「……サンキュ」

ようやく正樹の表情が少し晴れた。しかし今度は前方から、血相を変えた小倉が駆けてくる。

「どうしたんだよ、小倉さん」

「た、大変です！ 飯沼さんが病室を抜け出しました！」

「何だって！？」

慎二は、正樹と顔を見合わせた。

「見張りついてたんじゃないのかよ？」

「それが、ちよつと目を離したすきに……」

ヨレヨレのハンカチで額をぬぐう小倉が、その場に力なくしゃがみ込む。

「とにかく、心当たりを捜しましょう。彼女に何かあったら、責任問題にもなりかねませんよ、小倉さん」

一歩前に出た正樹が、小倉の手を引き上げる。

「村上、由紀についてろよ。俺と小倉さんでこの辺捜すからさ」

「いや、それなら俺が小倉さんところを捜す。慎二は別の階を捜してくれないか？」

「わかった」

正樹の声に振りかえり、再びエレベーターの方へ向かって駆けだす。

見上げると、エレベーターは屋上近くの階で止まったまま降りて来ない。慎二はすぐそばにある階段を使って、一気に1階まで下り

た。

外来でかかっている患者がひしめく中、慎二はやや背伸びをして、待合室すべてをくまなく捜す。

しかし、青陵高校の制服を着た、自分と同じくらいの少女は見当たらない。

まさか、病院の外へ？

園子を狙っている三井あゆみらがどこにいるかわからない中、表に出たとしたら……大げさかもしれないが、蟻地獄の中に自ら足を突っ込むようなものだ。

慎二は携帯電話を開いた。しかし、今のところ正樹からの着信はない。

もし、屋上にでもいるのなら、彼らがきつとどうにかしてくれるだろう。

（だめでもともと……行ってみるか）

正樹のアドレスに『外へ出る』と書いて送信したあと、慎二はバイクを止めた駐輪場へ向かって走り出した。

バイクにまたがった慎二はとりあえず、昨日由紀と一緒に行った園子の家へ向かった。

さすがにまだ昼前のせいか、歩道に学生の姿はあまりなく、営業のサラリーマンか主婦らしき風体の中年のおばさんが、それぞれの速度で歩いている。

車道の往来はさすがに多く、その合間をぬって、郵便物を運ぶバイクが走っている。

園子は一体、どこへ行ったのか？

時折、青陵高校の制服を着崩した生徒に会うが、何人かが集まったグループであり、一人で歩く女生徒の姿は見当たらない。

「……たく、どこに行っただか」

ゆっくりとバイクを走らせながら、慎二は歩道を中心に探索を続ける。

突然、胸元に入れた携帯電話が震えた。歩道際にバイクを止めると、すぐに正樹からの電話であることを確認し、通話ボタンを押す。

「はい」

『慎二か。そっちはどうだ？』

「駅前流してるけど、それらしい奴はいないな。そっちは？」

万が一を考え、屋上から下に降りてみたが、園子は見つからなかったという。

「わかった。学校には行っていないと思うから、自宅周辺を見てみるわ」

『犯人や三井あゆみらも飯沼さんを捜しているかも知れない。気をつけるよ』

あいよ、と返して電話を切り、アクセルを踏み込む。

顔を上げてもう一度見渡すと、反対側の車線の歩道に、足を引きずって歩く少女の姿を確認する。

上こそは白のブラウスを着ているが、下は由紀と同じ青のスカートをはいている。

園子か？

車が来ないことを確認して車道の真ん中に寄り、そのままＵターンをして彼女を追う。

足が痛むのか、園子らしき少女の歩く速度がさらに遅くなる。

すれ違いざまに肩がぶつかり、転倒した。

「おい、大丈夫か？」

慎二はバイクのエンジンを止めて柵を飛び越え、少女に声をかけた。

フルフェイスのヘルメットをかぶった自分を見上げた少女の肩が、大きく震える。

「あ……悪い」

ヘルメットを外し、少女の警戒心を解こうと笑いかける。

「ありがとうございます」

少女が、差し出した慎二の手を取り立ち上がろうとするが、力が入らず慎二に倒れかかる。

「病院に行った方がいいんじゃないのか？」

「いえ！……もう、大丈夫ですから」

慎二を突き飛ばし立とうとするが、痛みに顔をゆがめてしゃがみこむ。

「ほら。無理するなよ」

両腕をつかんで立たせた少女は、髪型こそ違うが、昨日、ほのかが調べていた写真と同じ顔立ちをしている。

間違いない。飯沼園子だ。

「すみません」

今度は蚊の泣くような声で、小さく頭を下げた。

「あのさ、何で病院に行きたくないわけ？　ひとりで歩けねえのに」
うつむく園子と同じ目の高さで、慎二は訊ねる。

「悪いこと言わないからさ。病院、行った方がいいよ。俺が送ってやるからさ」

「やめてください！」

初めて顔をあげて、園子が叫ぶ。

血の気のない顔。泣きはらしたような赤い目が、園子のこれまでの生活を物語っているように、慎二には思えた。

1年前、透子と一緒にいじめをしていたかもしれない少女だ。そう簡単に病院には戻ってくれそうにない。

「わかった。じゃ、家まで送るよ。どこ？」

また、園子が黙りこむ。家にも帰りたくないらしい。

「だったら、どこ行きたいわけ？　はっきり言ってくれなきゃわからないだろ！？」

思わず険けんのある声を出してしまう。

園子の両目から、涙がこぼれ落ちた。

(やべっ)

「悪い。きつく言うつもりはなかったんだ。えっ……と」

手で顔を覆い、園子が首を振る。

「何か……あつたのか？ 今まで」

園子の心を刺激しないように、慎重に訊ねる。

しかし園子は慎二の問いに答えず、小さな声でつぶやいた。

「緑ヶ丘市にある……グリーンパーク」

「グリーンパーク？」

あまりにも突然言われた地名に、思わず声がひっくり返る。

「そこに……行きたかったんです」

口を開けたままの慎二に、園子がうなずいた。

29・後悔

グリーンパークは、「緑とスポーツの町」を自認する緑ヶ丘市の中心部にあり、体育館から武道会館、外には野球場をはじめ、陸上競技場、テニスコートなどが完備されている。

学生やアマチュアのみならず、プロの大会や合宿も頻繁に行われており、宿泊施設も充実している。

まさに、ここに来れば何でもできるのが自慢の総合施設だ。

「よし、ついたぜ」

園子をバイクに乗せて走ること約30分。慎二は入り口横の駐輪場にバイクを止めて、手を差し出す。

「ありがとうございます」

ヘルメットを脱いで手渡してくれたその表情は、相模市駅前にいる頃よりも幾分かやわらいでいる。どうやら、警戒を解いてくれたらしい。

「どこ行くんだ？ まさか、スポーツやりたいなんて言いだすんじゃないだろうな」

おどけた慎二につられて、園子が笑みを見せる。

「そんなわけじゃないですか。人に……会いに来たんです」

園子が、少し寂しそうな表情でうつむいた。

「その足じゃ歩き回るのも何だしな。呼び出してもらおうぜ」

慎二は園子から会いたい人の名前を聞き出し、受付に告げた。

色濃く染まった木々の葉が、真つ青な空の下で揺れている。風はまだ冷たいが、辺りを照らす太陽の強い光で、それほど寒さは感じない。

「あれ？ 慎二。また学校さぼってるのか？」

上下赤のライダースーツを着た馴染みのある顔が、慎二たちの前を通り過ぎる。

「茂さんこそ、あまりさぼるとまた単位落としますよ」

金色に染めた髪を短く立てている、目の細い青年にツツコミを入れる。

「うるせーよ。大体お前はまた違う女の子連れて。この前のショートカットの女の子は？ フラれたのか？」

「あいつはそんなんじゃないよ。ただの同級生」

同級生、に力を込める慎二の顔を見て、園子をのぞきこんでいた茂は大声で笑いだす。

「冗談だよ。今度あの子に、俺も撮ってくれて伝えてくれ。じゃあな」

手に持っていた、赤と白のヘルメットを軽く上げて、茂は去って行った。

「ごめんな。悪い人じゃないんだけど」

高校へ入学してすぐに原付、普通二輪の免許を取り、モトクロスバイクを始めてからまだ半年の慎二を、辛抱強く教えてくれる茂だが、少し口が悪いのがいただけない。

困惑した顔で、園子は小さく首を振る。茂の言った『あの子』――先日、一緒にレース場へ行った由紀の存在に、気を使っているのだろう。

「すみません。お待たせしました。……あら、園子ちゃん」

慎二の背後から、やわらかな声が聞こえてくる。

「愛実先生」

園子の目に涙が浮かんだのを見て振り向くと、長い黒髪をポニテールにした小柄な女性が、微笑んで立っていた。

「もう、あれから5年になるのね」

園子の足を気遣い、受付のすぐ横にあるロビーに腰を落ち着けた慎二に、愛実^{まなみ}先生こと長野愛実は、缶ジュースを差し出しながら笑った。

「5年、って言いますと？」

「園子ちゃんがね、アーチェリークラブを辞めてから」

穏やかな瞳で懐かしそうに話す愛実とは対照的に、園子の表情はまた、相模市で会った時と同じように暗く沈んでいる。

「あの頃、園子ちゃんはなかなか自分の思うような成績を取れなくて……。一人の女の子と一緒にクラブを辞めたんです。そもそもこのクラブは、成績よりも団体生活を通して、仲間を大切にすることを養うことに重点を置いていましたから。きっと、物足りなかったんだと思います」

「でも……辞めなきゃよかったって、今は後悔してるんです」

愛実の目を見ずに、園子はうつむく。

「本当は、ここにいた頃が、一番楽しかった……」

園子の肩が震え、小さくしゃくりあげる声が慎二の耳に届く。

「仕方がないわよ。より上を目指す。それも大切なことだもの。そういえば、透子ちゃんは……」

愛実の口から透子の名前が出たことに、慎二は驚いた。

園子と一緒にクラブを辞めたのは、透子だったのか。

危うく出そうになった声を飲み込み、冷静を装って二人に目を向

ける。

さつきとはうって変わって、愛実の表情にかげりが見える。恐らく、透子が襲われた事件を知っているのだろう。

園子の肩がまた、激しく震え始めた。

「あの時……私ひとりで辞めていたら、こんなことには」

「園子ちゃん」

膝の上に置かれた園子の手を、愛実が優しく包み込む。

「今回のことと、あなたたちがクラブを辞めたことは何の関係もないのよ」

愛実は優しく諭すが、園子は大きく首を振る。

「違う。透子を辞めさせて、あんな子にしちゃったのは私なんです。私が……」

泣きじゃくる園子を、愛実がそっと抱きしめる。その光景を、慎二はただ、黙って見守ることしかできなかった。

30・停滞

『透子をあんな子にしたのは私』

園子の告白が、慎二の心に刺さる。

自分が透子と知り合ったのは中学2年生。すでに彼女はお山の大将よろしく、クラスメートをいいように使っていたのに。

「小学校の時、その……透子さんは、どんな子だったんですか？」

知り合いだとばれないように、言葉を選んで慎二は問う。

「素直で、とても明るい子でした。入ってきたばかりの小さな子供たちにもきさくに話しかけて、慕われていたんですよ」

泣きじゃくる園子の背中を優しく叩きながら、愛実が答える。

信じられない。

慎二の知っている透子は、いつも自分に過度な自信を持ち、態度も高飛車で、後輩からは恐れられる存在だったのに。

「園子ちゃんと透子ちゃんの成績は、クラブでもトップでした。もちろん二人の間には成績を争っての仲違いなんてなかった。でも……」

上下に震える園子の背中に目を移した愛実が押し黙るとすぐ、園子の泣き声が大きくなった。

「すみません。……これ以上は」

園子の様子を見て、愛実が頭を下げる。

一番聞きたかったところだが、今、園子に心を閉ざされては調査に支障が出る。

とつさに判断してうなづく慎二に、愛実がやわらかな笑みを見せた。

「園子ちゃんの、お友達ですか？」

「いや、さつき会ったばかりで……。足を怪我してるみたいなので病院か家に送り届けたいんですが、ここに来たいって言ったから」

なぜか顔が熱くなるのを自覚しながら、慎二は答える。

「そうですか。ありがとうございました。さ、園子ちゃん帰りましよう。きつと、お母さんが心配しているわよ」

園子の肩が、また大きく震えた。愛実にしがみついたまま、首を横に振る。

「園子ちゃん」

「帰れない……。もう、どこにも……。帰れないんです」

そう言ったきり、園子はすすり泣きながら黙りこんだ。

愛実と顔を見合わせた慎二だが、これ以上、何を訊ねたらいいのかわからなくなってしまった――。

必ず送り届ける、という愛実の言葉を信じ、慎二は、自分の携帯番号を彼女に教えてグリーンパークを後にし、すぐ近くの緑ヶ丘駅にバイクを止めた。

携帯を取り出し、正樹に電話を入れる。

『もしもし』

まだ、声が沈んでいる。由紀の意識が戻らないのか、それとも、まだ自分を責めて堂々めぐりになっているのか。

あえてそれを口にせず、園子を発見し、彼女が昔、世話になっていた人のところへ預けたことを手短に報告する。

『そうか、わかった。いろいろすまなかったな。これからどうする？』

交差点近くにある時計を見ると、まだ午後1時を回ったところだ。

「今から戻ってもアーチエリー部の練習まではだいぶあるし……そっち行くか？」

『わかった。今後の対策も練りたいし、こっちに来てくれ』

「了解」

携帯をポケットにしまった慎二はふたたびヘルメットをかぶり、エンジンキーを回す。

『でも……』

愛実は園子に気を使って口ごもった。しかし、その言葉の先にある「透子が変わった原因」が、今回の事件を解決する大きな手がかりになるかもしれない。

自分一人では心許ないと思っていたが、今は小倉も正樹も同じ病院にいるし、透子に会う絶好のチャンスだろう。

透子に会う——卒業時、もう二度と顔を合わせなくて済むと思っていたのに、皮肉なもんだな。

重い気持ちを振り払うようにアクセルを踏み込み、慎二はバイクを相模市へ向けて走らせた。

31・安堵

「村上くん！」

慎二との電話を切った正樹のもとに、頬を真っ赤に染めた小倉が駆けってくる。

「どうしました？」

由紀に何かあったのか……。水をかけられたような冷たさが、正樹の全身を覆う。

「添嶋さんの、意識が戻りました。先生も……もう大丈夫だろうって」

意識が、戻った……。

立ち止まり、息も絶え絶えになった小倉の言葉を聞いた正樹の身体から、力が抜ける。

「大丈夫ですか？」

「すみません。安心したら、気が抜けてしまっ

て。全身を壁に預けて大きいため息をつく正樹を見て、小倉が笑う。

「村上くんでも、そんなことがあるんですね」

「からかわないで下さいよ。それでもまだ高校生なんですから」

また笑った小倉の顔を見て、正樹の頬もゆるんだ。

手当てを終えたのか、小倉とともに病室に入った正樹と入れ違いに、小柄な看護師が酸素マスクなどを手に病室を出ていく。

二人部屋だが、廊下側のベッドは空いており、窓際のベッドに横たわる由紀が、まだぼんやりとした表情でこちらを向いた。

「ごめんね村上。心配かけて。小倉さん、迷惑かけてすみません」

近づいた正樹と小倉に、由紀が小さな声で謝る。

「いや……無事でよかった」

そう返すのが精いっぱいな正樹に対し、刑事の小倉は冷静に訊ねる。

「早速で申し訳ありませんが、犯人の顔は見ましたか？」

小倉に視線を移した由紀の目が、泳ぐ。

一瞬、顔をゆがめたのち、横に小さく首を振る。

「後ろから突然、顔にハンカチを当てられたから……。でも、香水がきつかったのだけは覚えてる」

「香水？　どんな香りだ？」

「もう一度嗅いでみたらわかると思うけど……今は」

目を閉じ、由紀は悔しそうに唇をかんだ。

「薬をしみこませたハンカチを用意していたことから見ても、犯人は、かなり用心深い人物と見て間違いないでしょうね」

由紀に聞こえないように耳元でささやく小倉に、正樹はうなずく。

犯人はおそらく、自分と園子が逃げたのを知ったあゆみから連絡を受けたのだろう。

しかし……。

なぜ、あゆみらは自分らが逃げた場所をすぐに特定できたのか？

そして。

なぜ、犯人はまるで自分らを待ちかまえていたかのように弓をつがえ、なおかつ、由紀の動きを封じることができたのだろうか？

あの時は目の前のことで精いっぱい気づきもしなかったが、あまりにも不自然だ。

「小倉さん」

今度は正樹が、小倉に耳打ちをする。

「そう……ですか。わかりました。一刻も早く三井あゆみらを補導し、詳しく訊いてみましょう」

「お願いします」

頭を下げた正樹にうなずき、小倉が病室を出ていく。

由紀の大きなため息が、遠ざかる足音を追いかける正樹の耳に届いた。

「どうした？ 具合、悪いのか？」

「違うわ。自分自身に腹が立って仕方ないだけよ」

今まで仰向けに寝ていた由紀が、正樹に背を向ける。

「あんな奴らに不覚をとるなんて。情けないったらありゃしない」

少しずつ、いつもの彼女に戻ってきているようだ。

しかし、このまま放っておくとまた何をやらかわかったものじゃない。

「何言ってるんだ。犯人と接触して命が助かっただけでも儲けものじゃないか」

「のんきなこと言わないでよ。せめて犯人の手がかりだけでも掴んでおけば、少しは進展したかもしれないのに」

「進展してるさ。少しずつ、な」

由紀が寝ているベッドの端を、正樹は軽く叩く。

「そうかしら」

機嫌が悪いのを隠さずに、由紀はつぶやく。

「少なくとも、今日お前が飯沼さんに金を貸すと言わなければ、三井あゆみと犯人が繋がっていることはわからなかった」

「……どういうこと？」

由紀が起き上がり、こちらを振り返る。顔色はまだ悪いが、目の輝きはいつもと変わらない。

正樹は、由紀と別れてから園子連れ出すまでの経緯を、あゆみの言葉を中心に話す。

「……だからあんなに強気でいられたのね。それにしても」

由紀の視線が、正樹からそれる。

「何か気になることでもあるのか？」

「うん」

腕組みをした由紀がうなずいた直後、ノックする音が聞こえた。

「はい」

正樹の返事を待たずに開いたドアから、慎二が顔を出す。

「由紀。大丈夫か？」

正樹の肩越しに、由紀を見た慎二が、コンビニの袋を下げて入ってきた。

「腹減ってるだろ。とりあえず見つくるって来たから食いながら話そうぜ」

サンドイッチを開ける慎二の方へ、由紀が手を伸ばす。

「おいおい。お前さんはまだダメだろ」

「もう大丈夫よ。食べなきゃやってらんないわ」

由紀が一番端のサンドイッチを取った瞬間、慌ただししい足音が近づく。

「大変です!」

小倉が、今度は青ざめた顔で入ってきた。

「どうしたんだよ？」

慎二がサンドイッチを口に加えたまま訊ねる。

「三井あゆみが……死体で発見されました」

32・熱意

「ちょっと小倉さん、冗談よしてよ」

由紀の声が、心なしか上ずって聞こえる。

「冗談でこんなことは言いませんよ」

ずり落ちた眼鏡を直しながら、小倉が言い返す。

「どこで、発見されたんですか？」

「相模駅裏の公園です。木の枝にロープをかけて首を吊っていると、ころを発見されました。状況から見ると、自殺の可能性も」

「そんなばかな!？」

「由紀」

小倉をさえぎって叫ぶ由紀の肩に手を置き、正樹が制す。

心底悔しそくに舌打ちをして、由紀がうつむく。

恐らく……『自殺』ではない。あゆみは『消された』のだ。

犯人が、小倉の言うように用心深いのなら、園子への圧力を関係のない自分らに嗅ぎつけられたあゆみを、そのまま生かしておくはずはないのだから。

小倉も、もちろん由紀だって、自殺とは思っていないはず。

沈黙が、春の柔らかく陽射しが注ぐ病室を包み込む。

突然、携帯のバイブ音が鳴り、慎二が入り口近くに移動する。

「あ、長野さん。飯沼さんは……。そうですか、わかりました。ありがとうございます」

電話を切った慎二が振り返り、これから園子が病院に戻ってくると言う。

とりあえずは一安心だ。だが……。

うつむき、唇をかみしめていた由紀が再び身体を横たえ、背を向ける。

今回の園子とあゆみの件に並ならぬ意欲を示していた彼女にとっては、ある意味屈辱的な結果だろう。

正樹はもちろんのこと、普段はすぐ軽口を叩く慎二も、今回ばかりは声をかけられない。

重い空気がまた、病室を包む。

すると今度は、小倉の携帯電話が鳴りだした。さすがに慎二のようにはここでは取らず、病室を出ていく。

「慎二」

由紀を気遣いながらも、正樹は小声で慎二を隅に呼ぶ。

「わかってる、これからのことだろ。昭太やほのかは対外調査できないし、由紀がこんなじゃな」

「冗談じゃない。私だって動けるわよ」

2人のやり取りが耳に入ったのか、由紀がまた身体を起こす。

「何を言ってる。お前はしばらく検査入院だ」

「バカ言わないで。青陵でどうしても確認しなきゃいけないことがあるの」

口火を切った由紀は、転校直後の挨拶の場で、校長と担任の横田のただならぬ雰囲気と、「ある男」の存在を話す。

「ある男？」

「そう。校長はこちらには何の落ち度はないから放っておけ、って言うてたけどね」

ベッドの横のテーブルに置いてあるお茶を、由紀が飲み干す。

「まさか、その男が犯人なのか？」

「そこまではまだわからないけど……その男の身元を割り出したいのよ。きっと、今回の事件に何らかのかかわりを持つてるはずだわ」

慎二の問いに答える由紀の口調が、熱を帯びてくる。

「その男の正体もだが、校長と横田の関係も気になるな。由紀の言うように、ただが一担任が事件を掌握するのもおかしい話だし、三井あゆみの言葉も気になる」

「三井あゆみが何だって？」

「校長と横田がデキてるって話でしょ？」

自身の問いに答える形で、正樹に訊ねた由紀を見た慎二が、渋い顔で肩をすくめる。

「やれやれ。叩けばどんだけホコリが出るんだか」

「問題は山積さんせきしてるが、とりあえずは飯沼さんが戻って来てからだな。彼女に、1年前の『事故』の真相を話してもらって、それから2人に揺さぶりをかけても遅くはない」

正樹の言葉に、由紀がうなずいた。しかし、表情を変えないままの慎二が、腕を組んで黙り込む。

「どうしたの？ 慎二くん」

由紀が慎二を見上げた。すると。

「いや、俺……江頭に会って来ようと思ってるんだけど」

「江頭さんに？」

「ああ。飯沼さんや、2人にアーチェリーを教えた長野さんが言う

には江頭は『変わった』らしいんだよな。それがどうしても気にな
って」

慎二が、長野愛実に聞いたという話をする。

「素直ないい子だった、ねえ」

信じられないような口ぶりで、由紀がつぶやく。

「だろ？ その理由を知りたいんだけどさ」

「でも、お前が言って素直に彼女が話をするか？ 犬猿の仲だった
んだろ？」

「……だよなあ。どうしたらいいんだか」

頭をかきながら、慎二が大きく息を吐きだす。

「それこそ、面識のない慎二くんが飯沼さんの心をほぐしたように、
江頭さんの心を開いてくれる人がいるといいんだけどね。……村上
じゃ無理よね、多分」

「言われなくてもわかってる」

さっきの園子がいい例だ。すぐ本題に切り込んでしまい、警戒さ
れることもしばしばなのは、十分自覚している。

「ああいう女王様タイプには女の私も無理でしょ。本当は、昭太く
んが動ければ一番いいんだけどね」

慎二もだが、昭太もすんなり初対面の人間と心を通わせることができる。今回、いずみの警護に彼をあてたのも、どういうわけか彼女の母が昭太を気に入り、申し出てくれたからに他ならない。

「とりあえず、今彼女に接触しても何の情報も得られないだろうな。しばらく様子を見よう」

納得しがたい表情を浮かべていた慎二だが、自らを押し殺すかのようにならずく。

「村上くん」

電話を終えた小倉が、病室へ戻って来た。

「三井あゆみの遺体がこちらへ搬送されました。遺留品もあるようですので、確認していただけますか？」

「わかりました」

「私も行くわよ。いいでしょ？ 村上」

当然のように、由紀が申し出る。断りたいところだが、これ以上彼女を押さえつけると、どんな反発がくるかわかったものではない。

小倉と顔を見合わせた正樹は、車いす移動を条件に、由紀にOKを出した。

33・手がかり

正樹は、慎二と由紀、そして小倉とともに、病院の別棟にある一室へと向かった。

あゆみの遺体は今、医師立会いの下で検視が行われている。今後、司法解剖するかどうかは、遺族が来てからの話し合いになるという。

「こちらです」

紺のスーツを着た角刈りの刑事が、銀のトレーに乗ったあゆみの遺品を差し出す。

携帯電話に、黒の財布。高校生には似合わない、某一流メーカーのエンブレムが誇らしげについている。

「失礼します」

正樹は、持ち主だったあゆみに対して合掌してから、手袋をはめて携帯電話を開く。

ボタンを操作して着信・発信履歴からメールの送受信履歴を確認するが、すべて空白のままだ。

「消されてるな、やっぱ」

横からのぞき込んだ慎二が、ため息まじりに耳打ちしてくる。

「指紋は取れたんですか？」

病院から借りている青の車いすに座る由紀が、小倉の横に立つ刑事に訊ねる。

「持ち主のものなのですが……それが？」

不思議そうな顔をして、刑事が問い返してくる。

「いえ、すみません」

しおらしく返してはいるが、内心、やる気のなさそうな目の前の男へ、怒りをぶちまけたいところだろう——正樹は由紀をチラッと見下ろし、財布に手を取る。

「何だよ、これ？」

正樹の手にある一万円札を見た慎二が、今度は驚きを隠さない。

「高校生にしては、持ちすぎですね」

ざっと数えただけでも12枚。千円札やらも含めると、13万近くがこの財布に入ってることになる。

「しかし今の高校生は何やって金を持っているかわかりませんからね、おかた、援交でもしてたんじゃないですか？」

「援交、ねえ」

慎二がつぶやく。ふと視線を落とすと、黙ったままの由紀の顔色

が悪い。

「どうした？ 由紀」

慎二も異変に気づいたのか、しゃがんで目線を合わせる。

「そのお札、におわない？」

「え？」

由紀の言葉を受けて、正樹が一万円札に鼻を近づける。確かに、かすかに香水の匂いがしみついているようだ。

「これか？」

少し香りのきついのを一枚だけ、由紀の顔に近づけた。するとあからさまに嫌そうな表情を浮かべ、由紀がせき込む。

「おい、大丈夫か？」

「……この匂いよ」

「は？」

慎二が、口もとを押さえた由紀の顔をのぞきこむ。

「犯人がつけてた香水と、同じ匂いだわ」

「間違いありませんか？ 添嶋さん」

駆け寄った小倉に、由紀はうなずく。

「村上くん、高原くん。この香水がどのブランドのものなのかわかりますか？」

香水などつけたことのない正樹は、首を振る。しかし慎二はお札についた匂いを繰り返し嗅ぎ、首を何度かひねった。

「確証は持てねえけど、モトクロスの仲間がつけてた香水に似てるな。ちよつと待ってろ」

携帯を手に、慎二が部屋を出ていく。

青ざめたままの由紀に気を使い、小倉が窓を開けてくれた。

「ありがと、小倉さん」

一瞬、何かをぐつとこらえるように首を前に倒し、由紀が小声で礼を言う。

「わかったぜ。男物の香水で、日本じゃ売ってない『アローズ』って名前だ」

「アローズ……」

矢、という意味を持つ言葉の香水を使う犯人に、正樹はなぜか嫌悪感を覚える。

「日本で売っていない香水なら、個人輸入で手に入れてるだろうから、その手の会社あたれば早いかもね」

「わかりました。早速こちらで調査しましょう。一応、そのボトルなどの写真があるとありがたいのですが」

「あとでメールして、写メで送ってもらうよ。それでいいだろ？」

由紀の言葉を受けた小倉に、慎二がうなずいた。

「もう、よろしいでしょうか？　そろそろご遺族の方も見えますので」

ある程度かたがついたと思ったのか、刑事が面倒くさそうに割って入る。

「大丈夫です。お忙しいところありがとうございます」

丁寧に礼を述べた小倉に軽く頭を下げて、銀色のトレイを持った刑事が姿を消した。

「いけすかない奴」

由紀が、低い声でつぶやく。

「さて、これからどうしましょう。添嶋さんは病室へ戻っていただくとして、村上さんと高原くんは？」

「俺は学校戻るよ。出る前昭太に顔見られてるしさ。そろそろ行かないと怪しまれるだろ」

時計を見ると、午後2時半を回っている。今から行けばちょうど、

3時過ぎには着くだろう。

「でも、慎二くんいなくて大丈夫？ 飯沼さん、もうすぐ戻ってくるんでしょ？」

「そっか。それもそうだよな」

慎二が腕を組む。これから先、警察の事情聴取もあるだろうし、自分や由紀が近くににいるよりは、彼にいてもらった方が園子も話しやすいかもしれない。

「じゃ、俺が学校へ戻る。南とほのかに、これからのことも話さないといけないしな」

バツが悪そうに肩をすくめ、由紀がうつむいた。今の自分の状態をほのかに知られるのが気まずいのだろう。

それは正樹も同じだ。ほのかの心配を振り切って強行し、由紀を危険にさらしてしまったのだから。

「ほのかの怒りは覚悟の上さ。慎二、飯沼さんを頼む。由紀はおとなしくしてるんだぞ。小倉さん、お願いします」

由紀がおとなしくうなずく横で、慎二が指でOKサインを作る。

ほのかの様子が気になって仕方がないような表情をした小倉に見送られて、正樹は病院を出てタクシーに乗り込んだ。

33・手がかり（後書き）

本編中にある香水の名前は作者の創作です。
実際の物ではありませんので、ご了承ください。

34・ほのかの「不安」

1日の終わりを告げるチャイムが、教室内を包んだ。

昭太は、黒のスクールバッグを肩にかつぎ、教室を出る。

「南くん」

聞き慣れた、澄んだ声に立ち止まる。すると、長い髪を耳にかけたほのか、隣に並んだ。

「村上くんか由紀から、何か連絡はあった？」

少し不安そうに訊いてくるほのかに首を振ると、彼女の表情が暗くなる。

「ほのかにも来てないのか？」

無言でうなづくほのか、小さなため息をついた。

「そっぴゃ慎二のやつ、戻って来たんだろうな」

「高原くん？」

話題を変えた昭太の顔を、ほのかが驚いた様子で見上げてくる。

「ああ。あいつこんな時にバイク仲間に呼ばれたって、授業サボったんだぜ。いつ村上から連絡来るかもわからないのに」

「高原くんと由紀には、そんな常識通用しないわよ」

硬い表情だったほのかの頬が、少し緩んだ。

「村上が知ったら、目エ向いて怒るんだろうな」

大きく目を開いた昭太を見たほのかが吹き出した。うつむき、肩を小刻みに震わせながら、声を出さないようにして笑う。

「……あれ、南くん。何やってんの」

今度は、いずみが昭太を責めるような口ぶりで寄ってくる。

「何やって、って」

「ダメじゃないの。北村さん泣かせちゃ」

いずみの言葉に、周りの生徒の目がこっちに集中する。

「バカ！！ そんなんじゃねえって」

身ぶり手ぶりを交えて、昭太が弁解するが、いずみの目は少し冷ややかだ。

「そうじゃないの。……ごめんなさい」

いずみに話しかけるほのかの肩はまだ震えている。

「南くんがあまりにもおもしろい表情をしたからおかしくて。ただ、それだけなの」

「ほんとに？」

ほのかが、笑顔でうなずく。

「わかった。もし、何かされたらすぐ言ってね。私が代わりにとっちめてあげるから」

「おいおい。冗談じゃねえよ」

いずみの頭を、少し強めに叩く。

「痛いな〜。少しは手加減してよ」

「おまえさんには手加減しても、倍返しされるから同じなの。……おい、ほのか。笑いすぎ」

傍らに立つほのかが、今度は顔を覆^{おお}って笑いだす。

「南くんって、ほんとにおもしろいよね」

いずみが笑いながら言う『おもしろい』は……ほめ言葉なのだろうか？

精悍な顔をした正樹や、バイクを乗り回す慎二のように『カッコいい』要素がないのは認めるが、そこまで強調されると、何だか複雑だ。

「あ、そうだ。これ、村上くんに渡しといて。学校サボるなって」

「サボリ？」

朝、部室での会話が廊下に漏れていたのだろうか——昭太の背中に、冷や汗が流れおちる。

「そうよ。さつき、授業が終わる直前に校庭歩いてるの見たもの」

思わず、昭太はほのかと顔を見合わせる。

「村上くん、一人だった？」

「うん……。彼以外は誰もいなかったけど。どうして？」

「あ、いや、何でもないんだ。あいつには俺から言っとくよ。サンキュ」

水色のノートを軽く上げ、ほのかと目を合わせて新聞部の部室のある棟へと歩きだす。

さつきまで笑顔を見せていたほのかの横顔が、こわばっている。

「村上くんが一人で戻ってくるなんて……由紀に何かあったのかしら？」

「そんなはずないだろ。由紀は今、一応青陵高校の生徒なんだし。きつと、何らかの情報をつかんできたんだよ。それにしても、慎二のやつは……」

何とかほのかの気をまぎらわそうと慎二の名前を出す、今度は少しうつむき加減のまま、何も言わずに歩いていく。

すれ違う男子生徒の視線が、なぜか痛い。

恐らく、ほのかに想いを寄せる連中だろう。

さっきのいずみではないけれど、おおかた、自分がほのかをいじめてるつもりでいるのだろう。

あえて気にしないふりをして玄関を突っ切り、東側の棟に進む。さすがに、文化部しかない所なので、へんな視線は刺さって来ない。

「ちいっす」

いつもの挨拶をして、ドアを開ける。

するといずみの言ったとおり、中央のデスクにあるパソコンを操作していた。

「ずいぶん早いな。手がかりつかめたのか？」

昭太が水色のノートを差し出すと、正樹はあいまいにうなずきながら、パソコンのすぐ横に置く。

「二人に、話があって戻って来たんだ。実は……」

正樹が言葉を切り、小さくため息をつく。

「由紀に、何かあったの？」

一歩前に出て、正樹に訊ねたほのかを見上げる正樹の目が、一瞬、

宙を泳ぐ。

「そうなのか？ 村上」

そのままうつむき、何も言わない正樹にじれた昭太も、ほのかの隣に並んで問う。

意を決したように顔を上げた正樹がほのかを、そして、昭太を見る。

「由紀が……入院した」

「入院！？」

声を上げた昭太は思わず、隣のほのかを見る。

しかし彼女は昭太の視線に気づくことなく、青ざめた顔を正樹に向けたまま、立ちつくしていた。

35・動揺

「飯沼園子を狙っていた三井あゆみらのグループと小競り合いになった時、犯人が、彼女を狙って矢を放ってきた。相当頭に来たんだろ。俺が止めるのも聞かずに由紀は、犯人を追いかけて行ったんだ」

園子を置いていくわけにもいかず、遅れて捜しに行った正樹を待っていたのは、犯人がまるで、木に磔はりつけにするように立たせたまま意識を失っていた、由紀の姿――。

「やめて！」

耳をふさいで、ほのかが叫ぶ。

「由紀を……そんなひどい目に遭わせるなんて」

「ほのか。制止を振り切った彼女にだって責任はあるんだ。村上一人のせいじゃ」

「いや、俺がもつと由紀の様子を注視していれば、こんなことにはならなかったんだ。すまない」

ほのかの肩に手を置き、なだめにかかった昭太の言葉をさえぎって、正樹が頭を下げる。

「で、由紀の容態はどうなんだ？」

下を向いたままのほのかを気にかけるながらも、昭太が正樹に訊ね

る。

「たいしたことはない。もう、調査に戻るって大騒ぎだ。そこで、ほのかに頼みがある」

かすかに顔を上げたほのか、正樹の手元へ視線をやる。

「明日から、由紀についてやって欲しい。ほのかの言うことなら、あいつは素直に聞くから」

何も言わず、ほのかが小さく首をたてに振る。

「俺も、何か手伝えることないか？」

暗く、沈んだままの表情の正樹が気になり、昭太は声をかける。

「片山の警護からはずれてもらうわけには行かないからな。こっちは何とかするよ」

「そういうわけに行かないよ。慎二のやつ、バイクの仲間に呼び出されたって学校出てったまま、まだ戻ってこないんだぜ。あてになるのかよ？」

いまだ戻ってくる気配のない慎二に頭にきた昭太は、つい、正樹に愚痴をこぼす。

「いや、慎二を呼び出したのは俺なんだ。ちよつと頼みがあつてな」

「……んだよ。だったら一言、俺らにも声かけてくれよな」

片手を上げ、顔の前で謝罪のポーズをした正樹が着ている、グレ
ーのスーツの胸ポケットで携帯の着信音がした。

「はい。……ああ。話はした。どうした？」

正樹の持つ電話口から、ずいぶん興奮気味の慎二の声が、少し離
れた昭太にも聞こえてくる。

「何だつて！？ 飯沼園子が行方不明？」

昭太は正樹に近寄り、電話に耳をそば立てる。

『ああ。ついさっき、飯沼さんと一緒にいた長野さんが病院に運ば
れてきて……。由紀とおんなじ手口で意識を失つてるところを、通り
がかりの人に助けられたって』

「運ばれた病院は？」

『名徳の近くの救急病院。俺、そっち行こうと思うんだ。……けど』

電話の向こうで、慎二が口ごもる。恐らく、由紀をひとりにはし
ておけないのだろう。

「わかった。ほのかをすぐそっちに向かわせるから、着いたらすぐ
に来てくれ」

事情を察した正樹が目くばせすると、赤い目をしたほのかが暗室
の方へ歩いていく。

「何てこつた……踏んだり蹴ったりだな」

電話を切った正樹が天井を仰ぎ、大きなため息をつく。

「村上くん。それじゃ、行ってきます」

由紀が青陵高校へ行く前に置いて行っただ荷物を持って、ほのかがドアノブに手をかける。

「ほのか。気をつけろよ」

振り返り、小さくうなずいたほのかはそのまま、廊下へと姿を消した。

「南、悪い。俺もすぐ救急病院へ向かうから、片山のことよろしく頼む」

「わかった。じゃ、このままアーチェリー部の練習場に行くわ」

デスクに置いたパソコンを閉じた正樹の顔は、いつも以上にこわばっている。

「あ、村上」

気になった昭太は、急いでいるであろう正樹を呼び止めた。

「あんまり責任しよ過ぎるなよ。何かあったら、ちゃんと言ってくれよな」

「ああ。……ありがとう」

かすかに笑みを見せた正樹を見送り、昭太は部室の鍵を閉める。

正樹にはああ言ったものの、実際問題、あまりにも目まぐるしく変わる状況に、昭太の頭はやや混乱している。

由紀が入院したのみならず、今回の事件の力ギを握るとされる園子が行方不明。

自身の「怨恨」を晴らすため、犯人は邪魔者をすべて消そうとしているのだろつ。

となれば、火の粉がまた、いつ、どのような形でいずみに降りかかってくるかわからない。

守りきれるだろつか？ いずみを。いや、いずみが亡き詩織に誓った『約束』を。

襲いかかる不安を追い払うように頭を降り、頬を両手で強く叩く。

守れるか、じゃない。守らなきゃならないんだ。

「よし！ 負けてたまるかってんだ！」

誰もいない廊下で叫んで、昭太は、すぐ近くの階段を駆け下りていった。

36・本音

「本当に、ごめん！」

なるべく早く行くことを考え、通りでタクシーを拾って病院に着いたほのかに、薄い水色の病衣を着た由紀が、顔の前で手を合わせて詫びてきた。

叱られた子供が許しを請うように、上目使いでほのかを見る由紀に、特に異常はなさそうだ。

たいしたことない、とは正樹に聞いていたものの、心配で落ち着かなかったほのかの心が、すつと楽になる。

「無事で……よかった。でも、もう無茶はしないでね」

ベッドに近づき、部室から持ってきた青のリュックを渡す。

「じゃ、ほのか。あと頼むわ。何かあったら連絡入れるからよ」

傍らの椅子に腰を降ろしていた慎二が立ち上がり、空いているベッドに置いてあった黒のヘルメットを手にする。

「わかったわ。高原くんも、気をつけてね」

「あいよ。じゃじゃ馬ねえさんをよろしくな」

「余計なお世話！」

おどけた口調で出て行ったものの、慎二の表情は心なしかこわばっていた。

「脱走されたあげく行方不明じゃね。これで彼女に何かあったら……」

あかんべえをして慎二の背中を見送った由紀だが、表情は暗い。

多分、園子を守れなかった自分を悔いているのだろう。

ほのかは普段、警察から送られた資料の整理、もしくは事件の目撃者に話を聞くのが主な任務で、被害者などの当事者に接触することはほとんどない。

こういうとき、表だって情報収集などに当たっている正樹や慎二なら、気の利く言葉をひとつでもかけられるだろうが、月並みな言葉しか浮かんでこない。

「早く、飯沼さんが見つかるといいわね」

「うん。きっと、村上と慎二くんが何とかしてくれるわ」

自身に言い聞かせるように再度つぶやき、由紀が笑みを浮かべる。

「あゝあ、何だかお腹すいちゃったな。ね、1階にコーヒーチエーン店入ってるんだけど、一緒に行かない？」

「何言ってるの？ 検査入院中の身でしょう」

「検査入院してたってお腹はすくの。さっき慎二くんが買って来て

くれたサンドイッチは、いつの間になくっちゃうしさ」

ベッド横の小さなテーブルを恨めしそうに見つめ、由紀がため息をつく。

「でも」

「いいじゃない。行こ！ 心配かけたおわびにおごるから」

とても病人とは思えない勢いでベッドから降りると、由紀は、ほのかの手を引いて病室を出た。

「あゝおいしかった」

薄いブラウンを基調としたコーヒーショップで、ベーコンサンドとシフォンケーキをたいたらげた由紀を横目にカフェオレを飲んだのは、看護師に見つかからないかと内心ハラハラしながら、エレベーターに乗り込む。

「よく食べたわね。夕食入るの？」

「大丈夫でしょ。どうせ今日はお粥ぐらいしか出ないんだから」

いつもと変わらない笑みを浮かべて、由紀は腕を組む。

犯人に接触して、あわば殺されたかもしれないのに、由紀はどこまでもマイペースだ。

もしこれが自分なら、絶対にベッドでうずくまったまま、身動き
すらないだろう。

「ね、由紀」

「何？」

「怖く……ないの？　もしかしたら、死んでいたかもしれないのよ」

突然の質問に驚いたのか、何とも言えない表情を浮かべて、由紀
がほのかから目をそらす。

エレベーターの上がる音だけが、ほのかの耳に届く。

訊いてはいけないことを口走ってしまったかもしれない――謝ろ
うと顔を上げたほのかと、由紀の目が合った。

「怖くないわけじゃない」

表情を変えず、でも、さりりという由紀の横顔を見たほのかの心
に、罪悪感がこみあがる。

「……ごめんなさい」

「謝ることないわよ」

「でも」

「あのね。そうやってすぐに自分を責めるの、ほのかの悪いくせよ。
もっと自信持ちなよ」

こちらを見た由紀が二度、肩を叩いてくる。

『自信』 今の自分にはどうしても、持てない物。

中学時代までいじめに苦しみ、高校を変えてもなお殻に閉じこもらんとしていたほのかを、救ってくれたのはこの任務であり、新聞部の4人だった。

しかし、4人にはそれぞれ特技があるのに、なぜ、何の取り柄もない自分が、ウィングリサーチの一員として活動しているのだろうか——常々、そう感じている。

なのに。

「ほのかには、ほのかにしかできないことがある。第一、私がこんなこと言えるの、あんたはしないのよ」

「え？」

少し照れたようにうつむいて、由紀がつぶやく。

どうして、私にだけ？ そう訊ねようとしたとき、エレベーターが止まって扉が開いた。

左腕を吊った少女が、うつむき加減に乗ってくる。

少女を見たほのかは思わず、由紀を見た。彼女も気づいたのか、小さくうなずく。

目の前で、身の置きどころのないように立つ少女は、被害者のひ
とり——江頭透子だった。

37・壁

目の前に立つ透子の指が、屋上のボタンに触れた。

もうすぐ由紀の病室がある3階だが、このまま彼女の後をつけることを、目だけで由紀と確認する。

透子は屋上で……何をやる気だろうか？ 嫌な予感が、ほのかの心に染みてくる。

3階に着いたエレベーターのドアが開いた。由紀と同じ病衣を着た初老の男性が乗り込んでくる。

誰もが無言で、昇っていくエレベーターの上方にある階数表示を見つめる。

到着を告げる電子音が鳴り、ドアが開いた。

男性と透子が順番に降りたあとで、ほのかは由紀とともに、屋上前の小さなロビーに出る。

まっすぐに外へ出た透子の目前を、もうすぐ赤く染まるであろう太陽が明るく照らしている。

このまま飛び降りはいらないだろうか……。不安になったほのかは、隣の由紀を見上げた。

「彼女、どういふつもりで屋上へ来たのかしら？」

「さあ……ね」

こわばった表情の由紀と一緒に、ほのかも屋上へと出て、一定の距離を取って、透子の横へ立った。

空の下を吹き抜ける風が、ここちいい。

ほのかは、身じろぎもせずに立っている透子へ、かすかに視線を送る。

透子はただ、病院から見下ろせる大小のビルやたくさんの車や人が行きかう道路をじっと見つめている。

その深く沈んだ横顔がまだ乾くことのないほのかの古傷を、ちくりと刺す。

(……同じだ)

1年前。由紀や正樹など、ウィングリサーチのメンバーに会うまでの自分と。

友人はなく、家族とさえ、進学する高校でもめていたあの頃の自分と。

依頼があった日、家族が見舞いに来ないと小倉は言っていた。それにしても。

透子にも……友達がいないのだろうか？

慎二の言うように、自身の実力の高さで人を見下していたとして

も、そんな彼女とともに行動していた生徒がいても、おかしくはないのに――。」

「あの、何か用ですか？」

「え？」

「じつと見られると、気分悪いんですけど」

「す、すみません。私の友達に似ていたものですから」

いつの間にか透子の横顔を真剣に見つめていたことに気づき、ほのかは詫びる。

透子は横目でほのかを見ると、そのままきびすを返してエレベーターへ戻って行く。

さつきとは違って、ピンと背筋を伸ばした後ろ姿を見るほのかの目の奥が、ふいに熱くなった。

「ほのか……」

由紀の手が、そつと肩に乗ったのと同時に、頬に雫がこぼれ落ちる。

「あんたが泣くことないじゃないの」

ほのかの頭を優しく叩く由紀の声が、すぐ近くで聞こえる。

「あの人……独りぼっちな」

口元を手で押さえて、ほのかはつぶやいた。

「そう……ね。でも、それは本人が招いたことよ。私たちにはどうしようもできないわ」

由紀の言い分はもつともだ。でも、それを言ってしまったら、ほのかがいじめられたことも、自身が招いたことになってしまうのだろうか？

「あんたの気持ちはわかるわ。だけどね、これは自分自身をしつかり見つめて、江頭さん自身が乗り越えなきゃいけないの。家族や友達がお見舞いに来る来ないは別にして、どうして襲われなきゃならなかったのかを知る、いい機会かもしれない」

「私たちに、その手助けはできないの？」

由紀が、困ったような表情でほのかを見る。

「私だつて独りぼっちだったわ。でも、由紀が一番最初に話しかけてくれたから、知らない人だらけだった前のクラスでもやって来られたわ。村上くんや高原くん、南くんがいてくれるから、こうしていられる。でも、彼女には……」

「私たちの仕事は、事実を調べることだけなの。被害者や加害者のプライバシーに、むやみに踏み込んだりいけないのよ」

由紀の、有無を言わせない言葉に、ほのかはうつむいた。

警察の一機関に組み込まれている自分たちには、本当に、どうす

ることもできないのだろうか？

「ほのか、行こう」

うつむいたままのほのかを覗き込むように、由紀が促してくる。

これ以上、ここにいてもどうにもならない……。そう思ったほのかはうなずき、由紀のあとをついていく。

カラスの鳴き声に振り返ると、さっきまで青かった空の色が、夕焼けに溶け始めていた。

38・困惑

赤く染まり始めた空に、ドローイング開始を告げる笛が、高らかに鳴り響いた。

横一線に並ぶアーチェリー部員が、思い思いのフォームで、矢を的に射っていく。

立てたひざに腕を乗せてその様子をぼんやりと見つめていた昭太の脳裏には、飯沼園子が行方不明になったのを知った時に正樹が見せた、かけ下に落とされたような顔が浮かんでは消える。

無理もない。この2日間ほどで、正樹が対処しなければならない問題が一気に押し寄せた。

調査の先陣を切る由紀が犯人と接触し、入院したことで青陵学園への潜入調査は白紙。

それを知り、正樹への不快感を露わにしたほのかは、由紀の見張り役として病院通いのため、今後の資料調査と整理に影響が出かない。

そして、一度は心を開いた園子を犯人に奪われた慎二に対するフオー……。

正樹だって、自分と同じ高校2年生。まだ、17歳になるかならないかの年齢なのに、すべてを背負わなければならない立場にいる。自分は今、いずみを守らなければならないことはわかってる。し

かし、こんな時に正樹の力になれないことが、もどかしい。

「ずいぶんお疲れだな。少年」

声がしたので顔を上げると、乾が少しおどけた表情で背後に立っていた。

「先生、遅刻ですよ」

「大丈夫だ。ここの連中は勝手に練習始めてくれるからな。気がラクだ」

「のん気ですね。大会、近いって言うのに」

昭太の横に腰を下ろした乾が、集合をかけようとした男子生徒を止めるしぐさをする。

「今日はお前さんひとりか」

「ええ。みんな出払っちゃって」

「おいおい、大丈夫か？ アーチェリー部を大々的に取り上げてくれるんだろ？」

生徒を見送り笑みを浮かべる乾に、昭太はあいまいに笑うことしかできない。

「どうです？ 選手、かたまりました？」

少しは取材らしいことをするために、昭太は訊ねる。

「ああ。今日、発表するつもりだ」

部員たちの矢を射る姿を見つめる乾の目は、真剣そのものだ。

昭太も、視線を追う。

すると正樹が言ったように、3年生で部長の沢田正彦、横山雄太。そして2年生の神埼祐子、そしていずみを重点的に見つめている。

「以前、村上が言った4人は当確ですか？」

「ああ。団体戦はやはりこの4人……。ひとりは補欠だな」

団体競技は確か3人で1チームだ。この状況からすると、恐らくいずみは補欠に回されるだろう。

彼女は今、必死に亡き友人の願いを叶えようとしている。できるなら、レギュラーとして大会に出て欲しい。

「よし！ 集合」

終了の笛が鳴ると同時に、部員が集合する。

「これから、大会出場者、ならびに補欠要員を発表する。なお、ひとりでも多くの選手に機会を与えるため、今回は団体戦もしくは個人戦にエントリーしたものの重複出場はなしだ。いいな」

意外な言葉だったのか、整然と並んだ部員からはざわめきが聞こえる。

「個人戦男子。相沢、大沼、田中、矢崎、吉田……」

乾が選手名を発表するたびに、部員たち表情には隠しきれない喜びや悲しみ、悔しさがにじんでいる。

「よし、最後団体戦。レギュラーは沢田、神崎、片山。補欠は横山以上だ」

いずみの名前が呼ばれたとたん、さらにざわめきが大きくなった。

2年生の部員は、いずみが選ばれたことを素直に祝福しているが、3年生のなかには、複雑な表情を浮かべているものもある。

そんな3年生に気を使いつつも、いずみは嬉しそうだ。

「今回の大会がすべてじゃない。選ばれなかった者も、夏のインターハイに向けてさらに練習を積んで欲しい。よし、練習再開！」

乾の声を合図に、部員がそれぞれの位置に散った。

個人戦に出場するものはまた笛の合図で順番に弓をつがえ、団体戦出場者は隅の隅の前で何やら話をしている。

「あれ、何話してるんですか？」

「矢を射る順番だ。順序が違えば結果も変わる。それぞれの性格に合わせて、あいつらが決めるだろう」

昭太はまた驚いた。普通は顧問が順番を決め、選手は、期待され

る結果を求めて練習に励むのに。

「いいんですか？ まかせっぱなしで」

「これが、この学校の伝統なんだそうだ。『上のものから指示されてから動くようじゃ、自分に責任を持つ人間は育たない』というのが、アーチェリー部の家訓みたいなものらしいぞ」

「へえ……。だからみんな、先生がいなくてもすぐに練習を始められるんですね」

昭太は感心した。学生時代に自分から動かないばかりに、動く方法がわからない新社会人が増えている、とマスコミは報じているが、この部には当てはまらないようだ。

「だからと言って、顧問が何もしてません、と書かれても困るからな。その辺はきちんと、フォローしておいてくれよ」

真面目な表情で話す乾に、昭太は思わず吹き出す。

「さあ、わかりませんよ。今後の先生次第ですからね」

「おいおい。冗談だろ」

本気で慌てているような乾を見て、これ以上いじめるのは可哀想かと思った昭太は、練習に励む女子部員の方に目をやった。

「書きやしませんよ。そんなことやってたら、女子生徒を敵に回しちゃう」

乾が大笑いをして肩をたたいて来たとき、かすかに甘い香りが漂ってきた。

「先生、香水つけてましたっけ？」

乾の表情が、一瞬こわばる。

「いや……きっと女子生徒とすれ違った時についたんだろう」

そのまま乾は、昭太から顔をそらして振り返り、練習を目に向けてる。

なぜか、これ以上話しかけてはいけないうな気がして、その後は昭太も、黙って練習を見つめるしかなかった。

39・訪問者

午後6時を過ぎ、真っ赤に染まっていた空を、闇が侵食し始めた。玄関の屋根を支える支柱によりかかる昭太の心も、この空のようにすっきりしない。

自分以外の4人の状況が心配なのもさることながら、今、一番気がかりなのは、さっきの乾の態度だ。

ただ自分は『香水を使っていた』かを訊ねただけなのに、その後の乾の態度はどこかぎこちなかった。

香水を使わない自分でも、あんな態度は取らない。というか、よほどのナルシストでもなければ、気にすることもないだろうに。

「南くん、お待たせ」

今日はおさげ姿のままで、いずみが昭太の横に並ぶ。

「団体戦レギュラー、おめでとさん」

「ありがとう。まだ、信じられないんだけどね」

少し照れたように、いずみが小さく頭を下げる。

「片山が努力してきたからだよ。これで、詩織さんにもいい報告ができるな」

「まだまだこれからだよ。大会でいい成績残さなくちゃ」

いずみが小さくガッツポーズをして、昭太を見上げる。

「……だな。詩織さんとの約束を果たして、無念を晴らしてやんなきゃ」

「そうだなくん。突然で悪いけど、お願いがあるんだ」

顔の前で手を合わせたいずみが、申し訳なさそうに昭太を見上げてくる。

「お願い？」

「詩織ちゃんの家には、つき合っただけなの」

「今からか？」

昭太の目を見て、2回ほどうなずいてくる。

「詩織ちゃんに報告して、もう一度約束したいんだ。上位に入れるように頑張るよって」

思い立ったら吉日、というのが、今からだと帰りが7時を過ぎてしまふ。

けれど、レギュラーに決まった以上、これから厳しい練習になるのは目に見えている。行くならやはり……今日しかないか。

「わかった。家族にはちゃんと連絡しろよ」

「ありがとう！　じゃ、待ってて」

待ってて、ってことは……。

「お前、携帯持っていないのかよ!？」

「だって、持つ必要ないんだもん」

さらりと言ったいずみが、職員室近くの公衆電話に向けて歩きだす。

持ちたくても親が許さないケースは多々あるが、持つ必要がないなんて……今時珍しい。

変なところで感心する昭太だが、いずみのいないうちにこちらも連絡を入れておかないと、いつ何時、なにか有事の連絡が来るかわからない。

『片山と、もう一度植村詩織さんの家へ行くので、合流が遅くなる。よろしく』

正樹と慎二のメールアドレスに一斉送信したところで、いずみが戻って来た。

「早いな」

「うん。南くんと一緒に言ったたらあっさりOK。信頼厚いからね」

連れだって歩くいずみが、二度ほど肩を叩いてくる。

「俺、ただ一緒に帰ってるだけだぞ」

「その律儀さがいんじゃない。普通は、その後に何もなかったら『お役御免で、はいさよなら』でしょ？」

(……そうできない理由が、俺にはあるんだよな)

心の中でそつとつぶやくと同時に、最終便が停留所へすべり込んできた。

「かおりさん！」

「お帰り下さい。お話しすることは何もございません」

以前訪れたアパートの家の玄関先で、詩織の母が誰かと押し問答をしているのが見えた。

「しかし、このまま黙っていていいんですか？ 娘さんの死の原因は、決して許されることでは」

「これ以上、さらし者になりたくないんです。すみませんが、二度と来ないでください」

「おばさん！」

扉を閉めようとした詩織の母、かおりに向かっていずみが叫ぶ。

一歩下がった初老の男性が、こちらを見た。

穏やかな顔つきだが、目つきは鋭い。まるで、一目会ったらすぐに、すべてを見透かされてしまいそうだ。

「あら、いずみちゃん」

「団体戦のレギュラーになれたんで、詩織ちゃんに報告に来たんです。あがってもいいですか？」

男性を気にすることなく、いずみはかおりに話しかける。

「いいわよ。ありがとう、詩織も喜ぶわ」

かおりの言葉に嬉しそうにうなずきたいずみが、振り返ってこっちを見る。

「俺、ここで待ってるから行って来いよ」

男性の様子が気になった昭太は、自分の足元を親指で指した。

1階中央の扉が閉まると同時に、男性が話しかけてきた。

「植村詩織さんの、ご友人ですか？」

「俺は違います。今入っていった子が、中学時代、仲が良かったって言ってますけど？」

わざと語尾を上げて、男性の様子をうかがう。すると。

「少し、お話をうかがいたいんですけど、お時間頂けますか？」

男性が胸ポケットから名刺を取り出し、昭太に手渡してきた。

40・ふたりだけの『約束』

「源……みなもと嘉治さん？」

もらった名刺にはフリーカメラマン、とある。どこかで見た名前だ。

「はい。1年前からこの事件をひそかに追っていました」

「ひそかに、ですか？」

「ええ」

短く答えた源は、それ以上は何も言わない。

もしかしたら、この男の取材過程を追うことで、事件に関するヒントが得られるかもしれない。

「ありがとうございます」

お参りを終えたいずみが出てきた。

「片山。この人がお前に話聞きたいって言うてるんだけど……いいか？」

話をするには近くの喫茶店、が定番なのだが、さすがに8時過ぎるとまずいと思ったのか、いずみが指定したのは自身の自宅だった。

最初は難色を示していた母、智子だったが、父、仙吉がこれまたあつさりOKをしてくれたおかげで、2階にある6畳ほどの仏間で取材が始まる。

「私に聞きたいことって、何でしょう？」

いずみのほうから話を切り出した。ジュニアでの活躍歴が長いせいか、取材慣れしているようだ。

「単刀直入にお伺いします。植村詩織さんが自殺されたのは、ご存知ですね？」

「はい。詩織ちゃんのお母さんから聞いています」

いずみが、よどみなく答える。表情も、いつもとあまり変わりがない。

「その理由は、ご存知ですか？」

「いえ。お母さんは何も話してくれませんでした。最初に死んだと知った時は、事故だと聞いていましたから、驚きました。源さんはご存じなんですか？ 自殺の理由」

いずみが問い返す。源は穏やかな表情のままですなずいた。

「教えて、いただけますか」

さらに訊ねるいずみの声が、低くなった。

「知って、どうなさるおつもりです？」

源の眼光が、やや鋭くなる。それに気圧されたのか、いずみが初めて源から目をそらす。

仏間に、沈黙がただよう。智子が出してくれたコーヒーの湯気が、灯りへ向かってゆるやかに上がり、宙に消えていく。

「詩織ちゃんの代わりに大会に優勝して、彼女が生き別れたお父さんに、その想いを、真実を伝えたい」

顔を上げたいずみが源を見据え、きつぱりと言った。

「わかりました。これをご覧ください」

源が持っていた黒のセカンドバッグから一枚のコピーを取り出す。

それを見た昭太は、思わず声をあげそうになった。その内容は、由紀が昨日部室に持ってきた『あの記事』だったからだ。

いずみは食い入るようにして、その記事を読んでいる。

「これは、詩織さんのことなんですか？」

思わず口をはさんだ昭太に、源はうなずく。

「はい。彼女のけがの原因は至近距離から矢を射ぬかれたことです。その事故で再起不能になり、絶望のあまりに飛び降りたのではと推測しています」

「誰が、そんなひどいことを？」

一瞬目を泳がせた源は、今度は首を振った。

「手を尽くして調査したのですが、今のところは不明です。詩織さんの通っていた青陵高校のガードが固いものですから」

おそらく……嘘だ。源はきっと、その人物がだれなのかを知っている。

「そうですか」

視線を下に落したまま、いずみは唇をかみしめる。

「先ほど、詩織さんの生き別れたお父さんのお話をされていました。その方がどなたかはご存知ですか？」

言葉を発することなく、いずみはうなずいた。

「話して、いただけませんか？」

慎重に、源が口を開く。しかし、いずみは顔をあげて源を見据え、言いきった。

「それはできません。詩織ちゃんとの約束ですから」

「約束……」

確かめるようにつぶやく乾に、いずみは再度うなずいた。

「詩織ちゃんのお母さんも、私がお父さんの素性を知っていることを知りません。ふたりだけの、約束です」

「わかりました。今日はいろいろありがとうございました」

話さない意思をはっきり示したいいずみの言葉に、源があっさりと引きさがる。

「あの」

立ち上がった源を追うように、いずみが膝を伸ばす。

「詩織ちゃんの夢を奪った人、わかったら教えていただけますか？」

「知って、どうなさるつもりですか？」

問い返した源の鋭い視線が、いずみを捉える。

「正々堂々、競技で、仇を取ります」

目をそらさずに告げたいいずみにうなずき、源が部屋を出ていく。

「じゃ、俺も帰るわ」

源を追うように、昭太も立ち上がる。

「うん。今日も遅くまでありがと。また明日ね」

軽く手を上げた昭太は、居間でテレビを見ているいずみの両親に挨拶をし、表へ出た。

すでに陽は落ち、昭太の足元を照らすのは、規則正しく設置された街灯だけだ。

「源さん！」

昭太の声に、源が立ち止まった。

「なんででしょう？ 確か、南くんと言いましたね」

名乗っていない自分の名前を、知っている。

驚く昭太の顔を見て、源は微笑んだ。

「由紀ちゃんのお友達でしょう。よく、一緒にバスに乗っていると
ころを見えていますよ」

由紀の名前を出されては知らないふりもできない。昭太は観念して、無言のままうなづく。

「何か、お訊きになりたいことでも？」

由紀の知り合いなら話は早いが、外部の人間に、あまり突っ込んだ質問もできない。

でも、どうしてもこれだけは訊いておきたい——昭太は、思いき

って口を開いた。

「源さんは、詩織さんの選手生命を奪った人物を、知っていますね？」

源は表情を変えることなく、静かにうなずいた。

41・同じ『香り』

やっぱりそうか。

いずみは気づいていなかったようだが、事実を知らながら隠したのを、かすかに泳いだ視線が物語っていた。

「あなたも、1年前の事故を追っているのですか？」

あなた『も』？

言い方が引つかかるが、ここで素性がばれてもまずいので、昭太は首を横に振った。

「俺はただ、いずみさんの願いが叶って欲しいと思っているだけです。他意はないです」

「……そうですか」

一瞬の沈黙のあと、源が前を見てゆつくりと歩き出す。

「あなたと片山さんは、どういったご関係で？」

「たまたま、彼女を巻き込んだ事件に出くわしましてね。ボディガードとして、八百屋さんに雇われてるんですよ」

冗談を交えて言ったつもりが、源の目が、昭太を真剣に見上げてくる。

「片山さんを巻き込んだ……事件？」

妙な反応に、昭太はとまどう。

言い過ぎたか。しかしここで変にごまかせば、逆に怪しまれかねない。

昭太は、あの日の状況をさらっとだけ話した。

「たまたま居合わせたのが僕ですから、ご両親がぜひ、って」

「南くん」

「はい」

源が、再度立ち止まった。昭太を見上げる目には、さっきの鋭さとは違う、何らかの光が宿っているように見える。

「彼女を、守ってあげて下さい。詩織さんとの約束を、無事に果たせるように」

初めて聞く熱っぽい口調に圧され、昭太はただうなずく。

「それでは、これで」

昭太の返事に安堵したのか、源がかすかに笑みを見せて少し足早に立ち去る。

カメラマン、にしては、情が入りすぎてはいないだろうか？

遠ざかる源の後ろ姿を見つめる昭太の耳に、メンバーからの着信を告げる電子音が入る。

「はい。もしもし」

『南、そっちはどうだ？』

いつもと変わらない口調ながら、電話の向こうの正樹の声は疲れ切っている。

「今、送り届けたよ。長野さん……目、さめたのか？」

『ああ。さっき目が覚めた。今、小倉さんが事情を訊いてるよ』

愛実が襲われた時のことを覚えていてくれれば、少しでも犯人像に近づける。

「わかった。俺も片山を無事に送り届けたし、そっち行くよ。気になることもあるんでね」

正樹の了承を得て電話を切った昭太の周りを、風が吹き抜ける。

春になったとはいえ、陽が落ちてからの風は冷たい。

ここから愛実の病院まではそう遠くない。昭太は、その場で足踏みを始める。

首を動かし肩を2、3回上下させると、寒さを吹き飛ばそうとするかのように、昭太は走り始めた。

「早かったな」

走り始めてから10分もせずに病院に着いた昭太に、正樹が黒い缶を投げてよこした。

「サンキュ。慎二は？」

救急病院とは名ばかりかと思うくらい、古く、狭い待合室で、はずむ息を整えてからブラックコーヒーを流し込んだ。

「バイク仲間の所に行ってる」

「こんな時にかよ？」

コーヒーを飲みほした昭太は思わず、不満げに口にする。

「いや。犯人のつけていた香水と同じものを、慎二のバイク仲間が持っているらしいんだ」

「香水を？」

正樹が、真剣な表情でうなづく。

由紀が襲われた際に嗅いだ香りと、愛実が襲われた当時に来ていたジャージについていた香りが似ていることから、慎二が同じものをつけている仲間の所へ借りに行ったらしい。

男性用の香水は数多く出ているが、犯人のつけているものは、日本ではかなり珍しい種類らしく、これが特定できれば、解決にぐつと近づくはずだ。

「村上くん。南くんも来ていましたか」

「小倉さん」

いつも以上にヨレヨレになったネクタイを締め、頭がさらにボサボサになった小倉が、疲れを隠さずに正樹の横に座る。

昭太が、反対側にあつたビニール袋から烏龍茶を取り出し手渡すと、彼はプルタブを引きぬいて一気に飲み干した。

「長野さんは、どうでした？」

「添嶋さんとほぼ同じ状況で襲われていますね。後ろからいきなり何かをかぶせられて、その後の記憶はないそうです。血液中からも同じクロロホルムの成分が検出されています」

「そうですか」

正樹が小さくため息をつく。

そこへ、荒々しい音とともに、慎二がボトルを持ってやって来た。

「悪い。遅くなった」

正樹にボトルを手渡し、小倉の横に座る。しかし、ビニール袋に

はもう、ジュース類は入っていない。

すぐそこにある自動販売機でカフェオレを買い、慎二に手渡す。

「それか？ 犯人がつけてる香水ってのは」

「ああ。不気味なくらい、鮮やかな緑色だ」

銀色のキャップに、逆三角形のフォルム。鋭角なボディを支えるように、下部はワイングラスのような形状になっている。

正樹がそっと、キャップをはずした。すると、甘い香りが昭太の鼻をつく。

「……あれ？」

この香り、どこかで嗅いだ記憶がある。

「どうした？ 昭太」

指先を鼻にあてる昭太の顔を、慎二が覗き込んでくる。

「……どこかで嗅いだ覚えがある」

「何だって？」

正樹や慎二はもちろん、驚いたような小倉の視線も、昭太の方へ注がれた――。

42・心得

「どこで嗅いだんですか！？ 南くん」

小倉がいきなり、昭太に詰め寄ってきた。血走った眼の下には、くまがくつきりと浮いている。

「小倉さん、落ち着けよ」

つかみかからんとする小倉の手を、慎二が抑える。しかしその手を振り払った小倉の細い指が、昭太の制服の襟に食い込む。

「これが落ち着いていられますか。南くん、どこで嗅いだか思い出してください！」

思い出すも何も、ここまで勢いよく詰め寄られては……。

「小倉さん、これじゃ南が話せませんから。小倉さん！」

正樹の強い口調に、ようやく我に返ったようだ。

「すみません。つい……」

軽くせき込む昭太に、小倉が頭を下げる。

「で、どこで嗅いだって？」

さして気にする様子もなく、慎二が問いかけてくる。

「アーチェリー部。乾先生についてた香りとたぶん同じだ……と思う」

「乾先生と？」

正樹の目が鋭くなった。昭太は無言でうなずく。

「でもよ、先生は今日ずっと学校にいたんだろ？」

途中で学校を抜けている慎二が再度訊いてくる。しかし、昭太のクラスは、乾の担当教科である化学の授業がなかったため、少なくとも授業中に彼を学校で見えない。

「そうか」

腕を組んだ正樹が、息を吐きだし目を伏せる。

「その乾先生とは、どんな人物なんですか？」

すっかり落着きを取り戻した小倉の問いに、慎二が答える。

「今年赴任してきた非常勤の先生だよ。アーチェリー部の顧問」

「そのアーチェリーの腕前はどうぞ？」

「さあ……。プレーしている姿を見たことはありませんから」

次の問いには、アーチェリー部に日参している昭太が答えた。

「その先生の素性、調べてみましょうか」

「それは早すぎるんじゃないか？ 彼は男女問わず生徒たちに慕われてるし、そんなことしそうな人間には見えないですよ」

「『そんなことする人じゃない』人間が、犯罪に手を染める時代ですよ、南くん。先入観や思い込みは、禁物です」

いつになく厳しい口調で、小倉がくぎを刺してきた。

納得はしがたいが、小倉の言う通りだ。昭太は黙ってうなづく。

「とりあえず今日のところは解散しましょう。長野さんの容態は安定しているようですが、これ以上の聴取はとれませんし」

「それでは俺たちはこれから、今日の動きを確認しますので。お疲れ様でした」

正樹にならって、慎二とともに昭太も頭を下げる。

今どき、自動ドアもついていない重い扉を開けて、3人は外へと出た。

すぐ近くのコンビニで晩ごはん代わりになるものを購入し、そのまま、向かいの公園のベンチに腰を下ろす。

「納得できないって顔だな、昭太」

おにぎりのパッケージを勢いよく破った慎二に、昭太はうなづく。

「けどよ、きっかけはお前が言った『同じ香水の匂い』だぜ。自身

でタネまいといて、刈り取り拒否はないだろうよ」

少し乱暴な口調に少しムツとしたものの、言われてみると確かに、慎二の言う通りだ。

しかも、その匂いを指摘した時に見せた乾の態度はまるで、何かをごまかしているような不自然さも見えた。

「どうしたんだよ村上。さっきから黙ったままで」

総菜パンと牛乳を手に考え込む正樹の顔の前で、慎二が手を振る。

「乾先生に……犯人となりうる材料がひとつだけあるかもしれない」

「犯人となりうる、材料？」

声をそろえて問う昭太と慎二に、正樹は真剣な表情でうなづく。

「彼は娘さんがいじめで自殺している。おととい、警察に事情を聞き行つて門前払いにされたのを、俺とほのかが見ている。もし、その娘さんをいじめたのが、今回の事件の被害者なら、可能性はゼロじゃない」

「いくら何でも、それは飛躍しすぎじゃないか？」

「でもよ昭太。よくあるじゃん、いじめで自殺した子供の父親が、いじめた連中に報復するって話はさ」

おにぎりをお茶で飲み下した慎二が、口を挟む。

「そう。可能性がないわけじゃない。南、この事件はもう、傷害だけで片づく問題じゃない。殺人、殺人未遂にまで発展している。少しでも疑問が出てきたら、それはきちんと調べないと」

「それで先生がシロならいいわけだろ。あまり深く考えるなよ。あくまでも可能性、なんだからさ」

可能性、を強調した慎二が、昭太の肩を軽く叩いてくる。

万が一乾が犯人なら、いずみを団体戦のレギュラーに抜擢するはずがない。

昭太は自身に言い聞かせ、静かにうなずく。

「よし、じゃ明日からどうする？ 由紀とほのかはほとんど動けないんだしさ」

「そうだな。取り急ぎやらなきゃならないのは、飯沼園子と三井あゆみの件だな。乾先生や長野さんの件は、小倉さんに頼もう」

慎二の問いに、正樹は厳しい表情を崩さないまま答える。

「飯沼さんの件は、俺があたるよ」

慎二の表情が、曇る。言葉にはしなくても、無事に連れて帰れなかった責任を感じているんだろう。

「頼む。問題は三井あゆみだな。できれば葬式にも参列して情報を得たいところだが、俺は彼女の取り巻き連中に顔を覚えられたしな」

「村上、俺も。奴らが由紀を尾行してた時一緒に歩いてる」

「了解。俺ら3人の中で顔を見られてないのは、南だけだな」

正樹と慎二の視線が、昭太を捉えた。

「ちょっと待て。俺、三井あゆみやその取り巻きの顔知らないぞ」

「その方がかえっていいだろ。以前、彼女に助けてもらったことあるだとか何だとか、でっちあげてさ」

いつもの調子で、慎二がうなずく。

「片山はどうするんだよ？ 俺、彼女の警護担当だろ」

「明日は俺がやる。お前は知り合いの葬式が入ったことで、早退してもらっからな」

NOを言わせない口調で、正樹が昭太の両肩に手を乗せてくる。

「わかった、わかりましたよ。何とかしますってば」

2人に根負けした昭太は、頭を抱えてしゃがみこんだ。

43・助っ人

午前中の授業の終わりを告げるチャイムが、教室内に響き渡った。

教科書を紺のカバンにしまいながら、昭太は深くため息をつく。

「おい、どうしたんだよ。昼からの数学当たるのか？」

由紀の入院やら諸事情が重なりやむを得ないとはいえ、ターゲットの警護から、いきなり表舞台に出ることになってしまったのだ。ため息が出ない方がおかしい。

訊ねてきたクラスメートにあいまいに笑って、昭太はカバンを持つて教室を出る。

今朝の申し合わせで、今日、昭太が学校を早退して三井あゆみの通夜に参列することは、ほのかにも言っている。

由紀にも、正樹が電話連絡をした。ほのかに心配をかけたくないせいか、「調査に戻る」とは言わなかったらしい。

その三井あゆみの死因は、首を絞められたことによる窒息死。「殺人」と断定された。

どうやら犯人は、別の場所で殺した後、自殺に見せかけるために、木にロープをかけてあゆみの身体を吊ったらしい。

最初は、江頭透子をはじめとした5人の被害者を、そしていずみを矢で狙った。

しかし、どこで何のタガが外れたのか、今の犯人は自身に関わったであろう人物まで、無差別に殺しているように見える。

一体、何の目的で？

「あれ、南くん。どうしたの？ カバン持って」

前方から、グレーの制服を着たおさげ頭のいずみが手を振って来た。頭に流れるはずの血が、一気に下に降りていくのがわかる。

「知り合いが、急に死んじまってさ。今日通夜なんだ。悪いけど、今日は村上を送ってくれるって言ってたから」

とりあえず、用意しておいた言葉を並べる。すると、いずみの顔がすぐに曇った。

「何て言っていていいかわからないけど……元気、出してね」

「サンキュ。じゃ」

目を合わさないようにして、昭太はいずみとすれ違う形で玄関へと向かう。

もしかしたら、詩織のことを思い出してしまったのかもしい。そう思うと、昭太の心は少しだけ、痛んだ。

午後6時30分。

昭太は、三井あゆみの通夜が行われる式場のある相模市の駅に着いた。

さすがに、名徳学園のグレーのブレザーは着て行けないので、高校入学時に施設の先生から送られた、黒いスーツに身を包んでいる。

小倉からのメールをもう一度開き、場所が広徳寺。読経開始時間が7時であることを確認する。

携帯を閉じた直後、突然、昭太は後ろから肩を叩かれた。

思わず振り返ると、そこには、青陵高校の制服を着た由紀が立っている。

「やつほ。昭太くん」

「おまつ……！ 『やつほ』じゃねえだろ！？ 病院抜けてきたのか？」

心底驚いた昭太が後ずさりすると、由紀はケタケタ笑いながら手を横に振る。

「先生にはちゃんとして外出許可取りましたよ。村上にもメールしていたわ」

今頃正樹は……目をひんむいて絶句しているだろう。一緒にいるはずのいずみが、訝しがらなければいいが。

「お前、大丈夫なのか？ 倒れても責任取れねえぞ」

「心配ご無用。点滴打って夕方まで寝たら、すっかり元気になりましたよ」

街灯に照らされた由紀の顔には、特別変わった様子はない。

「とにかく、私も行くわよ。どうしても、確かめたいことがあるの」
今まで浮かべていた笑みを消し、由紀が真剣なまなざしで昭太を見上げてくる。

実際、心細かったのは事実だし、由紀がいてくれれば何かつかめるかもしれない。

（村上、すまん）

昭太は心の中で正樹に謝り、そつと携帯電話の電源を切った。

広徳寺の門前には、あゆみの葬式がここであることを示す大きな看板が立っていた。

やはり、何人かの報道陣が取材をしようと学生たちに声をかけている。

その波をすり抜けた昭太は由紀と並び、玄関先で香典を出して靴を脱ぐ。

板張りの廊下を抜けて本堂に入ると、ひつつめた髪型に眼鏡をかけた少女の遺影が、正面の大きな仏壇に置かれていた。

「あれか？ 三井あゆみ」

隣に座った由紀が、うなずく。

「でも、私が知ってる彼女は派手だったわ。恐らく、犯人に変えられたんでしょね」

犯人と知り合いさえしなければ、地味でも、生きて高校生活を送れただろうに。

昭太のすぐ横の通路を、青陵高校の生徒らしき少女が何人が歩いていく。

由紀がそっと、自分から離れた。恐らく、知り合いだと思われたらやりづらくなるのを、今朝正樹から聞いて察したのだろう。

時間が近づくにつれ、会場いっぱいには並べられた椅子は埋まっていき、7時きっかりに読経が始まった。

自分の前に座った由紀は、誰かを捜すように首をあちこちに動かしている。

後ろの入り口近くに座った昭太の目の前には、黒のスーツやワンピースを着ている人とは別に、青陵高校の上下青の制服を身にまとった生徒たちが、幾つもの列をなして座っている。

あの中にきつと、正樹や慎二の言う「取り巻き」がいるのだろう。

昭太は、生徒の列を見つめる。

男子生徒は前を見たままじっとしているが、一番端に座っている女子生徒が2人、肩を震わせ、頭を下げている。

あれか――。

後ろ姿だけではわからないが、髪型を見る限りは、遺影のあゆみと同じようにおとなしい印象を受ける。

由紀から、焼香台が回ってきた。目で彼女らに視線を送って確認すると、由紀は礼をするふりをしてうなづく。

何の接点もない自分が、あの2人にうまく接触し、情報を聞きだせるだろうか？

焚いた香木に香をふって手を合わせた昭太の心に、また、不安が広がり始めた。

44・変化

通夜は、滞りなく終了した。

昭太は、取り巻きの少女たちが、祭壇の前で参列者にお辞儀をしている両親に挨拶をする列に加わるのを見て、後にならった。

娘の突然の死に、ショックを隠しきれない表情をした母親は、黒い着物に包んだ身体をどうにか支えてもらいながら呆然と立ち尽くしている。

痩せ細った妻に気を使いながらも、体躯のいい父親は、涙をこらえて気丈に頭を下げている。

「娘と仲良くしてくれて、ありがとう」

父親のかすれた声に首を振り、ひとりが激しく泣き出す。

肩を抱く隣の少女の顔は青ざめ、今にも倒れそつだ。

出口に向かうのを確認し、昭太も頭を下げる。見知らぬ自分に戸惑いつつも、父親は丁寧な頭を下げてくれた。

ふたりの後を追って、外に出る。

案の定、支えていた少女がバランスを崩し、ふたりとも倒れてしまふ。

「大丈夫か？」

駆け寄った昭太は、泣いている小柄な少女を起こした後、眼鏡をかけた少女に手を伸ばす。

「すみません」

消え入りそうな声で謝り、少女が手を取ろうとする。しかし再びしゃがみこんでしまう。

「顔色悪いみたいだし、病院に行った方がいいんじゃないのか？」

「そうしなよ、絵里子。昨日から寝てないって言ってたじゃん」

昭太の隣でしゃがむボブカットの少女が、もうひとりの少女――絵里子に促す。

「大丈夫」

「……じゃ、なさそうだよな」

絵里子のおでこに手をあてた昭太がつぶやく。貧血を起こしているのか、異様に冷たい。

遠巻きにながめている人垣の中に由紀を見つけた昭太は、門の前に行くように目で合図する。

それを察した由紀が足早に立ち去り、少しすると、ハイヤーが近づいてきた。

ふたりを乗せて、運転手にすぐ近くの病院に行くように依頼する。

「すみません」

ほとんど力のない絵里子の身体をよりかからせた昭太に、少女が頭を下げてくる。

「いや、気にしないでいいよ。……っ」と

「大橋加奈、です」

少し戸惑い気味に、加奈が頭を下げたので、昭太も自己紹介をしてそれにならう。

「あゆみとは、どういう関係だったんですか？」

若いのに黒のスーツを着ている昭太をどう思ったのか、加奈が訊ねてきた。

「俺も、具合悪いのをあゆみさんにこうして助けてもらったことがあって……。何とかお礼を言いたいと思っていたところに、今回の訃報を聞いて。いてもたってもいられなくて」

心臓の鼓動が、全身にひびいているような感覚にさいなまれながら、昭太は用意していた言葉を告げた。

「それ、いつごろです？」

「去年の冬。俺、その頃に母親亡くしてさ。荒^{すさ}んでいた時期だったから、あの子の優しさが忘れられなくて」

バックミラー越しに由紀がハイヤーでついて来ているのを確認してから、うつむき加減に昭太が言っと、加奈が独り言のようにつぶやく。

「あの頃のあゆみ、まだ優しかったから」

「まだ……って？」

「あの子、この春に男とつきあうようになってから変わっちゃったんです。いきなり、いじめられた人間に復讐してやろうとか言って」

「加奈」

昭太に支えられた絵里子にとがめられ、加奈が口をつぐんだ。その様子を見た昭太はこれ以上、口をはさめない。

タイヤがアスファルトをすべる音だけが、車内にひびく。

しばらく走ると、小さな個人病院らしき建物にハイヤーが止まる。

「今、看護師さん呼んできますね」

30代くらいの背の高い運転手がハイヤーから降りた。インターホンを押したのか、直後に蛍光灯がともり、中からひとりの看護師がこちらに近づいてくる。

「その方ですか？ 患者さん」

寄りかかり、目を閉じる絵里子を見た看護師に昭太はうなずく。中に入り、看護師に絵里子を預けた昭太は、思いきって加奈に訊ね

る。

「あゆみさん、男とつきあってから変わったって言ってたよね？
どんな男か知ってる？」

昭太から目をそらし、加奈は首を横に振った。

「あゆみは『あの人』としか言わなかったし、いつも、夜に会って
みたいだったから。……でも、どうして？」

「ちょっと、ね」

含みを持たせる意味で、昭太は言葉を濁した。額面通りに受け取
ってくれたのか、加奈がまた涙をぬぐう。

「南さんみたいな人とおつきあいしてれば、あゆみ、死ぬことなん
かなかったのに……」

また、泣き始めた。昭太はポケットからハンカチを取り出し、加
奈に渡す。

「持ってる、から、大丈夫」

何も言えずに、昭太はそっとハンカチをしまう。

診察室から出てきた看護師が、昭太と加奈を交互に見る。

「ご家族の方に連絡を取りたいんですけど、どなたか、連絡先ご存
知ですか？」

「はい。確か、カバンに携帯電話が」

泣きじゃくる加奈を促し、看護師がまた診察室に姿を消した。

人が近づく気配がしたので振り向くと、由紀が加奈を見送るよう
に顔を出す。

「たいした収穫じゃないの。昭太くん」

「そうか？ つきあつてた男がいたってただだぞ」

頭をかき、昭太は前を見る。二人の姿はとうになく、非常灯の緑
だけが廊下を照らしている。

「そのつきあつてた男がきつと、彼女をそそのかしたのよ。で、飯
沼さん襲撃に失敗した男は、その責任を三井さんにかぶせて殺した

――」

「またずいぶん話が飛んでるな」

「あくまでも仮説。でも、江頭さんたち被害者5人も、脅されてた
可能性はあるわよね」

由紀の言葉に、一度狙われたいずみのもとにも脅迫電話がかかっ
てきていたのを、昭太は思い出す。

「調べれば調べるほど、胸くそ悪い事件よね。早く解決させたいわ」

「おいおい。その言葉づかい何とかしようぜ。一応、女の子だろ」

役目が終わったのを確認し、昭太と由紀は自動ドアから外へ出る。

「大きなお世話よ。これくらいしなきゃ……」

突然、由紀の言葉をさえぎる大きなエンジン音が、後ろから迫ってきた。

同時に、車のライトがすぐ近くでふたりを照らす。

「由紀！」

迫りくる自動車から逃げようと、昭太は由紀の手を引き、そのまま歩道側へ倒れこんだ。

45・襲撃

強い衝撃が、背中から全身に伝わった。

激しい痛みが襲い意識がもうろうとする中、上にいるはずの由紀の状態を確かめようと手を伸ばす。

「昭太くん、大丈夫!？」

手が握られる感覚とともに、由紀の声が耳に届いた。

「……由紀こそ、大丈夫か？」

胸のあたりに力を入れ、訊ねる。ようやく聞き取れる声だったのか、耳をそばに近づけた由紀が、強く昭太の手を握る。

倒れたままの昭太の身体に、何かが近づく振動が伝わる。

「大丈夫ですか？」

聞き慣れない男の声がしたと同時に、身体がゆっくりと起こされた。

「すみません」

白のワイシャツに赤いネクタイをしめた男性に支えられて深呼吸をしたら、だいぶ楽になる。

「もう大丈夫です。ありがとうございます」

背中にまだ痛みはあるが、男性と由紀に心配をかけたくないので、ゆっくりと立ち上がる。

「昭太くん」

「大丈夫だよ、本当に」

「それにしても、すごい乱暴な運転でしたね。何を考えてるんだか」
車走り去った方角を見つめ、男性が吐き捨てる。思わず昭太は、由紀と顔を見合わせた。

どんな車体かは暗くてわからなかったが、ブレーキを踏むことなく、まっすぐに自分らに突っ込んできた。

ひいき目で見ても、明確な殺意がなければ、こんな細い道を猛スピードで走ることはないはずだ。

「どうしました？」

黙り込んだ昭太を、心配そうに見上げて男性が問いかけてくる。

「いえ。わざわざありがとうございます」

昭太が頭を下げると、男性はまだ心配そうな表情をしながらも、今来た道に戻って行く。

昭太は、男性の背中にお辞儀をして見送る由紀を見た。

あの車に犯人が乗っていると仮定すると、奴の狙いは由紀だろう。
彼女は覚えていなくても、犯人はそうは思わない。

犯人はどうやって、由紀の場所を特定した？

「昭太くん、本当に大丈夫？」

考え込む昭太を見上げ、由紀が訊ねてくる。

「ああ。心配ないよ」

両肩を軽く回し、昭太は笑う。しかし、由紀の表情はさえない。

「そんな顔するなよ。お前らしくねえぞ」

わざと大きな声を出し、目の前の肩をこづく。顔をこわばらせた
ままの由紀が、うなずく。

「さ、そろそろ病院戻らないとな。先生が心配するぞ」

「先生はいいけど……村上がねえ」

由紀がため息混じりに、空を見上げる。

「病院、来てたりしてな」

「やめてよ。戻りたなくなるわ」

身体に両腕を回し、由紀が大げさに身震いをする。昭太が声をあげて笑うと、由紀もおかしくなったのか、ようやく笑みを見せた。

案の定、正樹は白いシャツにGパンというラフな格好で、由紀を病室で待っていた。

しかし、軽い注意をしただけで、その場はおさまった。由紀が思った以上に元気だったことと、彼女が珍しく素直に謝ったからだろう。

「スーツ、汚れてるじゃないか。一体何やったんだ？」

時間外玄関の小さな自動ドアを通りながら、正樹が訊いてくる。

昭太は、通夜が終わってから戻ってくるまでのことを手短かに話す。

「……そうか」

正樹の顔が、とたんに陰しくなる。

「あいつ、間違いなく狙われてるよ。でなきゃ、あんなところで襲いはしないよ」

昭太の言葉を聞いているのかいないのか、正樹は腕を組み、じつと何かを考え込んでいる。

「何か、気になることでもあるのか？」

「ん？ …… ああ」

「おいおい。 ひとりで背負い込むのはもうなしだぜ」

昭太の言葉に苦笑いを浮かべた正樹が、選ぶように考えを口にする。

「犯人は、どうやって由紀や飯沼園子の居場所を特定したんだろうか？」

園子をあゆみから奪還したものの、由紀を呼んだ直後に彼女らが現れたことを、正樹は訝しんでいたと言っただ。

「盗聴器…… もしくは発信機でもつけていないと不可能だよな」

正樹が、真剣な顔でうなづく。

「明日、ほのかに由紀の持ち物を確認してもらおう。 それよりも……」

昭太も今、同じことを考えた。 もし、犯人が由紀の居場所を特定しているとしたら――。

今夜。

由紀を亡きものにせんと動き出すかも知れない。

「よし、俺が入るよ」

「南」

「こっ、けっこう強く打ってるからな。検査でもしてもらっさ」

とっさに受け身をとったのか、動かすのに不自由はないものの、痛みが少し強くなっている。

「わかった。念のため、小倉さんにも連絡を取っておくよ」

昭太はうなずき、正樹とともに今来た道を引き返す。

詳細な検査ではなかったが、幸い、昭太の怪我はたいしたこともなく、由紀がこの晩、再度襲われることもなかった。

46・ちいさな棘

「おはようございます」

いつものように、ほのかが新聞部の部室へ入ると、正樹と慎二が中央のデスクにあるパソコン画面を見ながら、話をしていた。

「おす、ほのか」

「おはよう」

思い思いの挨拶に軽く頭を下げて応えるが、いつもはすでにいるはずの昭太の姿が見当たらない。

「あら、南くんは？」

「南は今、相模市の病院にいるよ。午後から学校に来れるそうだ」

正樹が、夕べ起こったことを詳しく話すと、自身の身体が、急速に冷えていくのがわかる。

「昼間は見舞客や患者が行き来するから心配ないけど、問題は夜だよな」

「南が、小倉さんと一緒に夜はついてくれるって言ってる。あいつ、一人暮らしだからな」

正樹と慎二は冷静に話をするが、恐怖に身体がすくんでいるのは、その輪に入れない。

「ほのか、どうした？ 顔色悪いぞ」

慎二が心配そうにほのかをのぞき込む。

「ごめんなさい。ちょっと、驚いただけ」

「おいおい。そんなことで驚いてちゃ、これから先大変だぞ」

おどけた口調ながら、慎二の言葉は、ほのかの胸に小さな棘^{とげ}となつて刺さる。

由紀の命が狙われているというのに、どうしてふたりはそんなに冷静でいられるのだろうか？

「……ほのか、聞いてるか？」

「ごめんなさい。何？」

正樹の強い口調が、ほのかを引き戻した。

「由紀の持ち物を調べて欲しい。恐らく、犯人が場所を特定するために、何かをしかけているはずだ」

「はい」

ほのかがうなずくと、正樹と慎二はまた、今後の話を詰めていく。行方不明になっている飯沼園子に関しては、慎二が調べを進めるようだ。正樹は、犯人像に迫るために三井あゆみの交友関係を再度

洗い直すという。

話を聞くほのかの心に、また、ゆっくりと不安が忍び寄る。

乾も由紀も、今の自分を大切にするように言ってくれた。けれど、4人のように動けない自分は、みんなの足手まといなのではないか――そう、感じている。

どうして自分は、この場所にいるのだろうか？

ほのかの思考をさえぎるように、チャイム音が部室にひびいた。

「よし。今日の動きはこれで頼む。何かあったらすぐに連絡をくれ」

正樹の言葉で、いったんは解散となった。

「ほのか」

教室へ戻ろうとしたほのかを、正樹が呼び止める。

「何か、心配ごとでもあるのか？」

心配そうにほのかを見る正樹の目には、くつきりと疲れが浮かんでいる。

「大丈夫。村上くんこそ、無理しないでね」

やや強引に話を切って、ほのかは足早に部室から出た。

正樹に心配をかけたくない、というよりも、自身の不安を看破さ

れるのが怖かったから――。

1日の終わりを告げるチャイムが鳴り、クラスメートたちが思い思いに立ち上がる。

これから部活へ参加するもの、家へ帰るもの。もしくは友達同士で遊びに行くもの、様々だ。

革のカバンを手に取り、その流れに逆らわないように廊下へと出る。

これだけの人間がいるのに、ほのかに話しかけてくる人は誰もいない。

ふと、一昨日の夕方、独りで街を見下ろしていた江頭透子の姿が。そして。

『それは本人が招いたことよ。私たちにはどうしようもできないわ』
クールに言い切った由紀の言葉も。

確かに透子の孤独は、自身で招いてしまったことなのかもしれない。

でも、親が裕福という理由だけで、仲間外れにされてしまった自分分は？

その傷を引きずり、今でも孤独にさいなまれている自分を、由紀

や正樹らはどう感じているのだろう？

昨日はどうかやり過ごした由紀との時間も、今日は乗り切れる自信がない。

うつむいたまま歩くほのかの視界が、何かにぶつかって揺れた。

倒れそうになった身体を引っ張るように、誰かの手がほのかの腕を引き上げる。

「すみません。……乾先生」

「何ボーっと歩いてるんだ？　これだけ人がいる所じゃ危ないぞ」

やわらかな笑みを浮かべる乾を見上げたほのかの目の奥が、急に熱くなる。

「あ、先生。何泣かしてんですか？」

近くにいた男子生徒が、涙をこぼすほのかを見て、乾をはやしたてる。

「勝手に言ってなさい。ほら、部活に遅れるぞ」

運動部の生徒なのか、乾の言葉に「はい」と低い声を出して立ち去る。乾はそのままほのかを促し、すぐ近くの保健室へと入っていく。

「先生……はいませんね」

中の様子を探った乾は、ほのかを目で招き入れた。

「すみません。ご迷惑をかけてしまって」

白いハンカチで目じりを拭い、ほのかは頭を下げる。

「いや、気にするな。それより、何かあったのか？」

後半の低い声に、ほのかは思わず顔を上げた。夕焼けを背にする乾の真剣な眼差しが、ほのかを捉える。

胸の鼓動がなぜか大きくなっていくのを、ほのかは全身で感じていた――。

47・見張っていた『モノ』

胸の鼓動にすべてを支配されたほのかの頬が、ふいに熱くなる。

「俺の顔を見てすぐに泣きだすんだ。気にならない方がおかしいだろう?」

乾の心配そうな声が、胸の奥をくすぐる。生まれて初めての感覚に、ほのかはどう応えたらいいのかわからない。

「北村を見ると、死んだ娘を思い出す。俺がもつと話を聞いてあげれば、何も言わずに死ぬこともなかっただろうか、とか、そんなことばかりを。だから、何かあったらひとりで悩まずに、話してほしいんだ」

乾の言葉がまた、ほのかの涙腺を優しく刺激する。

何でもない——由紀や正樹たち仲間にも言える言葉が、出てこない。

ほのかは名前や事情を出さずに、自身の境遇と重なる透子を救うには、どうしたらいいのかを思わず訊ねていた。

「……話を、聞いてあげるだけでもいいと思うんだ」

少しの沈黙の後、乾が口を開く。

「でも、その人は誰も寄せ付けようとは思いません。自分の中に、じっと閉じこもって」

背筋をのばし、踵を返した透子の後ろ姿が浮かんでは消える。

「じゃあ、何も言わずに寄り添うことから始めたらどうだ？ その人が必ず行くところに北村も行くんだ。そして、ただ一緒にいるだけでもいい。時間はかかるが、いつか話をしてくれる日が来るはずだ」

「寄り添う……だけで」

ほのかのつぶやきに、乾が笑みを浮かべてうなずいた。

「娘にも、そうしてやればよかったと俺は後悔しているんだ。せめて、そばにいてやれば、ってな」

「先生は、娘さんと一緒に暮らしていたんじゃないんですか？」

ふと浮かんだ疑問を、乾に投げかける。一瞬、乾の表情がこわばったかに見えたが、すぐに寂しそくにうなずく。

「ああ。実は離婚してな。12年前から独りものさ。……これ、みんなには内緒だぞ」

口を少しすぼめ、人差し指を立てた乾の表情がおかしくて、ほのかは思わず吹き出す。

「やっと笑ったな」

ほっとしたような声に、ほのかは思わず乾を見た。

「月並みな言い方だけど、笑ってる方がいい。あまり思い詰めた顔をしてると、新聞部の連中がまた心配するぞ」

「……はい」

「また何かあったら、いつでも言ってきたさい。相談料は無料だぞ」

最後の言葉に今度は笑いのつばを刺激され、言葉を出せずにほのかはうなずいた。

「あら、こんなところでどうしたんですか？ 先生」

扉が開く音とともに、1年の時によく世話になった、恰幅のいい中年の保険医が入って来た。

「人生相談ですよ、矢沢先生」

「久しぶりね。最近、ここに来なくなっただけど、添嶋さんのおかげかな？」

「添嶋？」

驚いたような表情の乾が、矢沢を見る。

「そう、添嶋由紀ちゃん。あの子がずっと北村さんと仲良くて。でも、つい最近急に転校しちゃったの。私好きだったのよね。さばさばして」

「由紀、言っていましたよ。いつか先生に襲われるんじゃないかって」

ほのかの言葉を待たずに、矢沢が笑い飛ばす。しかし乾だけはじつと、何かを考えているように押し黙っている。

「あら先生、どうかした？」

「いえ、ちょっと急用を思い出したんで。それじゃ北村、また明日な」

「はい。ありがとうございました」

頭を下げたほのかに、乾が軽く手をあげて去っていく。

「いい男よね」。添嶋さんといい乾先生といい、あなたの周りにはいい人ばかり集まるのね」

矢沢の言葉にうなずきながら、乾の去った方を見つめる。

由紀の名前を出した途端、黙ってしまった乾が気にかかるが、彼女のことだ。きっと、自分の知らないところで乾に迷惑をかけたのだろう。

「今度遊びに来るように伝えておいてね」

満面の笑顔で手を振る矢沢に会釈して、ほのかは保健室を出て玄関へと向かった。

「ちょっと、冗談よしてよね〜」

ベッドの上で退屈そうにしていた由紀に矢沢のことを話すと、彼女は声をあげて笑った。

「あ、そうだ由紀。持ち物見せてくれる？」

「持ち物？」

訝しそうに見上げてくる由紀に、ほのかは今朝、正樹が言っていたことを話す。

「場所を特定する何か、ねえ。あいつも考えすぎじゃない？」

「でも、今朝の口調だと南くんも同じことを考えているみたいよ。夜は小倉さんと一緒に、病院を見張るって」

「だから今朝、私とおんなじ恰好で病室来たのね。昨日は『大丈夫』って言ってたのにおかしいと思った」

ベッド脇のテーブルから、由紀が入れてあった物を順次取り出した。

ほのかはロッカーを開け、かけてあった青陵高校の制服に手を伸ばす。すると。

「破れてるじゃない」

紺のブレザーのあちこちが破れ、えんじのネクタイを止めるボタ

ンの糸もとれかかっている。

「あら？」

ネクタイとブレザーを手に取ったほのかは、襟の裏側に何か突起物があるのを感じた。

「由紀。このブレザー、中に何か入ってるの？」

「え〜？」

間の抜けた声で、物をつぶさに見ていた由紀が振り返る。

「ほら。ここ」

由紀がほのかからブレザーを引き取り、襟に手を入れる。

「ほのか。看護師さんからはさみ借りてきてくれる？」

こわばった表情の由紀にうなずき、すぐ近くのナースステーションからはさみを借りる。

紺の布地に、慣れた手つきで由紀がはさみを入れる。軽くふると、リノリウムの床に、何かが落ちた。

「何、これ？」

拾い上げたほのかの手には、黒い、小さな丸い機械のような物が、嫌な音を立てて転がっていた――。

48・同行

「あゆみの遺品……ですか？」

授業が終わってすぐに小倉と合流した正樹は、先日、由紀と調査した際に着た上下グレーのスーツに、今度はきちんとネクタイを締めて、告別式が終わったばかりの三井あゆみの家にいた。

「はい。犯人につながる手がかりが、少しでも残っていればと思います」

驚くあゆみの父に、小倉が説明をする。

父親の顔が、怒りに震えた。ようやく17歳になった娘を、無残に殺された無念の色が、くっきりと浮かんでいる。

「わかりました。どうぞ」

白のワイシャツに黒のスラックスを穿いた父に続き、2階の奥にあるあゆみの部屋に通される。

白を基調にした壁に、ピンクのカーテンとカーペットが映える。家具は木目調で統一され、やわらかな印象だ。

「終わりましたら、声をおかけ下さい」

正樹は、階下へ戻る父を見送った小倉とともに合掌する。

そのまま手袋をつけ、あゆみの学習机の引出しに手を伸ばす。

中はきれいに整頓されており、それらをよけて奥までのぞくが、特に変わったものはない。

すぐ隣の引出しをあける。すると、たくさんのノートが一番下に、鍵付きの日記帳らしきものがあつた。しかし、なぜか鍵がかかっていない。

正樹は1ページ目をめくる。

『6月21日 部に退部届。もう、あんなところではやっていけない。人をひとり殺しておいて、学校は逃げ腰だ。詩織ちゃんがかわいそう』

ギャル文字を使わない丁寧な字が、時を経ることに少しずつ変わっていく。そして。

『4月1日。三原さんに『つきあって欲しい』と言われた。ちよーHappy あの人がきつと、私の人生を明るく、素敵なものに変えてくれる』

『4月7日。三原さんからTe1。園子を脅せば、金がもらえるとやってきた。あいつも透子たちと同じ人種。私が地獄におとせばいいんだ。そろそろお金もないし、いい小遣いになる』

「三原……という人物が、犯人なのでしょうかね？」

洋服ダンスを調べていた小倉が、正樹の手元をのぞきこむ。

「江頭透子らを襲った人物と同一人物かはわかりませんが……少な

くとも、三井あゆみに手をかけたのは、この男でしょう。そちらは？」

「特別、これといったものはないようです。制服はまだ、警察にありますしね」

本来の目的は、由紀や園子の居場所を特定したものへの手がかりを探ることだが、ここには何もなさそうだ。

日記を手に、正樹はすぐ下の引出しを開けた。すると、薄いピンクの携帯電話が1台、無造作に置かれてあった。

「小倉さん！」

「携帯電話……。確か彼女は、すでに1台所有していますよね」

見上げてきた小倉に、正樹はうなずく。由紀や慎二のいるところで、発信・着信履歴や送受信しているはずのメールがすべて削除されているのを見ている。

正樹は小倉と顔を見合せ、薄いピンクのふたを開けた。

しかし、バッテリーがとうに切れたのか、その画面は暗いままだ。

小倉がすぐに、その引出しの中を探る。すると、長いコードでぐるぐる巻きにされた充電器が出てきた。

机の横にあるコンセントに差し、電源を入れる。かわいいキャラクターの待ち受けが現れるがそれにかまうことなく、すぐに履歴を確認する。

友達の名前か。スクロールすると、知らない名前がほとんどだ。

しかし、ひとりだけ、よく知っている名前を見つける。

正樹は思わず息をのんだ。まさかこのふたりに接点があるとは思えなかったからだ。

しかしすぐに気を取り直し、胸ポケットにしまっていた携帯電話を取り出した。

名前をメモし、履歴を閉じた後にすぐ一言付け加えて、昭太に送信する。

「ここには何もなさそうですね。ご家族に話を訊きましょうか」

部屋を見回した小倉の言葉に、正樹はうなずいて階段を降りる。

「どうもありがとうございました。お話、伺ってもよろしいでしょうか？」

階下で心配そうに見上げていた父親に、小倉が問う。無言のまま通されたダイニングには線香の香りがただよい、式場に飾ってあったであろう供物や花が、乱雑に置かれている。

「奥様は？」

「娘の祭壇のある部屋で伏せております。もともと、線の細い奴ですから……」

娘の突然の死を、受け入れられないのだろう。

「お話、というのは？」

ベージュのカバーがかかったソファに腰を下ろした正樹らに、父親がお茶を入れてくれる。

湯気が高くあがる水色の湯呑みの隣に、正樹があゆみの携帯電話を置いた。ガラスとぶつかる冷めた音だけがひびく。

「これは……」

「あゆみさんの机の一番下の引出しにあったものです」

丸みを帯びたピンク色の物体を、父親がそつと持ち上げる。

「あゆみさんが亡くなった時に所持していた携帯電話を見たことがない、と仰っていましたが、本来彼女が持っていたのはこの携帯です。すね？」

「はい。高校入学時に妻と話し合って買ってやったものです。なのに、なぜ……」

携帯電話を強く握りしめ、しぼりだすように、父親がつぶやいた。

「あゆみさんには、つきあっていた男性の影があったようなのですが、心当たりはありませんか？ 最近、ずいぶん身なりがよくなつたという話も聞いておりますが」

父親が、小倉の顔を凝視した。その目には驚きと、やるせなさ

同居しているように正樹には思えた。

「……確かに、最近ずいぶん垢ぬけたと思ってはおりましたが、何も、聞いては」

父親が言葉を切ったまま、うつむく。

正樹は小倉と顔を見合わせた。どうやらあゆみは、家族に何も話していなかったようだ。

父親の口から、嗚咽が漏れた。こらえきれない声が、父の無念の大きさを物語っている。

正樹も小倉も、何も言えずに肩を震わせる父親を見つめていた。

49・死者からの手紙

しばらく部屋にいないほのかの代わりに、資料のチェックをしていた昭太の携帯に、正樹からのメール受信を告げる電子音が鳴った。

「はあ？　嘘だろ！？」

だれもいない部屋で、思わず昭太は叫んだ。というのも、正樹のメールに

『三井あゆみと片山に交友関係の可能性あり。至急、裏づけと確認を』

と記されていたからだ。

昭太は昨日、あゆみの通夜が行われていた式場の様子を思い出そうと、目をつぶる。

しかし自分は、あゆみの取り巻きである絵里子と加奈に気を取られていて、周りを見ていなかった。

そこで昭太はすぐ由紀に連絡を取る。

『昭太くん、ちょうどよかった。あのね、私の制服に……』

「悪い。今それどころじゃないんだよ。昨日さ、三井さんの通夜に片山来てたか？」

電話の向こうから、話の腰を折られた由紀の不満そうなため息が

聞こえたが、いずみの名前を出すと、今度は驚いたような声が漏れた。

『私も人を捜してたから。でも、来るなら彼女、昭太くんにかしら言っはずじゃない』

「いや、昨日は俺が帰る時にしか会ってないし。村上も特に変わったことはなかったって」

電話の向こうで、由紀が息をのむのがわかる。昭太も、どう言えはいいのかわからない。

まさかこんなところで、あゆみといずみが繋がっている可能性が浮上するとは――。

『……とにかく、本人に確認するしかないんじゃないの？ アイチエリーやってるんなら、江頭さんたち被害者や、飯沼さんとも交流あったっておかしくないわけだし』

今さらだけど、とつぶやいた由紀の言葉に、昭太は急所を突かれたような脱力感を覚える。

電話を切って、考えてみりゃわかるだろ、と自身にツツコミを入れるが、そうしたところで何も動きだしはしない。

とりあえず、いずみの練習が終わったら一刻も早く、事実関係を確認しなければならない。

しかし、昭太の心は一気に重くなる。

親しくしていた友達が1年前に自殺したことを、その理由をつい最近知った。それに追い打ちをかけるようなことを彼女に訊かなければならないなんて、『酷』以外の何物でもない。

どう、切り出せばいいのか。交友の事実だけを訊いて、そのままやり過ごせるとは、どうしても思えない。

昭太は、ほのかがまとめておいてくれたあゆみの資料に目を通す。

『相模市立第2中学校在学中にアーチェリーを始める』とある。

昭太はいずみの資料にも目を通すが、これといって共通事項があるわけではない。中学の時、幾度も同じ大会に出場したくらいだ。

このふたりがどうやって、電話のやり取りをすることになったのか。そもそもいずみは『携帯電話不必要論』の持ち主だから、おそらく自宅の電話とのやりとりになるだろう。

通っていたクラブも学校も違う。どうやったら繋がりができるのか、皆目見当がつかない。

あれこれ考えても始まらない。本人に……訊くしかないか。

昭太は深く、大きなため息をついて資料を片づけると、部室を出た。

「お待たせ」

いつものようにスポーツ棟の前で待つ昭太の前に、今日はポニー

テールにしたいずみが姿を見せた。

「お前、気分で髪型変えるの？」

「うん。集中できるかできないかで考える。今日は、あまり、ね」

だから、ポニーテールで気持ちをしゃきつとさせたのか。

昭太はまた、憂うつな気分に襲われる。ただでさえ自身と接点のない少女とのかを訊かなければならないのに、いずみの精神状態が揺れていては……。

「あれ？ 何だろ？」

昭太の後ろでげた箱を開けたいずみが、声を上げる。

「どうした？」

振り返ると、いずみの手に白い封筒のようなものがあつた。

『片山いずみ様』

パソコンで打たれた無機質な文字が、中央に印字されている。差出人の名前は、ない。

不安そうに、いずみが昭太を見上げた。

受け取り、昭太が封を切つて中身を確認する。

「お話ししたいことがあります。今日、練習が終わったらグリーン

パークで待っています。……三井、あゆみ」

最後まで文面を読み終えた昭太の身体が、震える。

自分の言葉が信じられなくて、昭太はもう一度、便せんの一番下の名前を見つめた。

殺されたあゆみがなぜ、いずみを呼び出す!?

「あゆみちゃんだ。どうして、こんなところに手紙なんか」

いつもと変わらないいずみの声に、昭太は思わず問いかける。

「この子、知ってるのか？」

「うん。中学の時、県のアーチERY協会主催の合宿で同室になってからね。たまに電話したりしてたけど、私が留学してからは、全然」

あつさりと答えるその様子からは、特に変わった様子は見受けられない。

まさかいずみは、あゆみが殺されたことを……知らない？

知らないとすれば、昨日の通夜に来なかったのも合点が行く。しかし。

「連絡あるなら、電話してくれればいいのに。変なの」

「お前、まさか行くつもりなのか？」

手紙をしまい、靴を履いて玄関を出ようとしたはずみに、昭太が声をかけた。

「どうしたの？ 南くん。そんなおっかない顔して」

振り返ったはずみの顔が、少しこわばった。

まさか、こんな形で告げることになるとは思わなかった。しかしこれはきつと、あゆみの名をかたった何らかの罠だ。止めないわけにはいかない。

「三井さんは3日前に……殺されたんだよ」

50・殺人予告

「あゆみちゃんが……殺された？」

いずみの顔から、血の気がひいていくのが暗がりでもわかる。

昭太は、うなずくことしかできない。

「どうして！？ どうしてあの子が殺されなきゃならないの？」

静かな玄関に、いずみの悲痛な声が響く。

「おい、どうした？」

見回りの時間なのか、警備員のおじさんが黒の制服を着て近づいてくる。

「いえ、何でもないんです。すみません。片山、行こう」

身体を小刻みに震わせ、うつむいたままのいずみの背中にそっと手をまわし、昭太は校舎から外へと出る。

門を出たところで、いずみの足が止まった。

「私の……せいなの？」

「え？」

「あゆみちゃんが殺されたのは、私のせいなの？」

いずみが目に涙をためて、昭太を見上げてくる。

「何言ってるんだよ、お前」

「じゃなきゃ、何であゆみちゃんの名前で私が呼び出されるの？
誰に？」

いずみが、自らを覆い尽くしているであろう感情とともに叫んだ。

誰に？ 何のために？ 昭太にだって答えられない。

あゆみが殺されたのは、園子を脅していた一件が頓挫して、犯人の役に立たなくなっただからだと昭太は思っていた。もちろん、正樹をはじめとした他のメンバーもだ。

何も言わない昭太に業を煮やしたのか、いずみが踵を返して走り出す。

「おい！」

後を追った昭太は、いつも乗る学校前のバス停を過ぎて、30メートル先の信号のところでようやくいずみの手を取った。

「どこ行く気だ！？」

「決まってるでしょ。グリーンパークよ。私がこの目で、あゆみちゃんの名をかたった奴を確かめてやるの！」

自ら畏に飛び込むというのか——冗談じゃない。

「おい、南。片山もどうしたんだ？ そんな大きな声で」

後ろから、白のポロシャツと紺のジャージ姿の乾が、自転車に乗って近づいてきた。

「乾先生」

昭太といずみの声が、重なる。しかしいずみはすぐにうつむいたまま、何も話さない。

「仲がいいのは結構だが、喧嘩は人のいないところでやんなさい。わかったな」

昭太といずみを交互に見つめ、乾が立ち去ろうとする。ところが。

「先生！」

いずみが顔をあげて、乾を呼び止めた。

「どうした？ 片山」

「つきあって欲しいところがあるんです。一緒に、来ていただけますか？」

いずみの突然の申し出に、乾が目を見開き、昭太を見た。

グリーンパークの管理人に無理やり門を開けてもらい、昭太はい

ずみ、乾とともにアーチェリーの練習場へ向かった。

「いったい、どうしたって言うんだ？ 片山」

乾の問いに、いずみは答えない。ただまっすぐ前を見て先頭を歩いていく。

3人の両脇にある木々が、風に揺れる。葉ずれの音が、昭太たちを深い闇へと誘うような気がするの、考えすぎだろうか？

曲がりくねった小道を過ぎ、大きな広場のような所へと出た。

少し先に見える金網の向こうに整然と立っている的が、かろうじて残る赤い光に照らされている。

「誰も、いないようだぞ？」

隣で、乾が不安げにつぶやく。

「いや。一番向こうの的の前に、誰か立ってます」

いずみの言葉に昭太は目をこらし、前方を見る。

確かに、何者かが的の前に立っているように見える。しかし、何やら様子が変だ。

「片山、先生とここで待ってるよ。俺、ちょっと見てくるからさ」

胸がざわついた昭太は、いずみを制止する。ところがいずみは首を振り、一歩前に出た昭太の隣を歩く。

「ちょっと……置いて行かないでくれよ」

乾が情けない声を出して、後をついてきた。

一歩ずつ進むたびに、昭太の胸の音が大きくなる。

どんなに遠くても、草が鳴く音が近づけば気づきそうなものなのに。的の前にいる人物は反応を示すどころか、見動きひとつしない。

「先生。片山とここで待っててください。俺、ひとりで見てきますから」

いずみを無理やり乾に押し付け、昭太は、一番最後の的に向かつて叫んだ。

「おい、片山いずみに手紙よこしたのは——」

最初の的に近づいた昭太の足が、止まった。

「どうした？ 南」

「先生！ 片山！ こっちに来るな！」

駆け寄ってきたふたりを制するが、その直後、いずみの悲鳴が辺りに響いた。

的の前に立っていたように見えたのは——左肩に矢が刺さり、まるで見せしめのように磔はりつけにされた、少女の死体だった。

しかもその少女が穿いているスカートは、青陵高校に転校した由紀と、同じものだ。

不揃いに切られた髪、怪我をしたのか、足元には包帯らしき白いものが巻かれ、その先端は風になびいている。

（まさか……飯沼園子？）

考えをめぐらす昭太をあざ笑うように、その胸についていた紙が風に舞い、昭太の足元まで飛んで来た。

『片山いずみ、次こそは貴様の番だ』

いずみへの脅迫……いや、予告のためだけに、園子らしき人物を殺し、あゆみの名をかたって彼女を呼び出したのか！？

言い知れぬ怒りが、胸にうずまぐ。感情の赴くまま、昭太はその紙を力の限り握りしめた。

51・無力

辺りはすっかり闇に同化し、グリーンパーク内のアーチエリー練習場を、ナイター用の電灯が照らしていた。

死体発見現場となった一番奥の的の周りにはブルーシートが幾重にも張られ、何台ものパトカーの赤色灯が規則正しく回っているのがわかる。

小倉から連絡を受けた正樹と慎二は、警察手帳を提示した小倉の後についてシートをめくり、隅に座り込んでいる昭太に声をかける。

「南」

「すまないな、夜遅くに。由紀とほのかは？」

「連絡してあるが、来ないように言っている」

正樹を見上げる昭太の目はどこか所在なさげで、顔色もすぐれない。

「片山と先生は？」

「あつちで事情聴取受けてるよ。犯人が、片山を狙ったのは明らかだからな」

正樹の問いに答える最後の声が、いつになく低い。普段はおおらかな昭太が、怒っている証拠だ。

「死体の身元は割れたのか？」

正樹の後ろにいる慎二が、ややかすれた声で訊ねる。ただでさえうつむき加減だった昭太が頭を抱えて、さらに下を向く。

「……飯沼園子。さっきお母さんが確認したよ」

昭太の声が切れないうちに、背後で、ブルーシートが揺れる音がした。怒りにかられた慎二が、腕を振り回したのだろう。

「みなさん」

シートをめくり、小倉が入ってくる。

「鑑識の話によると、飯沼さんの死因は、胸部圧迫による窒息死だそうです。詳しい状況は司法解剖と今後の捜査にもありますが、恐らく、三井さん同様、他の場所で殺されてからこの場所に運ばれたものと思われます」

「じゃあ、肩に刺さっていたあの矢は……」

昭太の問いを途中で引き取り、小倉が続ける。

「南くんが言っていたように、殺人予告と見て間違いはないでしょう。死者がふたり出ていることもありますし、今後、片山さんの警護は我々警察で担当することが先程決まりましたので、よろしくお願いします」

「何だよそれ？ 俺たちじゃ役不足だったってえのか？」

慎二が、小倉に詰め寄る。

「そうは言っていないせん。ですが、あなたたちの安全面も考慮しなければならぬ段階まで来ているんです。犯人は片山さんのみならず、添嶋さんにも狙いをつけているでしょう？」

「そんなこと、こうして働いてる以上は百も承知だ。由紀だって同じことを考えてるさ」

慎二が以前、『自分の身が可愛くて、こんな仕事はやってられない』と言った由紀の気持ちを代弁する。

もともと、身の安全が保障されていない中での調査だ。由紀や慎二はもちろぬ、ここにいる正樹や昭太、ほのかにだってそれなりの覚悟はできている。

1年のつきあいで、それをわかっている小倉は、何も言えずに視線を落とす。しかしそこへ、坊主頭のいかつい顔をした小倉の先輩、深沢が口をはさんできた。

「そうは言うけどな、お前らがふたりの対象者にばっくれられたあげく、こんなことになってんじゃないかねえか。その責任を、誰がかぶってると思ってるんだよ」

「……それは」

慎二が言いかけて、唇をかみしめる。

悔しいが、深沢の言う通りだ。

すでにあゆみと園子を殺害され、市民からの批判はすべて、警察へ向いている。

万が一いずみが犯人の手に落ち、殺害された場合も同様だ。いくら警視庁直属の調査機構の人間とはいえ、未成年である正樹たち5人に、責任能力はない。

「わかつたら、おとなしくしてろ。何もできないガキがいきがってんじゃねえ」

「慎二！」

怒りにかられ一歩前に出た慎二の肩を、正樹は抑えた。

小馬鹿にするように鼻で笑った深沢が踵を返し、シートの向こうへと消える。こちらを気づかうそぶりを見せながらも、小倉が後に続いた。

「……悪い。俺が、片山に三井あゆみが殺されたことを言っちゃまったから」

「起こってしまったことは仕方がない。南、そんなに自分を責めるな」

膝を折り、昭太と同じ目の位置で正樹は諭す。しかし、うつむいたままの昭太は手を強く握りしめ、何も答えない。

「つくしゅう！」

慎二が、近くにある木に怒りをぶつける。

犯人に怒り、自身を悔いているふたりにかける言葉が、見つからない。

正樹は思わず、空を仰ぐ。目に映る漆黒の闇が、正樹の心をもゆっくりと侵食していった。

52・原動力

飯沼園子の死体が見つかったから、2日が過ぎた。

結局、いずみの警護は警察が担当することが正式に決まった。上層部からはいずみへの接触禁止令が出され、犯人の手がかりを得るために必要な調査書類も没収された。

いずみはあれ以来、学校を休んでいる。昭太にも連絡はないそうだが、恐らく、警察が家の周りを見張り、外出はおろか、外部との接触すらできない状態にあるのだろう。

入院している由紀のもとにも警察が張りついている。身動きができなくてストレスがたまる、と、この前のことを報告しに行った小倉に、さんざん愚痴をこぼしたらしい。

大会まで、あと10日を切っている。いずみの命が狙われていることを知った乾は、万が一を考え、彼女をレギュラーから外したと、新聞部に知らせてきた。

「彼女の可能性に賭けていたんだが……残念だよ」

応対した正樹に、乾は心底残念そうにつぶやいた。

アーチエリー部の特集号編集のために部室にいても、正樹はもちろん慎二も昭太も、そしてほのかも、手は動かず、それぞれの思いの中に沈んでいる。

そんな重たい空気を飛ばすかのように、突然、ドアが勢いよく開

いた。

「ただいま……っと」

「由紀」

入院中のはずの由紀が、白のシャツに黒のジーン姿でひょっこりと顔を出した。

「お前、まさかまた無理やり外出許可取ったんじゃないだろうな？」

三井あゆみの通夜の日、事後承諾メールを勝手によこされた正樹は問う。

「まさか。退院してきたのよ」

「退院……って。もう、大丈夫なの？」

廊下側にいたほのかが、由紀に近づく。ほのかには笑顔でOKサインを出した由紀が、真剣な表情で正樹へと近づいてきた。

「私、明日から青陵学園に復学するから」

「何？」

突然の言葉に驚いて、由紀を見下ろす。しかし彼女は正樹から目をそらさずに続けた。

「まだ、やり残したことがあるじゃない。それを片づけるまで、終わらせるわけにはいかない。でしょ？」

「お前、本気で行ってるのか？　俺たち調査からはずされたんだぞ」

正樹の横に並んだ慎二が、半ばあきれた声で言った。

「だからおとなしくしてろ、っての？」

少し荒くなつた由紀の口調に呼応するように、慎二も乱暴に答える。

「しょうがねえだろ。俺たちがミスしたら、全部の責任は警察に行くんだからさ」

「何よ。小倉さんをアゴで使うことしかないペーペーに言われたこと真に受けて。情けないったら」

最後の言葉に嫌味をこめて言い放った由紀に、慎二がつつかかっ
ていく。

「何だとてめえ。もう1回言ってみやがれ！」

「お前ら、いい加減にしろ！」

慎二と由紀の間に、正樹は割って入った。

慎二を抑えた昭太に目配せし、由紀と向き合う。

「由紀。お前の気持ちはわかる。だがここで俺らが動いて片山に何かあつたらどうする？」

「責任、責任って言うけどね。じゃ、本人の気持ちはまるで無視なわけ？」

「本人の……気持ち？」

由紀の言っている意味がわからず、正樹は、振り返った昭太と顔を見合わせた。

すると由紀が突然、ドアへ近づく。

「入ってきなよ」

廊下に向かって声をかけた由紀の後ろから、白のジャージ姿のいずみが顔を出した。

「……片山。お前、どうしてここに？」

「玄関でうろろしてたとこ、とっ捕まえたのよ」

一見、いつになく動揺している昭太の問いに答えた由紀に、ぎこちない笑みを浮かべていずみがうなずく。

しかしその目は真っ赤に腫れて、何日も泣いたことをくつきりと表していた。

「出てきて大丈夫なの？」

隣に立つほのかが、訊ねる。

「警察の人は一切外に出るなって言ってたんだけど……まいてきち

やった」

「まいてきた？ …… あんた、意外と大胆だな」

心底驚いたといった口調で、慎二がつぶやく。

「このままずっと、家に閉じこもっていた方が自分のためにも、みんなのためにもいいってことはわかってるの。でも」

「……でも？」

「私が1日中家に閉じこもってたって、犯人が捕まらない限りは何も変わらないでしょ。それどころか、また、違う人が巻き込まれるかもしれない。だったら、私が矢面に立ってやろうって、決めただ」

訊ねたほのかの顔を見てからこちらを向いて、いずみが言った。

まっすぐ前を見るいずみのまなざしに圧倒された正樹は、思わず息を飲んだ。

普通、そんなことを考える人間はいない。自分が狙われていると知れば、自分が助かるために、あらゆる手段を講じて保身に走るはずなのに。

なぜ、彼女はそこまでする？ 彼女をかり立てているものは何だ？

「……詩織さんの、ためか？」

昭太の問いに、いずみはあいまいにうなずく。

彼女の心の奥底にある『何か』が、この事件を解決する重大な鍵になる。

それを抵抗なく解きほぐすのは、ずっと一緒にいた昭太にしかできないことだろう。

ならば。

「わかった。俺たちが全面的にバックアップしよう。その代わり、片山に頼みがある」

「……頼み？」

問い返してくる声に戸惑いの色を浮かべたいずみの目を見たまま、正樹ははっきりとうなずいた。

53・覚悟

突然の申し入れに、ほのかの隣に立ついずみが、すぐ目の前にいる昭太に視線を移した。

「どうするつもりだよ？」

振り返った昭太も、不安そうな表情をしている。

「片山が知っていることを全て話して欲しい。その代わりと云っては何だが、こっちも片山が知りたいことを全部話すよ」

「おい、お前……まさか」

慎二があわてた様子で、正樹といずみに目をやる。

「ほのか。片山を頼む。由紀、南も」

いずみとほのかを残し、正樹は3人を暗室へ呼んだ。

「まさかお前、俺たちのこと全部話す気じゃないだろうな？」

電気のスイッチを入れた慎二の言葉に、昭太も、そして由紀も驚いた表情で正樹を見つめる。

「訊かれれば、答えるつもりだ」

「ちよつと待てよ。俺らのことは校長しか知らない国家機密だろ？それを他人に話したらどうなるか……」

その先を想像したのか、顔をこわばらせた慎二が言葉を切る。

「でも、ここまで来た以上、私たちのことを話さずに彼女から話を引き出すのは難しいわよ」

息を吐いた由紀が、腕組みをしてつぶやく。

「……たぶん、俺たちが秘密にしてくれと頼めば、彼女は誰にも話さない気がする」

「どうしてそう言い切れるんだよ？」

少し棘のある口調で、慎二が昭太に訊ねる。

「彼女は今でも、死んだ詩織さんとの約束を守り続けてる。この前、彼女に取材しにきたカメラマンの人にも話さなかったことがあるんだ」

そう切り出した昭太が、2回目に詩織の家に行った時のことを詳しく話す。

「……源さんが詩織さんの家に？」

顔色を変えたのは、由紀だ。

「源さんって確か、お前の父親の……。何か気になることでもあるのか？」

「ちょっと……ね、後で話すわ」

言葉を濁してうなずいた由紀が、正樹から視線をそらす。

「本当に、話すのか？」

黙り込んだ由紀を横目で見て、慎二が不安そうに訊ねてくる。

「片山は自分の身の安全より、死んだ詩織さんとの約束を果たすためにここへ来た。責任を取る取らないよりも、由紀の言うように、彼女の意思を尊重して全力で守ってやるのが、俺たちの役目なんじゃないのか？」

慎二の目を見据え、正樹は言う。

言葉につまった慎二が、目をそらした。いずみの口の固さを口にした昭太も、何も言わない。

暗室を、沈黙が包む。ところが。

「村上くん」

ドアの向こうから、ほのかの声がした。

「どうした？ ほのか」

正樹が扉を開ける。すると入口近くに、いつになく真剣な表情を
した小倉が立っていた。

「……小倉さん」

「やはり、ここにいらしたんですね。片山さん」

いずみが、暗室から出た正樹の後ろに入り、小倉から身を隠す。そのいずみを守るかのように、昭太と由紀が正樹の横に並んだ。

「片山さん、戻りましょう」

小倉の呼びかけに、後ろにいるいずみは答えない。

間にはさまれたほのかが、心配そうに正樹を見上げてくる。

「村上くん、そこをどけてもらえませんか？」

いずみの反応がないことに業を煮やしたのか、小倉が近づいてきた。

一歩前に出た由紀を手で制し、正樹は小倉に向き直る。

「それはできません」

振り返った由紀の口の端がかすかに上がる。

「村上くん！ 何を」

正樹の言葉が意外だったのか、小倉が珍しく声を荒げた。

「この子は、自分が引き込もっていれば安全だとわかってますよ。でも、これ以上他人を巻き込んでしまうよりは自分が矢面に立つ、と覚悟を決めて抜け出して来たんです」

小倉の目に、動揺の色が浮かぶ。

「俺たちは、彼女の意を汲むことに決めました。もし彼女に何かあった場合は、俺が全責任を負います。どんな処分になっても構いません」

決意をこめて、もう一度小倉の目を見た。

正樹に気圧されたのか、青ざめた小倉が目を伏せる。

「そうだ。小倉さん、深沢さんに伝えてくれよ。ガキにしかできないことがあるってな」

突然、後ろから慎二が叫んだ。思いもよらない彼の言葉に驚いたのか、由紀と昭太が振り返る。

「んだよ、そんな目で見るなよ」

由紀との間に割り込んだ慎二が、照れくさそうに頭をかく。

「……あなたたち、自分が何を言っているのかわかってるんですか？ 片山さんを返してくれないのなら、僕は、あなたたちを公務執行妨害で逮捕しなければならなくなるんですよ」

小倉の言葉に、青ざめた表情でほのかにこちらを振り返る。

慎二も、昭太も正樹に不安そうな視線を送ってくる。

『公務執行妨害』 その言葉の重みが、3人を包んでいるのが容易

に見て取れた。

自分だけならどうなっても構わない。

いずみが覚悟を決めたように、正樹も覚悟を決めた。

しかし、彼らを……特に、ほのかを巻き込むことはできない。

言葉に詰まった正樹を見る小倉の目に、強気な姿勢が戻っているのがわかる。

どんな処分も受けると言った。警察に行くのは、自分ひとりです分だ。

正樹は大きく息を吐き、一歩前に出る。

しかし。

「やれるもんなら、やってみたら？」

それを制して言った由紀のひとことに、正樹はもちろん、他のメンバーの視線が集中した。

54・対立

「由紀、お前何言ってるんだよ」

一番最初に反応したのは、慎二だ。

「そうだよ。最初に調査を再開するって言ったの、お前じゃないか」

昭太も慎二の後に続く。確かに、由紀の言っていることは事実上の『敗北宣言』だ。

後ろにいるいずみが、動いた。

「添嶋さん、みんな。もういいよ。私が戻ればみんなに迷惑かけることは」

「バカ！……あのね皆さん。人の話は最後まで聞きなさいよ」

隣に立ったいずみを一喝し、呆れたように慎二らを見回して、由紀は小倉に向き直る。

「小倉さん。やれるものならやってみたらいいわ。そのかわり、今までのこと全部マスコミにリークするわよ」

小倉の表情が、一変した。

「由紀」

ほのかが心配そうに、前に出た由紀を見つめる。

「手の届かぬ学校での捜査を名目に学生をこき使っておきながら、必要なくなったらポイ。で、ちよつとでも反抗すればハイ逮捕。これを知ったら、マスコミは食いつくでしょうね。警察の不祥事は、一番おいしいネタなんだから」

「……脅し、ですか」

しぼりだすように、小倉がつぶやく。その顔はすでに血の気が無くなり、心なしか身体が震えているように見える。

「まさか。私らは義務を全うしたいだけよ。慎二くんも言ったでしょ？ ガキにしかできないことがある。片山さんがここに來たのが、何よりの証拠じゃない」

小倉の目が、見開かれた。怒りと恐怖がないまぜになった、今までに見たことのない顔だ。

「……わかりました。このことは、上の者に報告しておきます」

早口で言うと、小倉はいつにない機敏な行動で部屋を出て、乱暴にドアを閉めた。

若手とはいえ、警察とここまで渡りあってしまふ由紀の後ろ姿を、正樹は畏怖の念を込めて見つめた。

「おつかねえ女！ 俺、もうお前につつかかるのやめるわ。敵に回したくねえもん」

慎二のちゃかすような大声が、沈黙を破る。

「ペーペーのくせに、私に口で勝とうとするのが間違ってるのよ。まあ、誰かに指一本でも触れようもんなら、すぐに連絡するつもりだったけどね」

振り返った由紀が、小さく舌を出す。

「ま、上はそうそう手を出しては来ないでしょ。国家機密をばらされたら困るのはあっちだし」

「でも、力ずくで抑えられたら……」

ほのかが由紀に駆け寄る。

「大丈夫よ。『ハツタリ』だけじゃないもの。次の手は打ってますよ。ちゃあんとね」

「さっすが。我らが行動隊長だ。な、村上」

緊張が解けたのか、昭太の間の抜けた声に、慎二と由紀が笑い出す。

正樹も、肩の力が抜けた。頬が緩み、未だ心配そうなほのかにならずく。

「……あなたたち、一体」

ひとりだけ、不安そうな表情でいずみが正樹を見上げる。

「言ったとおりよ。ね、村上」

「ああ。俺たちは警察の下部組織に所属する、調査集団の一員さ。手の届かない学校で起きた事件を調査するのが目的なんだ」

由紀の言葉を引き取り、いずみに説明する。

「じゃあ、南くんが私についてたのは……」

「ある事件に君が巻きこまれたのを知って、護衛のためについてもらっていたんだ」

「そういうわけ。ごめんな。何だか騙したみたいで」

顔の前で謝罪ポーズを作り、昭太がいずみに頭を下げる。

「そうだったんだ。おかしいとは思ってたんだよね。あれから何もないのにずっと一緒にいてくれて。……まあ、次の狙いは私らしいけど」

最後の声音が落ちた。うつむきたいずみはしばらく何かを考え込んでいたが、顔を上げて正樹に向き直る。

「で、聞きたいことは何？」

部室の扉に鍵をかけ、デスクの中央に座るいずみをはさむ形ではのかと慎二が、向き合う形で正樹、昭太、由紀の順に腰を下ろす。

正樹は、今までの事件の経緯をいずみに説明した。

青陵学園の5人のアーチェリー部員が、次々に襲われたこと。

その犯人と交際していたと思われる三井あゆみが、事件に関わっていたとされる飯沼園子を脅していたこと。

話を進めるたびに、いずみの顔が悲しそうにゆがむ。

「その襲われた5人の名前って、わかるの？」

由紀がうなずいて、その5人の名前を告げる。

最後に江頭透子の名前が出たとき、ふいにいずみが視線を下げた。

「どうした？」

心配そうに昭太が訊ねる。隣にいるのかと慎二も、いずみに視線を移した。

「江頭さんは……どこに入院してるの？」

「相模市の市立病院よ。誰も、お見舞いに来ないんですって」

答えたほのかの最後の声が、かすかに震えている。

「連れてつてくれない？ 私、彼女に確認したいことがあるの」

いずみが再度顔を上げたとき、誰かの携帯電話が音を立てて震え始めた。

55・前へ

「悪い。俺だわ」

いずみの真正面にいた昭太が立ち上がる。

「はい、南です。……ええ、ここにいますよ。代わりますか？」

昭太の声が、少し低くなる。

「片山。お母さんから電話」

携帯電話を手で押さえ、昭太が振り返る。

ほのかと慎二にはさまれた形のいずみが、首を小さく横に振って『出ない』と意思表示する。

「片山さん、出た方がいいわ。警察がどう言っても来ようが関係ないけど、ご両親に心配かけちゃいけない」

いずみが、身を乗り出した由紀に視線を移す。

「そうだな。両親の許可もらってた方が、俺らも動きやすいしさ」

慎二が同調した。しゅしゅ、と言った感じでうなずき、いずみが立ち上がる。

「もしもし。うん、大丈夫。ごめんね、心配かけて」

昭太の携帯からは、特にがなりたてるような声は聞こえてこない。昭太と一緒にだけあって、冷静に対応してくれているのだろう。

「そこに警察の人いるんでしょう？ え？ 帰ったって？ そうなんだ。わかった」

そこまで言うのと、いずみが昭太に携帯電話を返した。すでに切れているらしい。

「警察の人、ウチから引き揚げたって言うけど……本当かな？」

「引き揚げた？ そりゃまたずいぶん早いな」

由紀の脅しが効いたか？ 正樹は念のため、パソコンを起ちあげる。

通りいっぺんの画像が出たのち、パスワードを入れて関連画面を開く。

すると、削除されていたはずのデータがすべて、元に戻っていた。

「さっすが、行動早いわね」

横から覗き込んだ由紀が、してやったり、の表情を浮かべる。

「で、お袋さん何だった？」

「話があるから、一度戻って来いって。南くんと一緒に」

驚いた昭太の声が、耳をかすめる。

由紀が小倉を追い返してから、まだ1時間も経っていないのに、処置が早すぎる。

警察の罨とも考えられなくはないが、もしそうならば、自分が由紀を同行させるようにいずみの母に頼むはず。

警察官だった亡き父の事件が遠因で、今回の組織を発動させたと聞いてはいたが……、自分らを牛耳る上の組織には、まだまだ謎が多そうだ。

「どうする？ 村上」

昭太がこちらを振り返る。

「そうだな。一旦戻って、片山の気持ちをきちんとご両親に伝えた方がいいだろう。病院へ行くのはそれからだな。由紀、お前も同行してくれ」

正樹の言葉にOKサインを出した由紀が、昭太、いずみとともに部室を出て行く。

「とりあえず、彼女の返事待ちだな。俺らは？」

「犯人の狙いが片山だとしても、今までから言って、江頭透子にも危険が及ぶかもしれない。俺らは相模市の病院へ先回りしよう。ほのかも」

「私も？」

思いもよらない言葉だったのか、ほのかが驚いて正樹を見上げる。

「相手は気の強いお嬢さんだ。仲の悪かった慎二はもとより、俺も正直、どうしていいかわからない。頼む」

「でも……」

ほのかは不安そうな表情のまま、目をそらす。

胸の前で組んだ手が不規則に動き、戸惑いをくつきりと示している。

今までほのかには、同年代の他人とはあまり関わらない仕事をあえて振って来た。

しかし今は非常事態。上層部が調査の続行を容認したとはいえ、『全責任を負う』と宣言した自分も、『マスコミ』という言葉をちらつかせて小倉を脅した由紀も、いつ何時警察に呼び出されるかわからないリスクを背負ってしまっている。

今回の事件では『行動隊長』の由紀が入院するというアクシデントも起き、表だって動けなかった昭太のことも思うと、自分と慎二だけでは心許なかったのも事実だ。

ここで、ほのかに一步踏み出してもらわなければ、今後、何かあった時に対処できない。

「村上。無理強いしても仕方がないぜ。とりあえず、俺たちだけで行かないか？」

うつむいたままのほのかを気づかう視線をやって、慎二が耳打ちする。

昭太たちがいずみの家に行つて了承をもらうまでにどれだけ時間がかかるかわからないが、交通機関の時間も考えると、一刻も早く行かなければならないか。

「わかった、行こう。ほのかはここで待っていてくれ」

「……待つて！」

慎二にうなずき、ドアノブに手をかけた正樹の背後から、ほのかの声がした。

「私も……行きます」

顔をこわばらせ、でも、強い決意をみなぎらせたほのかの目を見て、正樹はうなずいた。

56・母子

「ばっか野郎！」

怒声とともに、いずみの細い身体が昭太と由紀のいる路地の裏まで飛んで行った。

「ちょっと……片山さん、大丈夫！？」

すぐさま振り返った由紀が、いずみを抱き起こすために駆け寄る。

驚く昭太たちを尻目に、周りの買い物客はみな、『ああ。またか』みたいな表情を浮かべている。

「ったくお前は、どれだけ親に心配かけりや気が済むんだよ！」

「や、やめてください！ おじさん！」

目の前を素通りし、いずみと由紀の元へ向かう父、仙吉を後ろから止めようとするが、あっさりと押しのけられてしまう。

「話も聞かないでぶん殴ることないじゃないの」

「やかましい！ これは俺たち家族の問題だ！ 姉ちゃんはずっこんでろ！」

由紀をも押しのけ、仙吉が再びいずみの胸ぐらをつかんだ。振り上げられた手を、母、智子が止める。

「いい加減にしなさいよあんだ！ みんな見てるでしょうが！」

さっきまでの不安げな声音はどこへやら、母、智子がえらい剣幕で仙吉を怒鳴る。

すると仙吉は急に勢いをなくしていずみを離れた。しょんぼりとした彼を見て、昭太は思わず由紀と顔を見合わせる。

「ここ、かかあ天下みたいね」

耳打ちしてきた由紀に、昭太は無言でうなずいた。

「いずみ」

真っ赤に腫らした頬を押さえてうつむく娘に、母は、厳しい表情を崩さず呼びかける。

「あんたの身勝手な行動で、どれだけの人に迷惑がかかったか、わかってるね？」

うつむいたままのいずみは、何も答えない。

「あんたがアーチエリーを本当に好きなのは、お父ちゃんだってわかってる。でも、あんたが置かれた今の状況を考えて行動しなさい」

毅然と娘を叱る智子に、脅迫電話がかかって来たときのような弱々しさは感じられない。

これが、自分の知らない『母の強さ』なのだろう——不謹慎かもしれないが、昭太は、智子に殴られたいずみが少しだけ、うらやま

しいと感じた。

「……ごめんなさい、でも」

「でも、何？」

いずみの視線が、並んで立つ昭太と由紀に注がれる。

「突然すみません。私たち、片山さんの今後のことについてご相談したくて来たんです」

「今後の……相談、ですか？」

戸惑いの色を隠さない智子に向かって、昭太の隣に立つ由紀が、首を縦に振った。

気まずい空気が、狭い茶の間に流れる。

感情にまかせて物事を決める仙吉にはお引き取りいただいて、小さなちゃぶ台を囲んでいるのは昭太と由紀。そして由紀と向かい合うようにして智子が、隣にいずみが座っている。

「いずみの今後、とはどのようなことでしょうか？」

智子が、由紀に厳しい表情で問いかける。

「お母ちゃん、私、大会に出たいの。だから今、閉じこもっているわけには行かないんだ」

由紀よりも先に、いずみが母に訴え出る。

「さつきも言っただでしょう？ あんたが勝手なことをすれば、こうして迷惑がかかる人もいるのよ」

智子は、昭太と由紀を見渡して、呆れたように娘に向き直った。

「でも、私のせいで死んだ子がいるんだよ」

ちやぶ台の脇に手を添え、身を乗り出す形でいずみが言う。すると智子の顔が一変した。

「……覚えてるでしょ？ 三井あゆみちゃん。よく家に電話くれたじゃない。犯人は彼女の名前を利用して、私を呼び出したんだよ。それに」

いずみが言葉を切った。あふれ出てくる感情を飲み込むように、顔を下に向ける。

「昔、一緒に練習したことがある子だって、犯人が……」

顔を上げずに言ったいずみの言葉を聞き、昭太は思わず由紀と顔を見合わせた。

慎二の話だと、江頭透子と、殺された飯沼園子はそろってアーチエリークラブを移った。

話をしてくれた長野愛実のクラブは人間関係を重点に教えていたので、上のレベルを目指すには物足りない場所らしい、とも慎二は

言っていた。

いずみの所属していた『緑ヶ丘アーチェリークラブ』は、全国的にも有名なクラブだ。

彼女らは、そこに移籍したと考えるのが妥当だ。でなければ、部屋でいずみが透子に会わせて欲しい、と言うはずはないのだから。

「犯人の狙いは、私なんだよ。もし、このまま私が引きこもってれば、今度は誰を狙ってくるかわからない。だから」

「だからってあんたが、矢面に立つ必要はないでしょう!？」

智子が、いずみをさえぎって声を荒げる。

「じゃあお母ちゃんは、何も関係ない人が、これ以上巻き込まれてもいいってわけ!？」

「そうは言っていない。ただ、これ以上は警察に任せなさいって言うてるの。あんたが矢面に立てば、今度は、南くんが危険にさらされる可能性が高くなるの。そうしたら、今度は誰が悲しむと思う?」

いずみの目が、昭太を捉えた。しかしすぐ、気まずそうに目をそらす。

自分にはもう、肉親はいないと思っている。けれど彼女たちは、そうは思っていないのだ。

「俺はかまいませんよ。両親いませんから」

「昭太くん、それ本当なの!？」

いずみと智子より先に、由紀が驚いた表情で昭太を見つめる。

「あれ？ 由紀に言っただけだったか？ 俺、施設育ち」

由紀の目が、宙を泳ぐ。いずみも智子も、由紀と同じような目で昭太を見ていた。

「俺のことは気にしないでください。俺、いずみさんのやりたいようにさせてやりたい。だから今まで、ボディガードやって来たんですから」

「南くん……」

いずみの目に、涙が浮かぶ。由紀も智子も、何やら複雑な表情を浮かべ、じっとこちらを見ている。

「みんなして、そんな目で俺を見ないで下さいよ。恥ずかしいじゃないすか」

頭をかいてうつむいた昭太の横で、由紀が笑った。その後すぐに違う笑い声と鼻をすする音が聞こえ、いずみも泣きながら笑っているのだとわかる。

ほっとして顔を上げるが、由紀の前に座る智子は表情を変えぬまま、微動だにしない。

「お母ちゃん、お願い。私、どうしても、詩織ちゃんの願いを叶えてあげたいの」

いずみの口から詩織の名前が出たとき、再度、智子の表情がこわばった。

それを隠すように、きつく、瞳を閉じる。

「お母さん。いずみさんに何か、隠していらっしゃいませんか？」

すかさず、由紀が問いかける。唇を噛みしめたままつつむく智子を、いずみが不安げな面持ちで見つめていた。

57・慟哭

「お母ちゃん、もしかして、何か知ってることがあるの？」

たまらず、いずみが智子に問いかける。

いずみに秘密にしていることといえば、襲われた直後に脅迫電話があったこと。それはもちろん、由紀も知っている。

しかし、何か大きな秘密を抱えているような智子の表情が、昭太をも不安にさせる。

「植村詩織さんのことで、ご存知のことがあるんじゃないかもしれませんか？」

「そうなの？ お母ちゃん」

畳みかけるように訊ねた由紀を見て、いずみが智子に再度問いかけた。

何も言わないまま、智子が立ち上がった。一番隅にある引き出しを開け、白い封筒を持って来る。

いずみの前に、それが置かれた。

「それは？」

「詩織ちゃんからの、遺書です」

「……遺書」

「お母さん、詩織さんが自殺したことを知ってたんですか？」

昭太の問いに、智子がうなずいた。

「詩織ちゃんが自殺したと知ったのは、いずみがまだ留学したばかりの頃でした。いずみがよく遊びに行っていたのを知っていましたから、主人と相談して、事故死にしよう、と」

唇をかみしめたいずみが、目を伏せた。

泣かないように、でも、こらえきれない悲しみが、身体のかすかな震えとなってあらわれている。

「原因はいじめ、ですね？」

由紀の問いに驚いたのか、智子が顔を上げた。

「そう、聞いています」

そう口火を切った智子の言葉は、調査の中で知ったこととほぼ同じだったため、適度にあいづちを打つ。

しかしいずみは、目の前に置かれた白い封筒をじっと見つめたまま、動かない。

今まで見たことのないいずみの様子が、昭太の心に針のように刺さる。

「黙っててごめんね、いずみ。でも」

力なく、いずみは首を振る。開封した跡の見える封筒をそつと手に取ると、昭太の方に差し出した。

「読んで、くれる？」

消え入りそうな声で、いずみが言う。

手紙を受け取った昭太は、そつと便せんを開いた。小さいけれど丁寧に書かれた文字からは、何らかの決意があるように感じる。

「いずみちゃんへ」

昭太は大きく息を吸い、紡がれた文を声に出す。

『突然のお別れでごめんなさい。こんな私に、アーチェリーを教えてくださいがとう。いずみちゃん、いい選手になってね。空の上から応援しています。』

大きく上下し始めたいずみの肩に、智子がそつと手を置いた。

「お母ちゃん……」

涙に濡れた声ですがりつき、いずみは声をあげて泣き出した。

見ていられなくて、昭太は目を伏せる。

「……許せない」

絞り出すようにつぶやいた由紀に目を移す。クールな彼女にしては珍しく、唇をきつく結んでいる。

昭太も、由紀と同じ思いだ。母ひとり、子ひとりでささやかに暮らし、生き別れた父親に会いたいと願った少女の夢を、打ち砕いた人間たちがいるのだから。

『いじめ』という言葉では片づけられない。『殺人』と言い換えてもいいくらいだ。

しばらく泣いたのち、いずみが身体を起こす。

鼻をすすりながら、でも、智子を見つめる横顔に、迷いはない。

「私、詩織ちゃんの無念をこの手で晴らしたいの。正々堂々その子たちと勝負して、詩織ちゃんのお父さんに、彼女のことを伝えたい。だから大会に出させて。お願い」

いずみが、床に手をついた。

「俺も、隣にいる由紀も……いや、新聞部全員で彼女をバックアップしよう決めました。だから、許してやってください。お願いします」

いずみに続いた昭太が頭を下げると同時に、由紀も頭を下げるのがわかった。

大きなため息が、耳をかすめる。

「南くん」

「……はい」

顔を上げた昭太を、智子がじっと見つめてくる。

「母親って言うのはね、娘が危険な方へ進んでいくのを見るのは、自分の身を切られるよりもつらいものなの。それは、わかってくれるわね？」

智子から目をそらさずに、昭太はうなづく。

「でも……いずみの意思が固いのなら、それを尊重するのも、親の役目ですね」

「お母さん……」

智子を見る由紀の声が、かすかに震えている。

「南くん、添嶋さん。娘を……よろしくお願いします」

「お母ちゃん。……ありがとう」

顔を上げたいずみの頬を、また、涙が伝って落ちる。

「何泣きべそかいてるのよ。変な成績とつたら……家に入れないからね」

昭太はホッとした。と同時に、犯人に対して、これ以上いずみには指一本近づかせない、という新たな闘志が芽ばえてくるのがわかる。

「南くん。そろそろ」

「そうだな」

由紀に促され、昭太は立ち上がる。

「病院、行くの？」

昭太がうなずくと、いずみも立ち上がった。

「あんた、どこ行くのよ」

「友達の病院。大丈夫。ふたりから絶対に離れないから」

不安そうに見上げる智子に、いずみが答える。

「なるべく早く帰ってきなさいよ。お父ちゃんも心配するから。じや、よろしくお願いします」

頭を下げてくる智子に一礼して、昭太は、由紀といずみとともに裏玄関からそつと抜け出す。

「ふたりは病院行くんでしょ？ 私、調べたいことできたから別行動するわ」

バス停へ向かおうとした昭太たちとは別方向に足を向け、由紀が手をあげる。

「おい、どこ行く気だ？」

「源^{げん}さんのところ。訊きたいことがあるのよ」

「源^{みなもと}さんのところ？」

昭太は思わず、いずみと顔を見合わせる。

「添嶋さん、源さんを知ってるの？」

「うん、私の親父様の親友でフリーカメラマン。この事件を調べてたらしいの」

「知ってる。詩織ちゃんの家で、お母さんと押し問答もしてたし」

「押し問答？」

いずみがうなずく。

「お母さんは、これ以上さらし者になりたくないって、源さんを追い返そうとしたの。その後に、私が訊きたいことがあるからって。家で取材受けたの」

「そう……それなら、昭太くんたちもこっち来る？ 江頭さんのことは、村上と慎二くんにまかせておいて」

「そうだな。俺たちもそっち行くよ。お前もひとりにはしとけないんだから」

「わかった。じゃ、村上に連絡しとくわね」

昭太といずみにうなずき、由紀が事の次第を電話で話している。

「じゃ、よろしくね。……行こっか」

普段と変わらない様子で、由紀が振り返る。

うなずくいずみの横顔が、心なしかこわばっているように昭太には見えた。

58・再会

「了解。じゃ、気をつけろよ」

昭太らより早く部屋を出てから、約30分後。

相模市にある市立病院のロビーで立ち尽くすほのかの隣で、正樹が携帯電話を切った。

「別件で動くって？ あいつら」

「ああ。由紀の親父さんの知り合いのフリーカメラマンの人に話を聞きたいそうだ」

正樹の言葉に、あの人も事件について調べてるらしいからな、と慎二がつぶやく。

しかし、初めて聴取に同行するほのかは、その話を聞いている余裕がない。

しかも相手は、心を閉ざしている透子だ。

正樹が慎二が話を切りだしてくれるとは思っが、知りたいことをうまく引き出せるか、自信がない。

「ほのか。顔色悪いぞ。大丈夫か？」

正樹が心配そうに、顔を覗き込んでくる。

「緊張するのも無理ないさ。初めての相手が江頭だし。なあ？」

ほのかは素直にうなずく。今まで、何もしていなかったと言っても過言ではない自分に、事件の被害者に話を聞くという大役がのしかかって来たのだ。

やはり、部室に残ると言えばよかった——ほのかは、自身の行為を悔いて目を伏せた。

「ほのかのやりたいようにやればいい。たとえ訊きたい話が聞けなくても、きっと何かが見えてくるさ」

正樹の手が、ほのかの肩を力強く叩いてくる。

「そ！俺らだってその繰り返しなんだから」

思いもよらぬ慎二の言葉に、ほのかは思わず顔を上げる。

「……そうなの？」

「当たり前じゃん。百戦錬磨の由紀はともかく、俺たちだって、失敗しちゃ自己嫌悪の繰り返しよ。な、村上」

くだけた物言いで肩を叩いた慎二に、正樹が苦笑いを浮かべながらうなずく。

緊張しているのは自分だけじゃなかったのだと知り、ほのかの身体から、余計な力が少しだけ抜けるのがわかった。

励ましてくれる二人に背中を押され、やるだけのことはやろう、

と思いエレベーターに乗り込む。

しかし、電光掲示板の階数上がるたび、ほのかの胸の鼓動が大きくなる。

透子の入院している階に、エレベーターが到着した。

あまり人の往来がない廊下に、ほのかたちの足音だけがひびく。

透子の病室の前に来た。慎二が恐る恐るのぞくが、ベッドの周りのカーテンは開きっぱなしで、透子の姿は見当たらない。

「あら？ 透子ちゃんのお友達？」

病室を覗き込むほのかたちの背後から、驚いたような、でも、ほっとした色を含む声が聞こえた。

振り返ると、白衣を着て、あごのラインまでの髪にゆるいパーマをかけている、ぽっちゃりした体型の看護師が、笑みを浮かべて近づいてきた。

「ええ、まあ。あの、透子さんはどちらに？」

「屋上。あの子ね、入院してから誰も、一度もお見舞いに来ないのよ」

「一度も……ですか」

正樹が話を合わせる。すると看護師は寂しそうにうなずいた。

「あの子、気は強いけど素直な子よ。なのに……」

ほのかの横にいた慎二が、信じられないといった表情で看護師を見つめる。

「呼んで来てあげましょうか？」

「いえ。僕たちが行きますから。どうもありがとうございます」

深くお辞儀をした正樹に微笑んで、看護師は今来た道を戻っていく。

「……やっぱり、信じられないんだよなあ。江頭が素直な奴だってことが」

壁にもたれて、慎二が大きなため息をついた。

「飯沼さんが変えてしまった、って言うてたんでしょう？ 長野さんが」

ほのかの問いに、慎二が何度か小さく縦に首を振る。

「屋上、行ってみるか。慎二はどうする？」

「俺、下のコーヒショップ行ってるわ。やっぱり、あいつに会ったやだ」

よほど仲が悪かったのか、渋い表情の慎二が、エレベーター横の下矢印のボタンを押す。

正樹はその横の、上矢印のボタンを押した。

「もし、南たちが来たらすぐに連絡くれよ」

「了解」

ほぼ同時期に、エレベーターの扉が開いた。親指を立てた慎二と別れ、ほのかは正樹とともに右側のエレベーターへ乗り込む。

「いいかほのか、話を聞くために多少の嘘はやむを得ないが、あまり風呂敷を拡げすぎるなよ」

正樹のアドバイスに、ほのかがうなずくとすぐに扉が開き、真っ赤な夕焼けがまた目に飛び込んできた。

正樹のあとについて、外へと続く扉から表へ出る。しかし、透子はどこにもいない。

いやな予感にさいなまれたほのかは、先日透子が立っていた、すぐ近くの手すりに向かって駆けだす。

身を乗り出して下を確認するが、人が飛び降りたような形跡はない。

「どこに行っちゃったんだろうな。彼女」

反対側を捜した正樹も、不安そうな面持ちで視線を動かす。

その直後、再度中からの扉が開いた。

「あなた、この前の……」

ほのかを認めた透子が、驚いた表情でこちらを見つめてきた――。

59・犯人像

「いらっしやい」

由紀の父が編集長を務める『WAVE』の編集部の入っている小さなビルの一室で、源の穏やかな声が、昭太たちを迎え入れた。

「それにしても由紀ちゃん、ここ2、3日どこほつつき歩いてたんだ？」

「ごめん。慣れないことしたもんだから具合悪くなって、病院行って点滴打ってもらったりしたのよ」

顔の前ですまなそうに手を合わせながらも、由紀は平然と答える。昭太にしてみればいつ、自分らのことが目の前の初老の男にばれるかと思うと、冷や汗ものだ。

「久士に心配かけるようなこと、するんじゃないぞ」

「はい。これから気をつけます」

殊勝に返事をする由紀を初めて見る。それほどこの男は、由紀に多大な影響を与えているのだろう。

「で、訊きたいことって何だい？」

源が入れてくれたインスタントコーヒーの香りが、わずか4畳ほどの狭い室内に充満する。

「詩織さんのお母さんのこと。源^{げん}さん、さらしものになりたくないって追い払われたんだって？」

源が一瞬、昭太に目線を投げかけてきた。しかし何を言うわけもなくうなずく。

「詩織さんが自殺した事件の前にも、お母さんと何かあったわけ？」

「ああ。詩織さんが生まれる前に、取材する上での行き違いがあった
て」

由紀の問いに答える源の表情に、変化はない。ところが。

「もしかして源^{みなもと}さん、本当は詩織ちゃんのお父さんが誰か、ご存じ
なんじゃないですか？」

突然のいずみの問いに、源の顔がかすかにこわばる。

「そうなの？ 源さん」

「ええ。知っていますよ。私があの日あなたに訊いたのは、詩織さん
がお父さんのことを知っていたかを知りたかったからなんです」

立ち上がった源は、たくさんの雑誌がある書棚から、ずいぶん古い
ものを1部、昭太たちの前に差し出した。

「これは？」

「15年前、私がスクープを取った記事です。しかしこれが、あの
母子の……いや、一家の運命を狂わせてしまったんです」

由紀が最初に雑誌を手につった。文字を追う彼女の目が、ある一点で止まった。

「……横田、良彦」

良彦、といえば、乾と同じ名前だ。

「この横田って人が、詩織さんのお父さんなんですか？」

源に訊ねたあと、昭太はいずみに視線を向ける。

唇を少しへの字に曲げて小さく息を吐き切ると、観念したようにいずみはうなずいた。

「ね、この横田って人は今何してるの？」

雑誌を手にしたまま、由紀が訊ねる。

「それが、その記事が出たあと行方がわからないんだ。家族と縁を切って外国へ行ったとか、色々噂はあるんだがな」

由紀が机に置いた雑誌を、昭太はいずみと一緒に目を通す。

『アーチエリー界のプリンスの純愛。安定した生活を捨てた末にたどりついた、ささやかな幸せ』

さすが15年前の記事だ。今なら笑われそうな、芝居がかったタイトルに吹き出しそうになりながら、記事の上にある家族写真に目をとめた。

「…………あれ？」

モザイクのかかった、2歳くらいの女の子を抱いた女性の横で微笑む男の横顔……どこかで、見覚えがあるような気がする。

「乾先生に、似てる」

いずみが、独り言のようにつぶやく。そう言われてみれば、高い鼻のラインや、あごの線なんかはそっくりだ。

「じゃ、その人の家族は？」

由紀が食い下がる。

「父親はとうに死んでいる。その良彦さんも含めて子供が5人。全員教師、もしくは有名省庁に勤めるエリート一家だ」

「そのうちのひとり……青陵高校に勤めてない？」

「青陵高校？」

由紀の言葉に反応したのは、いずみだ。

「よく知ってるな。一番上の兄で、エリート志向がかなり強い男だ。詩織さんの自殺の原因を作った事故へのかん口令は、その兄が青陵の校長から裏に手を回してもらって、マスコミに圧力をかけてきたともしばらの噂だ」

すでに湯気の上がつていないコーヒーをすすり、源が答える。

「その男……横田先生と青陵の校長って、もしかしてデキてるの？」

「横田はもともと、あの学校の副校長だったんだ。事件の責任を取る形で副校長を降りたが、校長の強い慰留で教師におさまった。ま、そういう関係になってもおかしくはないな」

「思いつきり『伏魔殿』じゃないの。いやらしいったら」

いつになく低い声で、由紀が吐き捨てる。相当頭に来ているらしい。

記事に目を通すいずみの表情が、いつになくこわばっている。

「どうした？ 何か気になることでもあるのか？」

「詩織ちゃんのお父さんは……彼女が自殺したことを知ってるのかな」

こつちを見ずに答えたいいずみを見る昭太の頭を『何か』がかすめて消える。

「もし、日本にいればわかってるでしょうね。……どうしたのよ、昭太くん」

いずみの問いに答えた由紀が、不思議な物を見るような顔で訊ねてきた。

「いや……」

脳裏の向こうに消えた『何か』を探そうと目を閉じるが、かすかな違和感が残ったままだ。

「源さんは、お子さんがいらっしゃるんですか？」

またも突然のいずみの質問に、源が今度は目を見開く。

「いえ。でも、なぜ？」

「もし源さんがこの人と同じ立場になったら……娘さんを自殺に追い込んだ犯人に、復讐したいと考えますか？」

『怨恨』——なぜかこの言葉が、昭太の脳裏にはじけた。

犯人が射抜いたのは、被害者の左肩。詩織がけがをしたのも同じ。

詩織が自殺したのは夕暮れ時。被害者が襲われたのも……同じ。

今回の被害者が、詩織を絶望の淵に追いやったであろうことは想像していた。

しかし、この共通点が、今までおぼろげにすら見えていなかった犯人像を、昭太の脳裏にくっきりと浮かび上がらせる。

昭太はもう一度、詩織が写っている古い週刊誌に、目を落とした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2383b/>

ウィングリサーチ ~ Hated Arrows ~

2010年10月11日20時58分発行